

『吾輩は猫である』対訳 (于雷訳)  
「から」「ので」を用いる日本語原文とその中国語対訳

注：分類欄に記載されている記号は次の意味を表す。  
A=「原因・理由を表すもの」、B=「接続機能を持つもの」、C=「無標」

原文		訳文		対訳	接続語No
ページ	会話文	ページ	会話文		
6		3	没法子。◆只得◆朝着亮堂堂、暖和些的地方走去。	B	B-8
7		3	咳，这下子没命喽！两眼一闭，一命交天吧！	C	C
8		5	这倒不是由于咱家对主人格外钟情，而是◆因为◆没人理睬，迫不得已嘛！	A	A-1
8		5	万般无奈，咱家◆只好◆尽量争取陪伴在收留我的主人身旁。	B	B-9
10		6	◆既然◆是任情而思，那◆就◆讲讲我家主人由于任情而动的惨败故事吧。	A	A-22
12		9	◆因为◆除此之外他再也不知道还有什么骂人的脏话，有什么办法！	A	A-1
12		9	连眼睛应该拥有的部位都没有，可◆就◆弄不清是睡猫还是瞎猫了。	B	B-1
12		9	已经到了刻不容缓的地步。不得已，只好失陪。咱家双腿用力朝前一伸，把脖子低低一伸，“啊”的打了一个好好的呵欠。	C	C
12		9	不错，这是一幅睡态写生画嘛，倒也没的可爱。	C	C
12		9	反正已经打乱主人的构思，索性趁机到房后去方便一下吧！于是，咱家慢条斯理地爬了出去。	C	C
13		11	如不赔礼，可就小命难保，◆因而◆尽力故作镇静，冷冷地回答说：“咱家是猫。名字嘛……还没有。”	A	A-35
13		11	身为猫中大王，嘴里还干不干净的！无奈它语声里充满着力量，狗也会吓破胆的。咱家很有点战战兢兢。	C	C
14		12	不过，◆正因为◆它住在车夫家，才光有力气而毫无教养，◆因此◆，谁都不和它交往。	A	A-47
15	「君などは年が年である*から*大分とっただろう」	13	“老兄德高望重，一定捉过很多老鼠吧？”	C	C
15		13	不过，事实毕竟是事实，不该说谎，咱家◆便◆回答说：“说真的，一直想抓，可还没有动手哩！”	B	B-2
15		13	自从和他混熟以来，咱家立刻掌握了这个诀窍。像现在这种场合，倘若硬是为自己辩护，形势将越弄越僵，那可太蠢。	C	C
16	「…君はあまり鼠を捕るのが名人で鼠ばかり食うもの*から*そんなに肥って色つやが善いのだろう」	14	您捕鼠可是个大大的名家，◆就因为◆净吃老鼠，◆才◆胖得那么满面红光的吧？”	A	A-51
16	「…交番じゃ誰が捕ったか分らねえ*から*そのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。…」	14	警察哪里知道是谁抓的？不是说送一只老鼠五分钱吗？	C	C
16		14	◆由于◆心头不快，◆便◆见机行事，应酬几句，回家去了。	A	A-16
17		15	喝喝饭店的酒，或是逛逛艺妓茶馆，◆就◆能够成为花柳行家吗？假如这个理论站得住，那么，我也有理由说我能成为一出出地的画家喽！	B	B-1
18	「いや時々冗談を言う*と人*が真に受ける*ので*大に滑稽的美感を挑撥するのは面白い。…」	17	“噢，常常是几句玩笑人们就当真，这能极大地激发起滑稽的美感，很有意思。”	C	C
20		19	咱家◆因◆吃不到美味，没有怎么发胖。	A	A-10
20		19	欲望无止境嘛！但愿住在这位教师的家，以无名一猫而了此平生！	C	C
20		20	新春以来，咱家也有了点名气。别看是猫，却也趾高气扬。可喜，可贺！	C	C
21		20	◆既◆已钦佩，以为他会就此罢休。不料，他仍然在横看竖瞧瞧；	A	A-29
21		21	然而，人嘛，毕竟不是天赐灵犀的动物，不懂我们猫族的语言。那◆就◆对不起，不理算了。	B	B-1
21		20	主人大概是尽管对那张彩绘明信片的神色大加赞扬，却还不清楚画面上那只动物是个什么，◆因此◆，一直在凝思冥想。	A	A-37
22		21	但据说，人类眼皮只往上翻，两眼望苍空。◆那么◆，不要说对我们的性格，就连对我们的相貌也始终辨认不清，实在可怜！	A	A-39
22		22	何况，说实话，人类并不像他们自信的那么了不起，这◆就◆更难上加难了。	B	B-1
22		22	更何况我家主人流，连同同情都没有，哪里还懂得“彼此深刻了解是爱的前提”这些道理？还能指望他什么？	C	C
22		22	其实，他并不达观，证据如下：分明是我的肖像摆在他的眼前，他却丝毫不认，还装模作样，胡诌八扯地说：“今年是日俄战争的第二年，大约画的是一只熊吧！”	C	C

原文		訳文		対訳	接続語No		
ページ	会話文	地の文	ページ			会話文	地の文
23		吾輩は骨屋の梅公がくる時の外は出ない事に極めているのだ*から*、平気で、もとの如く主人の膝に座っておった。	23		按老规矩, 除非鱼贩子梅公登门, 咱家是不必出迎的, ◆因此◆, 仍然泰然自若地蹲在主人的膝盖上。	A	A-37
24	「…。実は去年の暮から大に活動しているものです*から*出よう出ようと思っても、ついこの方角へ足が向かないので」		24	「…说真的, 从去年年末以来, 一直大忙特忙, 几次想来, 两只脚却终于没有朝这个方向迈步。」		C	C
25		どっちにしたって明治の歴史に關係する程な人物でもないのだ*から*構わない。	25		管他事出何因, 反正算不上与明治史有关的人物, 也◆就◆无所谓了。	B	B-1
25	「どうも好い天気ですな、御閑なら御一所に散歩でもしましょうか、旅順が落ちた*ので*市中は大変な景色ですよ」		26	「多么好的天气呀! 闲下如果有暇, 何妨一同出去遛遛。日军已经攻克旅顺, 街上可热闹哪!」		C	C
26		主人の服装には師走も正月もない。ふだん着も余所ゆきもない。出るときは懐手をしてぶらりと出る。外に着る物がない*から*、有っても面倒だから着換えないのか、吾輩には分らぬ。	26		主人的服装, 没有年末与岁初之分, 也没有便装与礼服之别。离家时, 他袖起手来, 信步而去。他是没有外衣呢? 还是虽有却嫌麻烦, 不肯换? 咱家不得而知。	C	C
26		主人の服装には師走も正月もない。ふだん着も余所ゆきもない。出るときは懐手をしてぶらりと出る。外に着る物がない*から*、有っても面倒だ*から*着換えないのか、吾輩には分らぬ。	26		主人的服装, 没有年末与岁初之分, 也没有便装与礼服之别。离家时, 他袖起手来, 信步而去。他是没有外衣呢? 还是虽有却嫌麻烦, 不肯换? 咱家不得而知。	C	C
26		いつもの様に砂糖を分配してくれるものがない*ので*、大きい方がやがて蓋の中から一匙の砂糖をすくい出して自分の皿の上へあげた。	27		◆因为◆没有人像往常那样给他俩分糖, 不多时, 那个大个的就从糖罐里舀出一匙糖来, 撒在自己的碟里。	A	A-1
27	「でもあなた澱粉質のものには大変機能があるそうです*から*、召し上ったらいいでしょ」		28	「不过, 你吃淀粉质, 似乎大见功效呀! ◆还是◆吃了吧!」		B	B-10
27		吾輩の言う事などは通じないのだ*から*、気の毒ながら御櫃の上から黙って見物していた。	27		咱家的话他们听不懂, 虽然遗憾, 只得蹲在饭桶上默默观赏了。	C	C
28		こんどきに後からくっついて行つて膝の上へ乗ると、大変な目に逢はされる*から*、そつと庭から廻つて書斎の縁側へ上つて障子の隙から覗いて見ると、主人はエビクタスとか云う人の本を披いて見ておった。	29		这种场合, 咱家如果跟进去, 爬上主人的膝盖, 肯定要倒霉的。咱家◆便◆人不知鬼不觉地从院内绕路爬进书房的檐廊。从门缝往里一瞧, 主人正打开爱比克泰德的书在读哩!	B	B-2
28		人間はこう自惚れている*から*困る。	29		人类竟然如此自负, 真没办法。	C	C
29		但しその声は旅鴉の如く皺枯れておつたので、切角の風采も大に下落した様に感ぜられた*から*所謂源ちゃんなるもの如何なる人なるかを振り向いて見るも面倒になつて、懐手のまま御成道へ出た。	30		她的语声像乌鸦悲啼一般沙哑, 使她那难得一见的风韵大为减色。◆甚至◆叫人懒得回头瞧瞧她所谓的源哥乃何许人也。我依然袖着手, 向官道①走去,	C	C
29		我等猫属に至ると行住坐臥、行屎送尿悉く真正の日記である*から*、別段そんな面倒な手数をして、己れの真面目を保存するには及ばぬと思う。	30		至于我们猫族, 行走、坐卧、拉屎撒尿, 无不是真正的的日记, 没有必要那么煞费心机, 掩盖自己的真面目。	C	C
29		但しその声は旅鴉の如く皺枯れておつた*ので*、切角の風采も大に下落した様に感ぜられた*から*所謂源ちゃんなるもの如何なる人なるかを振り向いて見るも面倒になつて、懐手のまま御成道へ出た。	30		她的语声像乌鸦悲啼一般沙哑, ◆使◆她那难得一见的风韵大为减色。甚至叫人懒得回头瞧瞧她所谓的源哥乃何许人也。我依然袖着手, 向官道①走去,	B	B-5
30		美学者の迷亭がこの体を見て、産氣のついた男じゃあるまいし止す方がいいと冷かした*から*この頃は廃してしまつた。	32		美学家迷亭见我这般模样, 嘲笑地说: 你又不是临产的孕男, 还是算了吧! ◆于是◆, 近来已经作罢。	A	A-38
30		先達て〇〇は朝飯を廢すと胃がよくなると云う*から*二三日朝飯をやめて見たがぐうぐう鳴るばかりで機能はない。	31		前些时听人说, 早饭断食, 即可医胃, 我◆便◆免了早餐一試, 直落得腹内咕咕叫, 却毫无功效。	B	B-2
30		坂本竜馬の様な豪傑でも時は治療をうけたと云う*から*早速上根岸まで出掛けた。	31		据说连坂本龙马③那样的豪杰也常去按摩。我◆便◆急忙去上根河畔求人试	B	B-2
30		後で身体が綿のようになって昏睡病にかかった様な心持がした*ので*、一度で閉口してやめた。	31		按摩后, 身子像棉花团似的, 仿佛患了昏睡症。◆所以◆, 只按摩一次就告饶, 不敢致教了。	A	A-38
31		その上日記の上で胃病をこんなに心配している癖に、表面は大に瘦我慢をする*から*可笑しい。	32		而且, 他◆既然◆在日记里那么担心自己的胃病, 表面上却又打肿脸充胖子,	A	A-21
31		「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だったぜ」とあたかもカーライルが胃弱だ*から*自分の胃弱も名譽であると言つた様な、見当違いの挨拶をした。	32		你的说法倒很有趣。不过, 那位卡莱尔①也曾害过胃病哟!”这话仿佛在说: ◆既然◆卡莱尔害胃病, ◆那么◆, 我害胃病自然也很体面。他回答说牛头不	A	A-25
31		C先生は蕎麦を食つたらよからうと云う*から*、早速かけともりをかむがわる食つたが、これは腹が下ばかりで何等の機能もなかった。	32		C先生说: 吃荞面条也许会好。◆于是◆, 我便一碗接一碗地快速吃起清汤荞面条。然而, 这使我总是拉肚, 毫不见效。	A	A-38
31		然し自分が胃病で苦しんでいる際だ*から*、何とかかんとか弁解をして自分の面目を保とうと思つた者と見えて、	32		但他似乎觉得自己正害胃病, 很遭罪。◆总◆得逞上几句, 辩解一番, 以便保全面子。	B	B-15
31		すると友人は「カーライルが胃弱だって、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極め付けた*ので*主人は黙然としていた。	32		于是, 那位朋友说: “虽然卡莱尔也害过胃病, 但害过胃病的, 未必都能成为卡莱尔。” ◆由于◆训斥得不容置辩, 主人哑口无言了。	A	A-15
32		バルザックは兼ねて自分の苦心している名を目付けようという考えだ*から*往來へ出ることもしないので店先の看板ばかり見て歩いている。	33		而巴尔扎克一直想发现一个自己搜索枯肠也未管得的人物名字。◆因此◆, 他走在大街上别无他事, 一心观看	A	A-37
32		ところへ友人が遊びに来た*ので*御一所に散歩に出掛た。	33		赶巧朋友来玩, ◆便◆一同出去散步。	B	B-2

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
33		だから今雑煮が食べたくなつたのも決して贅沢の結果ではない、何でも食える時に食って置こうという考から、主人の食い剩した雑煮がもしや台所に残ってはいすまいかと思ひ出した*から*である。	34		因此，如今想吃年糕，绝非贪饕的结果，而是从“能吃便吃”的观点出发。咱家思付，主人也许会有吃剩的年糕放在厨房里，	C	C
33		この位力を込めて食ひ付いたのだから*、大抵なものなら噛み切れる訳だが、	35		使出这么大的力气呵住，按理说，差不多的东西都会被咬断的。	C	C
34		要するに振り損の、立て損の、蘇かし損であると気が付いた*から*やめにした。	36		想来，耳朵和尾巴都与年糕无关，摇尾竖耳，也都狂然，◆所以◆干脆作罢算了。	A	A-36
34		餅がくっ付いてる*ので*毫も愉快を感じない。	36		但◆因◆年糕粘住牙，一点也不高兴。	A	A-10
35		倒れかかる度に後足で調子をとらなくてはならぬ*から*、一つ所に居る訳にも行かん*ので*台所中あちら、こちらと飛んで廻る。	36		必须用后爪调整姿势，◆又◆不能总站在一个地方，只得在厨房里到处转着圈儿跑。	B	B-4
35		前足の運動が猛烈な*ので*稍ともすると中心を失って倒れかかる。	36		◆由于◆前爪用力过猛，常常失重，险些跌倒。	A	A-15
35		漸く笑いがやみそうになったら、五つになる女の子が「御かあ様、猫も随分ね」といった*ので*狂瀾を既倒に何とかするという勢で又大変笑われた。	37		总算大家都不再笑。可是，就怪那个五岁的小女孩说什么：“妈呀，这猫也太不成体统了。”◆于是◆，势如挽狂瀾于既倒，又掀起一阵笑声。	A	A-15
35		倒れかかる度に後足で調子をとらなくてはならぬ*から*、一つ所に居る訳にも行かん*ので*台所中あちら、こちらと飛んで廻る。	36		必须用后爪调整姿势，又不能总站在一个地方，◆只得◆在厨房里到处转着圈儿跑。	B	B-8
36		三毛子は正月*から*、首輪の新しいのをして行儀よく縁側に坐っている。	38		◆因为◆是正月，只见花子小姐戴着新项链，在檐廊下端庄而坐。	A	A-1
36		ことによく日の当る所に暖かそうに、品よく控えているもの*から*、身体は静肅端正の態度を有するにも聞らず、天鷲毛を敷く程の滑らかな満身の毛は春の光りを反射して風なきにむらむらと微動する如くに思われる。	38		尤其在阳光充足的地方暖煦煦地正襟危坐，尽管身姿显得那么端庄肃穆，而那光滑得赛过天鹅的一身绒毛，反射着春日阳光，令人觉得无风也会自然地颤动。	C	C
36		どうも痛い痛くないのって、餅の中へ堅く食い込んでいる歯を情け容赦もなく引張るのだから*から*堪らない。	38		若问疼不疼，这么说吧，已经扎扎实实咬进年糕里的牙齿，竟被那么狼歹歹地一拉，怎能受得住？	C	C
36		細君は踊は見たいが、殺してまで見る気はない*ので*黙っている。	37		女主人虽然还想瞧瞧猫舞的热闹，但并不忍心叫猫跳死，◆便◆没有做声。	B	B-2
37		吾輩は前回断つた通りまだ名はないのであるが、教師の家に居るものだから*から*三毛子だけは尊敬して先生々々といってくる。	39		前文已经声明，咱家还没有个名字，但◆因◆住在教师家，总算有个花子小姐表示敬重，口口声声称咱家为“先生”。	A	A-10
37		吾輩も先生と云われて満更悪い気持ちもしない*から*、はいはいと返事している。	39		咱家也被尊一声“先生”，自然心情不坏，◆便◆满口答应：	B	B-2
37		吾輩が笑うのは鼻の孔を三角にして咽喉仏を震動させて笑うのだから*人間にはわからぬ筈である。	40		不过，猫笑是将鼻孔弄成三角形，声振喉结而笑，人类自然不懂。	C	C
38		「ええ」と仕方ない*から*降参をした。	41		“是啊！”“有什么办法，◆只好◆服气。”	B	B-9
38		六十二で生きている位*から*丈夫と云わねばなるまい。	40		竟然活了六十二岁，不能不说硬朗。	C	C
39		「あら御師匠さんが呼んでいらっしやる*から*、私し帰るわ、よくて？」	41		“哟，师傅在叫我哪，我要回去了，行吗？”	C	C
39		話しをされると面倒だ*から*知らぬ顔をして行き過ぎようとした。	42		觉得搭讪起来太絮叨，◆便◆假装没看见走过去。	B	B-2
39		説明して遣りたいが到底分る奴ではない*から*、先ず、一応の挨拶をして出来得る限り早く御免蒙るに若くはないと決心した。	42		想讲给他听，可他毕竟不是个懂事的家伙，◆便◆决定客套几句之后，尽快地溜之大吉。	B	B-2
40		参考の為め一寸聞いて置きたいが、聞いたって明瞭な答弁は得られぬに極まっている*から*、面と対つたまま無言で立っていった。	43		本想问问，求他指教。又一想，即使问，也不会得到明确答复的，◆便◆无言地相对而立，显得十分尴尬。	B	B-2
41		「…牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだ*から*始末に終えねえ阿魔だ」	44		向左邻右舍炫耀一番——‘牛肉一斤哟！’真他妈是个难缠的母夜叉！”	C	C
41		「それで面白い趣向がある*から*是非一所に來いと仰しやるので」	45		“迷亭先生说，一定会妙趣横生，一定要我随他一同前往。所以……”	C	C
41		主客の対話は途中からである*から*前後がよく分らんが、	45		◆因为◆半路才听，对宾主对话的来龙去脉不太清楚；	A	A-1
41		主人の手あぶりの角を見ると春慶塗りの巻煙草入れと並んで越智東風君を紹介致候水島寒月という名刺がある*ので*この客の名前も、寒月君の友人であるという事も知れた。	44		主人的手炉旁和涂了春庆牌油漆的烟盒并排放着一张名片，上写：“谨介绍越智东風君，水島寒月”。◆由此◆，咱家知道了客人的名字，也知道了他是寒月先生的朋友	A	A-51
42		「…ボイは月並という意味が分らんものです*から*妙な顔をして黙っていましたよ」	45		堂信不解俗调为何意，做了个怪相，不再吭声。”	C	C
43		「それから、とてもなめくじや蛙は食おうって食えやしない*から*、まあトチメンボ一位なところで負けとく事にしようじゃないか君と御相談なさるものです*から*、私はいつ何の気なしに、それがいいでしょう、とってしまったので」	46		后来迷亭先生对我说：“咱们商量一下，煮蛞蝓啦，炖青蛙啦，再怎么馋，也吃不到嘴里。那就掉点价，吃点橡面坊丸子如何？”◆因为◆他说和我商量，我◆便◆随声附和地说：“那好吧！”	A	A-3
43		「それから、とてもなめくじや蛙は食おうって食えやしない*から*、まあトチメンボ一位なところで負けとく事にしようじゃないか君と御相談なさるものです*から*、私はいつ何の気なしに、それがいいでしょう、とってしまったので」	46		后来迷亭先生对我说：“咱们商量一下，煮蛞蝓啦，炖青蛙啦，再怎么馋，也吃不到嘴里。那◆就◆掉点价，吃点橡面坊丸子如何？”因为他说的和我商量，我便随声附和地说：“那好吧！”	B	B-1
43		「さあ私も少し可笑しいとは思いましたが如何にも先生が沈着であるし、その上あの通りの西洋通でいらっしやるし、ことにその時は洋行なすつたものと信じ切っていたものです*から*、私も口を添えてトチメンボ一だトチメンボ一だとボイに教えてやりました」	47		当时我也觉得有点稀奇。可是迷亭先生却十分沉着，何况又是那么一位西洋通，更何况我当时完全相信他去過外洋，◆便◆为他帮腔，告诉堂信说：“橡面坊丸子就是橡面坊丸子！”	B	B-2



原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
55	「無名氏の作にも随分善いのある*から*中々馬鹿に出来ない。…」		61	无名氏作品也有很好的佳作, 可不能小瞧哟!		C	C
56	「…山陽が馬子の書いた借金の催促状を示して近來の名文は先ずこれでしょうと云ったという話がある*から*、君の審美眼も存外儲かも知れん。…」		62	山阳先生拿出马夫写的讨债单说: '近來妙文, 当首推此篇。' ◆所以◆我想, 说不定你的审美观还很不错呢。		A	A-36
56	「…君は声が善い*から*中々面白い」		62	你的嗓音很好, 听起来蛮有趣的。		C	C
57	「…實際うまい*から*訳してみたのさ、…」		63	◆因为◆真好, ◆才◆想翻译过来。		A	A-2
57	「…只面白い文章だと思った*から*訳してみたばかりさ」		63	◆只是◆觉得文章有趣, ◆才◆试译一下罢了。		A	A-34
57	「…僕も近頃は水彩画をやめた*から*、その代りに文章でもやろうと思つてね」		63	我近来不再画水彩画了, 想写写文章。		C	C
57	「…あの越智東風と云う男は至て正直な男ですが少し変つているところがある*ので*あるいは御迷惑かと思いましたが、…」		64	越智东风君是个非常正直的小伙子。不过, 有一点古怪, 我想一定会给你添麻烦的。		C	C
58	「それが全く文学熱から来たので、こちと読むと遠近と云う成語になる、のみならずその姓名が韻を踏んでいると云うのが得意なんです。それだ*から*東風を音で読むと僕が切角の苦心を人が買ってくれないといつて不平を云うのです」		64	这完全来源于文学热。把东风读成KOCHI, 就成了'远近'这一成语, 而且押上了韵, 他非常得意。◆因此◆他说: '如果把东风二字用拼音方法来读, 我的一片苦心, 就付之东流了。' 他就是这样发牢骚呢。"		A	A-37
58	「…いえこの次はずつと新しい者を撰んで金色夜叉にしましたと云う*から*、君にや何の役が当たるとか聞いたなら私は御宮ですといつたのさ。…」		65	'不, 下次要选个更新颖的剧本, 叫《金色夜叉》。' 我问他扮演什么角色, 他说他扮演女主角阿宮。		C	C
58	「然しあの男はどこまでも誠実で軽薄なところがない*から*好い。…」		65	不过, 东风君不论到哪儿总是那么诚恳, 毫无轻薄之处, 这很好,		C	C
58	「…さすが永年教師をして胡魔化しつけているものだ*から*、こんな時には教場の経験を社交上にも応用するのである」		65	但他不愧为教师, 已经惯于蒙混过关。在这紧急关头, 他将教坛上的经验运用于社交了。		C	C
58	何でも第二回には知名の文士を招待して大会をやる積りだ*から*、先生にも是非御臨席を願ひたいつて。		65	他说无论如何, 第二次集会时也要邀请知名文人开一个大会。还说届时希望先生务必光临		C	C
58		吾輩は險呑になった*から*少し傍を離れる。	65		咱家觉得危险, ◆便◆稍微离开主人一些。	B	B-2
58	「それが全く文学熱から来た*ので*、こちと読むと遠近と云う成語になる、のみならずその姓名が韻を踏んでいると云うのが得意なんです。…」		64	这完全来源于文学热。把东风读成KOCHI, 就成了'远近'这一成语, 而且押上了韵, 他非常得意。		C	C
59	「儲か暮の二十七日と記憶しているがね、例の東風から参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたい*から*御在宿を願うと云う先き触れがあったので、朝から心待ちに待っていると先生中々来ないやね。…」		66	"没错, 记得是去年年末二十七日。那位东风君事前通知我: '将赴府拜访, 万望能领教有关文学艺术方面的高论, 并希借宿一宵。' 我从清早就殷切恭候, 而此公却迟迟未到。		C	C
59	「…昼飯を食つてストーブの前でパリー・ペーンの滑稽物を讀んでいるところへ静岡の母から手紙が来た*から*見ると、年寄だけにいつまでも僕を子供の様に思つてね。」		66	午饭后, 我正在炉边读巴里·培恩①的滑稽小说, 住在静岡的家母来信了。" "老人嘛, 总拿我当孩子。"		C	C
59	「儲か暮の二十七日と記憶しているがね、例の東風から参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたい*から*御在宿を願うと云う先き触れがあった*ので*、朝から心待ちに待っていると先生中々来ないやね。…」		66	"没错, 记得是去年年末二十七日。那位东风君事前通知我: '将赴府拜访, 万望能领教有关文学艺术方面的高论, 并希借宿一宵。' 我从清早就殷切恭候, 而此公却迟迟未到。		C	C
60	「…その中とうとう晩飯になった*から*、母へ返事も書こうと思つて一寸十二三行かいた。…」		67	不久, 终于吃晚饭。我想, 给家母写封回信吧。于是, 只写了十二三行。		C	C
60	「…母の手紙は六尺以上もあるのだが僕にはとてもそんな芸は出来ん*から*、何時でも十行内外で御免蒙る事に極めてあるのさ。…」		67	家母来信, 长达六尺以上, 而我无论如何也没有那么大的本事, 一向写十行左右, 肯定搁笔。		C	C
60	「…すると一日動かずにおつたものだ*から*、胃の具合が妙で苦しい。…」		67	整天坐着不动, 胃口十分难受。		C	C
61	「…危ない*から*よそう…」		68	危险, 别去!		C	C
62	「…私などは自分でやはり似た様な経験をつい近頃したもので*から*、少しも疑がう氣になりません」		69	我近来也有过类似的体验, ◆所以◆, 丝毫也不怀疑。"		A	A-36
62	「晩餐も済み合奏も済んで四方の話が出て時刻も大分遅くなった*から*、もう暇乞をして帰ろうかと思つていますと、…」		70	晚餐已罢, 演奏曲终, 便天南海北地闲聊起来, 时间已经很晚了。我想告辞回家,		C	C
62	「…某博士の夫人が私のそばへ来てあなたは○○子さんの御病氣を御承知ですかと小声で聞きますので、実はその兩三日前達つた時は平常の通り何所も悪い様には見受けませんでした*から*、私も驚ろいて精しく様子を聞いてみますと、…」		70	一位博士夫人来到我身边, 小声问我是否知道A姑娘病了。说实话, 两三天前我和她见面时, 她还像往常一样, 没有害过病的征兆。我很吃惊, 详细询问了情况,		C	C
62	「…某博士の夫人が私のそばへ来てあなたは○○子さんの御病氣を御承知ですかと小声で聞きます*ので*、実はその兩三日前達つた時は平常の通り何所も悪い様には見受けませんでした*から*、私も驚ろいて精しく様子を聞いてみますと、…」		70	一位博士夫人来到我身边, 小声问我是否知道A姑娘病了。说实话, 两三天前我和她见面时, 她还像往常一样, 没有害过病的征兆。我很吃惊, 详细询问了情况,		C	C
63	「…何しろ熱が劇しいので脳を犯している*から*、もし睡眠剤が思う様に功を奏しないと危険である。…」		70	说什么反正热度太高, 伤了脑子。如果安眠药不能如期奏效, 那就危险。		C	C
63	「冷笑なさつてはいけません、極真面目な話なんです*から*…」		71	请不要嘲笑, 这可是个非常严肃的故事。		C	C
63	「…何しろ熱が劇しい*ので*脳を犯しているから、…」		70	说什么反正热度太高, 伤了脑子。		C	C

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
64	その返事が大きかったものです*から *静かな水に響いて		71	声音太大, 竟在静静的水面上发出回响。		C	C
64	〇〇子の声がまた苦しうに、訴えるように、救を求めるように私の耳を刺し通した*ので*、今度は「今直に行きます」と答えて欄干から半身を出して黒い水を眺めました。		72	A姑娘的声音又响彻我的耳鼓, 好像在痛苦, 好像在倾诉, 好像在呼救。这回我回答说:‘立刻就去!’我从栏杆上探出半个身子, 眺望着漆黑的河水,		C	C
65	「…門の内下女と羽根を突いていました*から*病気は全快したものと見えます」		73	她正在门里和女仆打羽毛球哩! ◆由此可见◆, 她的病是痊愈了。”		A	A-52
65	鯉谷は嫌いだ*から*今日はよそうとその日はやめにした。		73	我不想看这出戏, 那天◆就◆没去。		B	B-1
65	つい間違っって橋の真中へ飛び降りた*ので*、その時は実に残念でした。		72	可是迷失了方向, 竟然跳到桥中心。当时真后悔。		C	C
66	私に聞かせるのだ*から*いっしょに行つて下すつても宜いでしょうと手続の談判をする。		74	◆既然◆是请我看戏, ◆就◆陪我一起去, 总还可以吧? 这简直是刀下逼供。		A	A-22
66	細君が御歳暮の代りに撰津大掾を聞かしてくれろと云う*から*、連れて行ってやらん事もないが今日の語り物は何だと聞いたら、細君が新聞を参考して鯉谷だと云うのさ。		73	内人说:‘今年不要压岁钱, 但是, 请我去看撰津大掾表演的木偶戏吧!’带他去, 倒也无妨, 便问她今天演的是哪一出戏。内人查看了一下报纸说, 演的是		C	C
66	しかし一世一代と云うので大変な大入だ*から*到底突懸けに行つたつて這入れる気遣はない。		74	不过, 都说这是绝代名戏, 一定座满, 纵使横冲直撞, 也很难挤得进去的。		C	C
66	元来ああ云う場所へ行くには茶屋と云うものが在つてそれと交渉して相当の席を予約するのが正当の手続きだ*から*それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、		74	想去那种场所, 首先要和茶馆联系, 定好个座位, 这才是正常手续。不履行这道手续, 做出越轨的事来就不好。		C	C
66	私は女です*から*そんなむずかしい手続きなんか知りませんが、		74	我一个女人家, 哪里懂得那么复杂的手续。		C	C
66	堀川は三味線もので賑やかになばかりで実がない*から*よそうと云うと、細君は不平な顔をして引き下がった。		73	《堀川》是三弦戏, 只是热闹, 没有内容, 算啦! 内人满脸不高兴地走开。		C	C
66	大原のお母さんも、鈴木君代さんも正当の手続きを踏まないで立派に聞いて来たんです*から*、いくらあなたが教師だからって、そう手数のかかる見物をしないで済みましよう、		74	不过, 邻居大原的妈妈、铃木家的君代、都没有办什么手续, 也都舒舒服服地听完戏回来啦。就算你是个教师呗, 也大可不必那么烦琐的手续才看戏吧!		C	C
67	細君が年に一度の願だ*から*是非叶えてやりたい。		75	内人一年才提这么一次要求, 无论如何也要使她如愿以偿的。		C	C
68	早く有為転変、生者必滅の理を呑み込ませようとして少し急ぎ込んだものだ*から*、つい細君の英語を知らないことと云う事を忘れて、何の気も付かずに使つてしまった訳さ。		76	我一直打冷战, 两眼发黑, 脑子也有点乱。真是祸不单行。一时性急, 竟过早地对她灌输‘盛极必衰、生久必亡’之理, ◆以至◆忘记了不懂英文, 便信		A	A-40
68	四時までにはきつと直つて見せる*から*安心しているがいい。		75	四点钟以前这病一定会好, 放心好了。		C	C
68	そんな横文字なんか誰が知るもんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使つて人にかからうのだ*から*、宜しゅうございます、どうせ英語なんかは出来ないんですから。		76	那种横行文字哪个才懂? 你明知我不懂英文, 却偏拿英文来耍笑我。好哇! 反正我不会英文。		C	C
68	全く妻を愛する至情から出た*ので*、それを妻のように解釈されれば僕も立つ瀬がない。		76	完全出于怜爱妻子的一片真情。可是内人竟然理解为另一种含意, 真叫我啼笑皆非。		C	C
69	細君は水薬を茶碗へ注いで僕の前へ置いてくれた*から*、茶碗を取り上げて飲もうとすると、胃の中からげーと云う音が唸鳴して出てくる。		78	内人将汤药斟在碗里, 放在我的面前。我本想端起碗来喝下去, 可是胃里咕的一声, 有个东西在呐喊。		C	C
70	「行きかけたが四時を過ぎちゃ、這入れないと云う細君の意見なんだ*から*仕方ない、やめにしたさ。		78	“想去, 可是已经过了四点钟。内人说进不去门啦, 没办法, ◆只好◆作罢。”		B	B-9
71	ひっそりして人の気合もしない*から*、泥足のまま椽側へ上つて座蒲団の真中へ寝転ろんで見るといひ心持ちた。		80	院子里静悄悄无人。咱家◆就◆用这双泥脚登上椽廊, 在坐垫上一躺, 真舒服。		B	B-1
71	平常は言葉数を使わない*ので*何だか了解しかねる点があるように思われていた。		79	但是, ◆只因◆他素日不多开口, 有些方面还未必了解。		A	A-32
71	こう考えると急に三人の談話が面白くなつた*ので*、三毛子の様子でも見て来ようかと二絃琴の御師匠さんの庭口へ廻る。		80	想到这里, 顿觉三人的对话毫无情趣, 不如去瞧看一下花子小姐。于是, 我来到二弦琴师傅家的门口。		C	C
72	……それから猫簞信女の簞の字は崩した方が恰好がいい*から*少し劃を易えたと申しました。		80	说‘猫簞女居士之灵位’中的‘簞’字, 还是简化些好看, ◆所以◆, 改了笔划。”		A	A-36
72	ええ念を押しましたら上等を使つた*から*これなら人間の位牌よりも持つと申しておりました。		80	他们说用的是上等材料, 它比死人的灵牌还耐用。		C	C
73	死ぬと云う事はどんなものか、まだ経験した事がない*から*好きとも嫌いとも云えないが、		82	死亡究竟是怎么回事, 咱家还未曾体验, 爱不爱◆也◆就无从说起。		B	B-3
73	「しかし猫でも坊さんの御経を讀んでもらつたり、戒名をこしらえてもらったのだから*心残りはあるまい」		82	不过, 花子小姐虽说是猫, 师傅却拿她像亲生女儿一样, 给她念了经, 取了法名, 花子小姐◆也◆该死而瞑目了。”		B	B-3
73	先日あまり寒い*ので*火酒盃の中へめぐり込んでいたら、下女が吾輩がいのも知らんで上から蓋をした事があつた。		82	不过, 前些天太冷, 咱家钻进了灭火罐, 女仆不知咱家在里边, 给扣上了罐盖。		C	C
74	「少し短か過ぎたようだった*から*、大変御早うございますねと御尋ねをしたら、月桂寺さんは、ええ目のあるところをちよいとやっておきました、		82	我也觉得太短, ◆就◆同月桂寺的和尚, 他却说‘恰到好处。		B	B-1
74	なに猫だ*から*あのくらいで充分浄土へ行かれますとおっしゃつたよ」		82	怎么, 一只猫嘛, 念这些, 足够送它上西天了。”		C	C
74	「罪が深いんです*から*、いくらありがたい御経だつて浮かべられる事はございませんよ」		82	他呀, 罪孽深重! 不论多么灵验的经文, 也不可能将他超度喽。”		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
74		主人は吾輩の普通一般の猫でないと言ふ事を知っているものだ*から*吾輩はやはりのらくらしてこの家に起臥している。	83		但◆因◆主人了解咱家不是一只凡猫,咱家◆才◆依然悠悠悠悠,在这个家庭里虚度晨昏。	A	A-13
74		鼠はまだ取った事がない*ので*、一時は御三から放逐論さえ呈出された事もあったが、	83		仍然不曾捕鼠。一时女仆甚至对咱家下了逐客令,	C	C
75		幸い人間に知己が出来た*ので*さ*ほど退屈とも思わぬ。	84		幸而咱家在人类中交上了朋友,倒◆也◆不觉得怎么郁闷。	B	B-3
76	「鼻汁を垂らすのは、ちと酷だ*から*消そう」		86	「流鼻涕'这词儿太尖刺,去掉!」		C	C
76		吾輩はどこまでも人間になりすぎているのだ*から*、交際をせぬ猫の動作は、どうしてもちよいと筆に上りにくい。	85		咱家◆由于◆处处装人,对于已经隔绝的猫跑动态,无论如何也难怪描绘。	A	A-15
77		肉が付いている*ので*びんと針を立てたごとくに立つ。	86		◆由于◆沾了鼻涕,那鼻毛像针似地站得笔直。	A	A-15
77		粘着力が強い*ので*決して飛ばない。	87		但◆由于◆鼻涕太粘,那鼻毛竟动也不动。	A	A-15
78	「香一(?)もあまり唐突だ*から*已めろ」		87	「香一'炷'?太突然,见鬼去吧!」		C	C
79		計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想な顔もしていられない*から*、ニヤニヤと愛嬌を振り回して膝の上へ這い上って見た。	89		想不到咱家奉命陪伴迷亭先生。总不该板着脸孔的,◆便◆笑容可掬地咪咪叫,跳上他的膝头。	B	B-2
80	「どこへ参るにも断わって行った事の無い男です*から*分りかねますが、大方御医者へでも行ったんでしよう」		90	“他这个人,不论去哪儿,从来都不临走告知一声,◆所以◆,不得而知呀!大约找医生去了吧!”		A	A-36
82	「あんなに本を買ってやたらに詰め込むもの*から*人から少しは学者だとか何とか云われるんですよ。」		93	◆就因为◆他那样胡乱地买书,胡乱地往肚子里硬塞,人们◆才◆称他一声学者。		A	A-51
82	「王様がいくなら売ると聞いて聞いたら大変な高い事を言うんですけど、あまり高いもんだ*から*少し負けないかと云うとその女がいきなり九冊の内の三冊を火にくべて 焚いてしまったそうです」		92	“皇帝问她要多少钱,她要了很高的价码。皇帝说太贵,能不能少算点儿?那女人突然从九本书里抽出三本,扔到火里烧掉。”		C	C
82	それを引かせようとするので、残っている三冊も火にくべるかも知れない*ので*、王様はどうとう高い御金を出して焚け余りの三冊を買ったんですつて……		93	如果再讲价,那女人说不定会把剩下的三本书也扔进火堆里呢。终于,皇帝花了大价钱,把幸免付账的三本书买下……		C	C
83	「せんだってなどは学校から帰ってすぐわきへ出るのに着物を着換えるのが面倒だもの*から*、あんな外套も脱がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。」		94	“前些天从学校回来,说是立刻还要出门,换衣服太麻烦。我的好兄弟!他连外套也不脱,坐在饭桌旁就吃饭。”		C	C
84	「まるで犬に芸を仕込む気*から*残酷だ。」		96	“简直像教小狗练功,大残酷。”		C	C
84	それ以来、坊や辛いのはどこで聞くときと舌を出す*から*妙だ」		96	自从给她们吃了萝卜泥,如果问她:‘好宝宝,哪儿辣?’她准把舌头伸出来。		C	C
84		細君は分らんもの*から*好加減な挨拶をする。	95		女主人对此外行,◆只好◆不轻不重地回了一句:	B	B-9
85	首縊りの力学と云う脱俗超凡な演題なのだ*から*傾聴する価値があるさ」		96	是个超凡脱俗的题目——《关于吊颈的力学》,◆因此◆,值得一听啊!”		A	A-37
85	「君は首を縊り損くなった男だ*から*傾聴するの好いが僕なんざあ……」		96	“你是上过吊的人,听听◆也◆好。可我……”		B	B-3
85	なにあに君はひま人だ*から*ちよどうぞいいやね		96	怎么?你是个闲人,这样不是正合适吗?		C	C
85	「稽古です*から*、御遠慮なく御批評をお願いします」		97	“这是演习,希望毫不客气地多多批评!”		C	C
85	「歌舞伎座で悪寒がするくらいの間人だ*から*聞かれないうと云う結論は出そうもないぜ」		96	“总不至于作出这样的结论吧——‘连看戏都打冷颤的人不许听!’”		C	C
85		今日は晩に演説をするという*ので*例になく立派なフロックを着て	97		◆因为◆晚上要去讲演,他破例穿起漂亮的服装。	A	A-1
86	「これから本論に這入るところです*から*、少々御辛防をお願いします。」		98	“立刻转入正题,请再耐心些……”		C	C
87	希臘語で本文を朗読しても宜しゅうございますが、ちと銜うような気味にもなります*から*やめに致します。		99	我本想用希腊语朗诵原文,但是难免有卖弄学识之嫌,◆因此◆作罢。		A	A-37
87	「提灯玉と云う玉は見た事がない*から*何とも申されませんが、		99	“彩色灯泡?不曾见过,◆因此◆,无可奉告。”		A	A-37
88	「それから英国へ移って論じますと、ペオウルフの中に絞首架即ちガルフと申す字が見えます*から*絞罪の刑はこの時代から行われたものに違いないと思われます。」		101	“接下来话题转到英国方面进行论述,在《裴欧沃夫》①这部史诗里见有‘绞首台’一词,◆可见◆从这个时代起就用了绞刑。”		A	A-41
88	「何そんな遠慮はいらん*から*、ずんずん略すさ……」		100	“唉,何须多虑,刷刷往下删就是嘛。”		C	C
88		但しこの大抵と云う度合は兩人が勝手に作ったのだ*から*他人の場合には応用が出来ないかも知れない。	100		但是,“大致”这个字眼儿,◆因◆是二人信口编造,说不定换个人就用不上。	A	A-10
89	……これはたしかに医者が計って見たのだ*から*間違はありません」		101	这确实是医生亲自量过的,没错!”		C	C
89		遠方で起った出来事的事だ*から*吾輩には知れよう訳がない。	102		◆因◆是远方发生的故事,咱家不得而知。	A	A-10
89	またやり直す*と今頃は繩が長過ぎて足が地面へ着いた*ので*やはり死ねなかつたのです。		101	又吊第二次。但是这一次◆因◆绞绳太长,双脚着地,◆又◆没有致死,		A	A-11
89		迷亭が無暗に風來坊のような珍語を挟むのと、主人が時々遠慮なく欠伸をする*ので*、ついに中途でやめて帰ってしまった。	102		但◆因◆迷亭胡乱插言,说些不着边际的奇谈怪论,而且主人又不时毫无顾忌地打呵欠,寒月◆遂◆中止演讲,回家去了。	A	A-14
90	「知らん、近頃は合わん*から*」		102	“不知道,◆因为◆最近没见面。”		A	A-1
90	日本人は清廉の君子ばかりだ*から*到底駄目だと云ったんだとさ。		103	日本全是清廉的君子,毕竟不会卖的。		C	C
91	相手が西洋人だ*から*調和を計るためにさいならにしたんだって、		104	◆只因◆谈话对象是西洋人,为与西方发音调和一下,才成了嘘言。		A	A-32
91	早口で無暗に聞い掛けるもの*から*少しも要領を得ないのさ		104	那德国人说话像放机关枪似的,突突突乱问一气,简直不知所云。		C	C

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
91	西洋の露口や掛矢は先生何と翻訳して善いか習った事が無いんだ*から*弱わらあね		104	东风先生没学过这两个名词, 不知应该怎样翻译,		C	C
92		かく著しい鼻だ*から*、この女が物を言うときは口が物を言うと言わんより、鼻が口をきいているとしか思われない。	105		◆只因◆拥有如此显赫的鼻子, 这女人说话时, 不能不令人以为她不是口里在发音, 而是鼻孔在宣讲。	A	A-32
94	「実は方々からくれくれと申し込はございますが、こちらの身分もあるものでございます*から*、滅多な所へも片付けられません*ので*…」		107	“说真的, 四面八方, 纷纷求婚。不过, ◆由于◆我家是有身份的人, 不三不四的不能许给, 所以……”		A	A-15
94	「ほかにもだんだん口が有るんです*から*、無理に貰っていたかないだつて困りやしません」		108	“除了寒月, 说亲的人多得很哩。即使寒月先生不肯俯就, 也不发怒的。”		C	C
96	もう隠したつてしようがない*から*白状しようじやないか		110	这事瞒也瞒不住, 还是如实说了的好。		C	C
97	「ええ。引き受けて貰うたつて、ただじゃ出来ませんやね、それやこれやでいろいろ物を使っているんです*から*」		112	“是的。虽说答应了, 也不能叫她白干。左一样右一样, 送给她好多礼物哪!”		C	C
98	「博士になるかならんかは僕等も保証する事が出来ん*から*、ほかの事を聞いていただく事にしよう」		113	“寒月能否当上博士, 我们也无法保证。◆所以◆, 请问下一个问题吧!”		A	A-36
98		不幸にしてその意味が鼻子には分らんものだから*「へえー」とは云ったが怪訝な顔をしている。	112		不幸的是, 鼻子夫人对于这话一窍不通, 虽然“啊”的一声, 却仍然大惑不解	C	C
98	悲しい事に力学と云う意味がわからん*ので*落ちつきかねている。		113	可悲的是, 她不懂什么是力学, ◆因此◆放心不下。		A	A-37
99	「さあ僕も素人だ*から*よく分らんが、何しろ、寒月君がやるくらいなんだ*から*、研究する価値があると見えますな」		113	“这, 我也是个外行, 不大清楚。不过, ◆既然◆寒月研究它, ◆可见◆有值得研究的价值嘛。”		A	A-27
99	「あらいやだ、狸だよ。何だつて撰りに撰って狸なんぞかくんでしようね—それでも狸と見える*から*不思議だよ」		115	“哟, 痴人, 画的是山狸子呀! 画什么不好, 干么偏画山狸子?” 忽而又赞许地说: “可他居然画得叫人能够认得出是山狸子, 了不起!”		C	C
99	「さあ僕も素人だ*から*よく分らんが、何しろ、寒月君がやるくらいなんだから、研究する価値があると見えますな」		113	“这, 我也是个外行, 不大清楚。不过, 既然寒月研究它, 可见有值得研究的价值嘛。”		C	C
99	「何も永く前歯欠成を名乗る訳でもないでしょう*から*御安心なさいよ」		114	“反正他不会总这么自报‘缺个门牙’的。请放心。”		C	C
99	「歯を填める小遣がない*ので*欠けなりにしておくんですか、または物好きで欠けなりにしておくんですか」		114	“他是◆因为◆没有钱补牙◆才◆留下那个窟窿呢? 还是由于喜欢这样?”		A	A-2
100	「いえ、もうこれだけ拝見すれば、ほかのは沢山で、そんなに野暮でないんだと云う事は分りました*から*」		116	免了吧! 拜读这几张足够了。已经了解清楚, 此人并不那么胡闹。”		C	C
100	空に美しい天女が現われ、この世では聞かれぬほどの微妙な音楽を奏し出した*ので*、天文学者は身に沁む寒さも忘れて聞き惚れてしまいました。		115	这时, 天空闪现一位美丽仙女, 奏起举世罕见的优美音乐。天文学家竟忘记了寒风刺骨, 听得入迷		C	C
101	元来御前がこんな皺苦茶な黒木綿の羽織や、つぎだらけの着物を着せておく*から*、あんな女に馬鹿にされるんだ。		118	原来就怪你让我穿这身绉绉巴巴的黑布长袍和补丁摺补丁的破衣烂裳, ◆才◆被那种女人耍笑了一通呢。		B	B-6
101	さあ遠慮はいらん*から*、存分御笑いなさい」		116	好吧, 不必客气, 尽情地笑吧!”		C	C
101	「しかし顔の譏諷などをなさるのは、あまり下等ですわ、誰だつて好んであんな鼻を持つてる訳でもありません*から*—」		117	“不过, 私下贬斥别人的相貌, 那可太下流。任何人也不高兴有那么一只鼻子的。”		C	C
101	あしたから迷亭の着ているような奴を着る*から*出してあげ」		118	从明天起要穿迷亭穿的那样衣服, 给我拿出来!”		C	C
102	「静岡に生きてますがね、それがただ生きてるんじや無いです。頭にちよん髷を頂いて生きてるんだ*から*恐縮しまさあ。		118	“住在静岡。他的生活可不寻常。头顶挽了个发髻, ◆令◆人肃然起敬。”		B	B-7
103	「仕方がない*から*見計らつて送つてやった」		120	“没办法, ◆就◆估量着做一身寄去了。”		B	B-1
103	ちよつと驚ろいた*から*、郵便で問返したところが老人自身が着ると云う返事が来ました。		119	我有点吃惊, 写信问他, 他回信说, 是他老人家自己穿。		C	C
103	二十三日に静岡で祝捷会がある*から*それまでに間に合うように、至急調達しろと云う命令なんです。		119	他下令说: 速速寄来, 要赶得上二十三日在静岡举行的祝捷大会。		C	C
103	寒い*から*、もっと寝ていらつしやい		119	告诉他天太冷。再多睡一会儿吧,		C	C
104	「どうするつたつて仕方がない*から*僕が頂戴して被つていらあ」		120	“怎么样? 没办法, ◆只好◆归我把它戴上!”		B	B-9
104	しばらくして園から小包が届いた*から*、何か礼でもくれた事と思つて開けて見たら例の山高帽子さ、		120	但是不久, 收到一个小包, 还以为送给我的礼品哪。打开一看, 原来是大礼帽		C	C
104	「なあに漢学者*で*さあ、若い時聖堂で朱子学か、何かこり固まったものだ*から*、電氣灯の下で蒸しくちよん髷を頂いているんです。仕方がありません」		121	“哪里! 他是汉学家。自幼在孔庙里潜心于朱子学什么的, 即使在灯光下, 也还毕恭毕敬地头顶一个发髻呢。真没办法。”		C	C
105	あんな偶然童子だ*から*、寒月に援けを与える便宜は難かろう。		122	但他◆既然◆是那么一位‘偶然童子’, 支援寒月的可能性◆也◆很小吧!”		A	A-23
105	ああ云う偉大な鼻を顔の中に安置している女の事だ*から*、滅多な者では替り付ける訳の者ではない。		122	对手是个脸心安了一棵伟大鼻子的女人家, 不是随便什么人能接近的。		C	C
105	主人の家で実業家が語頭(こ)上った事は一返もない*ので*、主人の飯を食う吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみならず、はなはだ冷淡であった。		121	主人家从未谈起过实业家。◆就◆连咱家这个在主人家混饭吃的猫, 也不仅与实业家不沾一点边儿, 甚至十分冷淡。		B	B-1
108	「しかしこつちの姿を見せちゃあ面白くねえ*から*、声だけ聞かして、勉強の邪魔をした上に、出来るだけじらしてやれつて、さつき奥様が言い付けておいでなつたぜ」		125	“但是, 如果我们被他发现, 那就扫兴了。刚才金田太太不是吩咐过吗? 只给他听见叫骂声, 干扰他读书, 尽可能叫他干着急上火。”		C	C

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
108	自分の面あ今戸焼の狸見たような癖に——あれで一人前だと思ってるんだ*から*やれ切れないじゃないか		125	他自己那副尊容活像个丑八怪！可还硬觉得自己蛮有人样儿呢。真要命！”		C	C
109	どうもあんな教員がある*から*、ほかのものの、迷惑になって困りますと云ったが、		127	有了这么个教员，搞得众人不安。”		C	C
109	「津木兵助や福地キヤゴがいる*から*、頼んでからかわしてやろう」		127	“有津木兵助，福地细螺。可以托他们去挖苦那个穷教员一通！”		C	C
109		尻尾を揺る事七度び半にして草臥れた*から*やめにした。	126		追逐尾巴七圈零半，力竭身虚，这◆才◆作罢。	B	B-6
110	明日ね、行くんだ*から*ね、朝の三を取っておいておくれ、		128	明天，我去看戏。给我预订三排座…		C	C
111	今までの*があまり汚れました*から*か*け易えました」		129	◆因为◆旧村領全都穿脏，我这◆才◆找出来换上。”		A	A-2
111	「ちょっと用がある*から*嬢を呼んで来いとおっしゃいました」		129	“老爷和太太说有点事，叫我请来小姐去。”		C	C
111	「へえ、せんだって御嬢様からいただきました*ので*、結構過ぎて勿体ないと思って行李の中へしまっておきましたが、		129	“是的。前些天小姐赏给了我，可是，我觉得太漂亮，不好意思戴，就放在箱子里。”		C	C
112	穿しには地味過ぎていやだ*から*御前に上げようとおっしゃった、あれでございます」		130	你说‘嫌它太素气，送给你吧！’		C	C
112		綺麗な家から急に汚ない所へ移った*ので*、何だか日当りの善い山の上から薄黒い洞窟の中へ入り込んだような心持がする。	130		◆因为◆是从漂亮的公馆突然回到肮脏的寒舍，那心情，宛如从阳光明媚的秀丽山峰突然掉进漆黑的洞窟。	A	A-1
114	「吾輩は年来美学上の見地からこの鼻について研究した事がございませ*から*、その一斑を披瀝して、御両君の清聴を煩わしたいと思ひます」		133	“敝人年来从美学见地对鼻子进行过研究。现各抒己见，有劳二位侧耳静听。”		C	C
115	誤解を生ずるに至るかも知れませ*から*、予め御注意をしておきます。		134	说不定会产生误解的。◆因此◆，首先提请注意……		A	A-37
115	「いや御不審はごもつともですが論より証拠この通り骨がある*から*仕方ありません。		134	“噢，您有疑问，这也难怪。不过事实胜于雄辩，确有这样的骨头，有什么办法！”		C	C
115	「演者自身の局部は回護の恐れがあります*から*、わざと論じません。		135	“关于演说人鼻子的局部构造，为了回避自我辩护之嫌，有意识地避而不谈。”		C	C
116	「先生弁じましたは少し講師師のようで下品です*から*、よしていただきますよう」		135	“先生！‘道要’有点像说书人的用语，太俗气，请您免了吧！”		C	C
117	君は理学士だ*から*分るだろうと思つたのに。		137	而你，是个理学士嘛。		C	C
117	この式が演説の首脳なんだ*から*これを略しては今までやった甲斐がないのだが——まあ仕方ない。公式は略して結論だけ語ろう」		137	这条公式是我这场演说中的灵魂，如果删掉，讲过的就全都毫无意义了……啊，没办法，略去公式，只谈结论吧！”		C	C
117	これからは少々物理学上の問題に立ち入ります*ので*、勢御婦人方には御分りにくいかも知れませぬ、どうか御辛防を願ひます」		136	但◆因◆下文涉及力学问题，自然，女士小姐们说不定会听不懂的。那就请多多包涵了。”		A	A-10
118	寒月君などは、まだ年が御若い*から*金田令嬢の鼻の構造において特別の異状を認められんかも知れませぬが、		137	寒月君还年轻，也许不认为金田小姐的鼻子构造有什么异常之处；		C	C
118	かかる遺伝は潜伏期の長いものであります*から*、いつ何時氣候の劇変と共に、急に發達して御母堂のそれのごとく、咄嗟の間に膨脹するかも知れませぬ、		138	但是，这种性质的遗传潜伏期很长，一旦气候突变，就会迅猛发展，说不定刹那间膨胀起来，鼻子像她的高堂老母一般大呢。		C	C
121		——その金田君が鮎の刺身を食つて自分で自分の禿頭をびちやびちや叩く事や、それから顔が低いばかりでなく背が低い*ので*、無暗に高い帽子と高い下駄を穿く事や、それを車夫がおかしがって書生に話す事や、書生がなるほど君の觀察は機敏だと感心する事や、——々々数え切れない。	142		就是这位金田老板，他吃金枪鱼的生鱼片时，总是咄咄的拍打自己的秃头。他不仅脸是扁的，而且个子也矮。不管什么场合，总戴一顶高帽，穿一双高齿木屐。车夫觉得滑稽，将此情景说给了奢食门下的学生，学生赞赏地说：“不错，你的观察力很敏锐……”诸如此类，不胜枚举。	C	C
122		悪い事をした覚はない*から*何も隠れる事も、恐れる事も無いのだが、	143		咱家没干过坏事，用不着要躲躲闪闪或是怕人，	C	C
122		金田君は幸い横顔を向けて客と相對している*から*例の平坦な部分は半分かくれて見えぬが、	143		金田先生正转过脸去面对客人。那张扁脸被遮住一半，看也看不见；	C	C
122		金田君は堂々たる実業家である*から*固より熊坂長範のように五尺三寸を振り廻す氣遣はあるまいが、	143		金田老板乃一堂堂实业家，不必担心他会像熊坂长范那样，抡起五尺三寸的大刀。	C	C
122		ただ胡麻塩色の口髭が好い加減な所から乱雑に茂生している*ので*、あの上に孔が二つあるはずだと結論だけは苦もなく出来る。	144		不过，◆只因◆花白胡须唯在咱家看得见的方位蓬乱丛生，不费劲儿，就可以得出结论：胡须的上端应该有两个窟窿才	A	A-32
122		しかしその油断の出来ぬところが吾輩にはちょっと面白い*ので*、吾輩がかくまで金田家の門を出入するもの、ただこの危険が冒して見たいばかりかも知れぬ。	143		然而，正是“不可掉以轻心”这一点，咱家很感兴趣。◆所以◆如此频繁地出入于金田家，说不定纯粹是为了想冒这份风险哩！	A	A-36
124	「いや、まことに言語同断で、ああ云うのは必竟世間見ずの我儘から起るのだ*から*、ちつと懲らしめのためにいじめてやるが好いからうと思つて、少し当てやつたよ」		145	“唉，简直是荒谬绝伦！◆所以◆如此，全怪他没见世面，太任性。为了稍微教训一下，觉得应该给他点苦头吃，所以，轻轻治了他一下……”		A	A-36
124	——まるで彼等の財産でも捲き上げたような気分です*から*驚きますよ、		145	仿佛别人的财产是从他们手里夺了去似的，多新鲜哪。		C	C
124	「なるほどそれでは大分答へましたろう、全く本人のためにもなる事です*から*」		145	“言之有理，他们大概知道厉害了吧？这也完全是为了他们好嘛！”		C	C
125	——それでも義理は義理でさあ、人のうちへ物を聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりです*から*、後で車夫にビールを一ダース持たせてやつたんです。		147	可是，人情毕竟还是人情。既然到别人家去了解情况，如果对这份人情假装不懂，那是说不过去的。◆所以◆，其后我打发车夫送去一箱啤酒。		A	A-36

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
125	あれも昔し自炊の仲間でしたがあんまり人を馬鹿にするものです*から*能く喧嘩をしましたよ		146	他也是从前和我一起起伙的伙伴。他总爱捉弄人，我常和他干架。		C	C
125	「ごもっともで、全く道楽からくる嘘だ*から*困ります」		146	“说得太对了。撒谎成了他的嗜好，难缠哪！”		C	C
125	しかしあの男のは吐かなくてすむのに矢鱈たらに吐くんだ*から*始末にできないじゃありませんか。		146	可那家伙，本来只要不吭声就会平安无事，可他偏要胡诌八扯，岂不太难缠了吗？		C	C
125		もともと吾輩は椽の下にいる*から*実際叩いたか叩かないか見えようはずがないが、この禿頭の音は近来大分聞馴れている。	147		当然，咱家◆因为◆在椽廊的地板下，他到底真的拍了秃头没有，按理说是看不见的。但是近来，他那拍打秃头的声音已听得耳熟。	A	A-1
126	「あの苦沙弥と云う変物が、どう云う訳か水島に入れ智慧をする*ので*、あの金田の娘を貰って行かんなどとはめかすぞうだ——なあ鼻子ぞうだな」		148	“苦沙弥这个怪物，不知为什么给水岛出谋划策，挑唆他不要娶金田小姐……是吧？鼻子！”		C	C
126		いやだんだん事件が面白く発展してくるな、今日はあまり天気が良い*ので*、来る気もなしに来たのであるが、こう云う好材料を得ようとは全く思い掛けないだ。	148		噢，事情越来越要热闹喽！咱家◆只因◆今天天气很好，本不想来，却又来了。万万想不到会有这么好的材料到手。	A	A-32
127	「それでの、君は学生時代から苦沙弥と同居をしていて、今はとにかく、昔は親密な間柄であった*から*御依頼するのだが」		148	你◆既然◆学生时期曾和苦沙弥住在一起，不管现在怎样，从前总还相处得亲密无间，◆所以◆才拜托你。		A	A-26
127	なにそりゃ何も水島に限る訳では無論ないだ*から*苦沙弥が何と云って邪魔をしようと、わしの方は別に差支えませんが……」		149	唉，倒不是我女儿非水岛不嫁，◆所以◆，不管苦沙弥说些什么，捣些什么鬼，对于我方来说，全不在乎……”		A	A-36
127	「それから娘はいろいろと申し込もある事だ*から*、必ず水島にやると極める訳にも行かんが、」		149	“其次，我家小姐求婚的人多得很，不一定非得给水岛先生不可。”		C	C
127	だんだん聞いて見ると学問も人物も悪くもないようだ*から*、もし当人が勉強して近い内に博士にでもなったらあるいはもう事が出るかも知れんくらいはそれとなくほのめかしても構わん」		149	不过，逐渐了解，此人似乎学识和品格还都不错；如果他用功，不久能考上博士，或许有成业的希望也未可知。这番心意，可以自然些透露给他才好。”		C	C
127	あの変物の苦沙弥を先生先生と云って苦沙弥の云う事は大抵聞く様子だ*から*困る。		149	但是，他却口口声声称苦沙弥为老师。苦沙弥说的话，他好像差不多都听，这很别扭。		C	C
127	何か怒っているかも知れんが、怒るのは向が悪い*から*で、		149	行吗？也许他会发火，但，那是他的过错。		C	C
127	「ええ全くおっしゃる通り愚な抵抗をするのは本人の損になるばかりで何の益もない事です*から*、善く申し聞きましょう」		149	“是的，您说得千真万确，顽固反抗，吃亏的只有他自己，没有任何好处。我好心好意劝说他吧！”		C	C
128	「ああ、どうか、御面倒でも、一つ願いたい。それから実は水島の事も苦沙弥が一番詳しいのだがせんだって妻が行った時は今の始末で碌々聞く事も出来なかつた訳だ*から*、君から今一応本人の性行学才等をよく聞いて貰いたい」		150	“啊，那就给你添麻烦，求你费心啦。还有，实际上水岛的情况苦沙弥最了解。上次内人前去，◆由于◆出现了刚才说过的那些乱事，没能很好地打听。◆所以◆，希望你这一次去，能把他的德才各方面情况都仔细了解一下。”		A	A-18
128	「かしこまりました。今日は土曜です*から*これから廻ったら、もう帰っておりますよ。」		150	“知道啦！今天是星期六，我如果回头就去，他大概已经回到家里。”		C	C
129	「ええあんな汚ないうちは町内に一軒しかない*から*、すぐ分りますよ。」		151	“对，这条街上没有第二家那么脏，很容易找得到的。”		C	C
129		——何しろ十二三年前の事だ*から*白の時代はとくに通り越してただ今は濃灰色なる変色の時期に遭遇しつつある。	151		怎奈，那已经是十二三年前的事。白色的年代早已逝去，如今，恰值深灰色变色时期。	C	C
129		今でもすでに万遍なく擦り切れて、堅横の筋は明かに読まれるくらいだ*から*、毛布と称するのものはや僧上の沙汰であって、毛の字は有いて単にットとでも申すのが適当である。	151		即使现在，那毛毯已经百孔千疮；横纹竖线，历历可数，称之为毛毯，已经名不副实。莫如去掉个“毛”字，干脆叫“毯子”，倒也恰如其分。	C	C
130		しかしながら煙は固より一所停まるものではない、その性質として上へ上へと立ち登るのだ*から*主人の眼もこの煙りの髪毛と纏れ合う奇観を落ちなく見ようとするれば、是非共眼を動かさなければならぬ。	153		然而，烟云本就在一处停留，按其性质，必然不断地向高处袅袅升腾。假如主人想饱览青烟与乌丝缠绵不已的壮观，就必须转动眼珠。	C	C
132	「鼻の中の白髪は見えん*から*害はないが、」		155	鼻孔里的白发看不见，◆所以◆无害；		A	A-36
132	「自分の頭だ*から*、どうだって宜いんだわ」		154	“◆正因为◆是我自己的脑袋，◆才◆随它的便呢。”		A	A-49
132	「女は鬘に結うと、ここが釣れます*から*誰でも禿げるんですわ」		155	“女人一挽发髻，那个地方就被吊了起来，捆谁也要秃的。”		C	C
133	「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延びるかと思った*から*貰ったのさ」		156	“同意倒是同意的不过，满以为还会长高些，◆因此◆才娶的呀！”		A	A-37
135	「ついまだ忙がしいものだ*から*報知もしなかつたが、」		158	“一直忙乱，也没有打个招呼。”		C	C
135		吾輩は鈴木君の不平な顔を拝見するのが面白い*から*滑稽の念を抑えてなるべく何喰わぬ顔をしている。	158		而我，却很有兴趣欣赏铃木先生那张气愤的脸，◆便◆抑制着滑稽感，尽量装作若无其事。	B	B-2
135		しかし忍ばねばならぬだけそれだけ猫に対する憎悪の念は増す訳である*から*、鈴木君は時々吾輩の顔を見ては苦い顔をする。	158		然而，正因为受了点委屈，他对猫的憎恶也正比例地增加。铃木一再哭丧着脸瞧着我；	C	C
136	なにその後時々東京へは出て来る事もあるんだが、つい用事が多いもんだ*から*、いつでも失敬するよな訳さ。		159	唉，其后常常到东京来，但是，一直公务繁忙，始终没来拜访。		C	C
139	あの迷亭君がおつたもんだ*から*、そう立ち入った事を聞く訳にも行かなくて残念だったから、もう一遍僕に行つてよく聞いて来てくれないかって頼まれたものだからね。		163	上次◆只因◆迷亭在场，不便过细地打听，觉得遗憾，托我再来一次详细询问。		A	A-32
139	「あんな鼻をつけて来る*から*悪るいや」		163	“就怪她带来那么个大鼻子。”		C	C

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
139	あの迷亭君がおったもんだから、そう立ち入った事を聞く訳にも行かなかったので残念だった*から*、もう一遍僕に行きよってよく聞いて来てくれないかって頼まれたものだからね。		163	上次只因迷亭在场，不便过细地打听，觉得遗憾，托我再来一次详细问问。		C	C
139	あの迷亭君がおったもんだから、そう立ち入った事を聞く訳にも行かなかった*ので*残念だった*から*、もう一遍僕に行きよってよく聞いて来てくれないかって頼まれたものだからね。		163	上次只因迷亭在场，不便过细地打听，觉得遗憾，托我再来一次详细问问。		C	C
140		実業家は嫌いだ*から*、実業家の片割れなる金田某も嫌に相違ないがこれも娘その人とは没交渉の沙汰と云わねばならぬ。	163		他◆由于◆讨厌实业家，◆因而◆无疑也要讨厌实业家一份子的金田。	A	A-19
140		先日鼻と喧嘩をしたのは鼻が気に入らぬ*から*で鼻の娘には何の罪もない話である。	163		前些天他◆之所以◆和鼻子吵架，◆是因为◆对那只鼻子看不惯，对于鼻子夫人的令媛却没有得罪什么。	A	A-44
141	「その愚な奴が随分世の中にあやう*から*仕方ない。		164	「世上那种糊涂虫多得很，有什么办法。		C	C
141	戸惑いをした糸瓜のようだなんて、時々寒月さんの悪口を云います*から*、よっぽど心の中では思ってるに相違ありませんと		165	小姐时常骂寒月先生是个稀里糊涂的窝囊废，这正说明小姐心里一定是非常思念着寒月呀！”		C	C
141	それを僕がわざわざ出張するくらい両親が気を揉んでるのは本人が寒月君に意がある*から*の事じゃあないか]		165	尽管如此，二位老人仍是费尽心机，为了这事，特地派我来走一趟，这不说明小姐对寒月有意吗？”		C	C
141		主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり思い掛けないもの*から*、眼を丸くして、返答もせず、鈴木君の顔を、大道易者のように眺めと見つめている。	165		主人听了这番离奇的解释，感到十分意外，◆便◆瞪起眼睛，并不搭话，像卦摊上的算命先生似的，盯住铃木的脸。	B	B-2
142		こんなところにまごまごしているともたまたま咽喉を喰う危険がある*から*、早く話しを歩を進めて、一刻も早く使命を完了する方が万全の策と心付いた。	165		但他明白在这关键时刻如果徘徊不前，仍有遭到奇袭的危险，莫如加快速度，尽快地完成使命，才是万全之策。	C	C
142		今度は主人にも納得が出来たらしい*ので*まようやく安心したが、	165		这下子主人似乎恍然大悟，铃木总算稳下心来。	C	C
144	「相変わらず口が悪い。しかし冗談は冗談として、ああ云う株は持ってて損はないよ、年々高くなるばかりだ*から*」		168	“还是那么刻薄。不过笑谈归笑谈。手里有那种股票是不会吃亏的，股票年年涨价的呀。”		C	C
144		そこへ行くと苦沙弥などは憐れなものだ。株と云えば大根の兄弟分くらいに考えているんだ*から*」	168	不过，谈起这些，苦沙弥之流就可怜了。你说“股”，他说不定以为是骨头的“骨”——“肉”的更大要嘛。”		C	C
145	実を云うと苦沙弥の方が汁粉の数を余計食ってる*から*曾呂崎より先へ死んで宜い訳なんだ]		169	说实在的，苦沙弥过多地吃了小豆汤，按理说，要比曾吕崎早死才是啊！”		C	C
145		御負けに御業に必ず豆腐をなまで食わせるんだ*から*、冷たくて食われやせん]	169	况且不炒菜，光是给你吃生拌豆腐，冰凉，怎么吃得下？”		C	C
145	「アハハハそう坊主が仏様の頭を叩いては安眠の妨害になる*から*よしてくれって言ったわけ。		169	“啊，哈哈……对呀，对呀！和尚说：“你敲死人的头，会妨害他们安眠的。住手吧！”		C	C
146	吾輩は美学を専攻するつもりだ*から*天地間の面白い出来事はなるべく写生しておいて将来の参考に供さなければならぬ、		170	“我是搞美学专业，◆所以◆，必须把天地间一切有趣的事物尽可能地全都描述下来，以供将来参考。		A	A-36
146		僕もあんまりな不人情な男だも思った*から*泥だらけの手で君の写生帖を引き裂いてしまった]	170	“我心想：此人太不通情理，◆便◆用泥乎乎的脏手把你的写生册扯碎了。”		C	C
146		「それを君がすました顔で写生するんだ*から*苛い。	170	“你还装模作样地给我画什么素描，真不像话！”		C	C
147	きつと書物なんか書く気遣はないと思った*から*賭をしたようなものの内心は少々恐ろしかった。僕に西洋料理なんか着る金はないんだ*から*な。		171	我虽然料到你一定写不出什么著作◆才◆打赌，但是内心还是十五个吊桶七上八下，因为我怀里并不拥有一顿西餐的钱。		B	B-6
147		あの寺の境内に百日紅が咲いていた時分、この百日紅が散るまでに美学原論と云う著述をすとう*から*、駄目だ、到底出来る気遣はないと云ったのさ。	171	当寺院里紫薇花开放时，迷亭说：他要在紫薇花飘零以前，写出一部有关美学理论的著作。我说办不到，你不会写成的。		C	C
147		そんなに疑うなら賭をしよう*と云う*から*僕は真面目に受けて何でも神田の西洋料理を奢りよこさなにかに極めた。	171	迷亭说：别看我这个样，但人不可貌相，我可是个硬汉子，若不相信，打个赌！我信以为真便打赌谁输谁请客，到袖田区去吃西餐。		C	C
147		いよいよ百日紅が散って一輪の花もなくなっても当人平気である*から*、いよいよ西洋料理に有りついたなと思つて契約履行を逼る迷亭すまして取り合わない]	171	紫薇花逐渐飘零，终于连一朵残红都不见。可他仍未动笔。我心想：这顿西餐算是吃定了，便催他履约。不料他竟装疯卖傻地不理那个碴！”		C	C
148	美学原論を著わそうとする意志は充分あったのだがその意志を君に発表した翌日から忘れてしまった。それだ*から*百日紅の散るまでに著書が出来なかつたのは記憶の罪で意志の罪ではない。		172	我想写美学原理的意志很坚定，可这意志对你发表后的第二天就已经忘得一干二净。◆因此◆，没能在紫薇花飘零以前完成我的著作，这是记忆力的罪孽，而不是意志的过错。		A	A-37
148	寒月はあんな妙に見識張った男だ*から*博士論文なんて無趣味な努力はやるまいと思つたら、		172	寒月这个人◆既然◆那么大肆夸耀自己满腹经纶，怎么会花费冤枉力气，写什么博士论文呢？		A	A-21
148	「君はくるたびに珍報を齎らす男だ*から*油断が出来ん]		172	“你这个家伙，每次来都说有奇闻。别上当！”		C	C
148	あれでやっばり色気がある*から*おかししいじゃないか。		172	看起来，他依然春心未泯。多么滑稽！		C	C
149	とにかく寒月の事だ*から*鼻の恐縮するよなものに違いない]		173	总之，这是寒月的事，一定会◆使◆“鼻子”大吃一惊的。”		B	B-5
149		迷亭は少しも気が付かない*から*平気なものである。	173		而迷亭却毫无察觉，表现得心安理得。	C	C
150	ねえ鈴木、君も実業家の末席を汚す一人だ*から*参考のために言つて聞かせるがね。		174	喂，铃木！你也算忝列末流实业家之一，仅供参考，谨进一言。		C	C
150	君は十年前と容子が少しも変わっていない*から*えらい]		174	老兄和十年前一点都没变样，了不起		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
150	しかるに不思議な事には学者の智識に対してのみは何等の褒美も与えたと云う記録がなかった*ので*、今日まで実は大に怪しんでいたところさ		175	然而，怪的是唯独对学者的知识却毫无褒奖的记录，实际上，至今◆也◆还是一个极大的谜。”		B	B-3
152	それだ*から*寒月には、あんな釣り合わない女性は駄目だ。		177	◆因此◆对于寒月来说，那么不般配的女人要不得的。		A	A-37
153	「君は何にも知らん*から*そうでもなからうなどと澄し返って、例になく言葉寡言に上品に控え込むが、		178	◆因为◆你一无所知，才装模作样他说：‘不至于这样吧！’你破例地寡言少语，摆出一副斯文的架势。		A	A-1
153	「大変な見識だな。しかし懐剣をもって歩行だけはあぶない*から*真似ない方がいいよ。		178	噢，好大的学问呀！不过，走路时袖里藏剑可不安全，还是不要模仿的好。		C	C
154	何を云うにも気をおかなくちゃならん*から*心配で窮屈*に苦しむよ。		179	不论说些什么，都必须提防着点儿。担心呀，紧张呀，真是苦恼哟！		C	C
154	僕はちと用事がある*から*これで失敬する」		179	我有点事，就此告辞。”		C	C
154	しかしそれにしても刃物は剣谷だ*から*仲見世へ行っておもちゃの空気銃を買って来て背負ってある*がよからう。愛嬌があつていい。		178	话是这么说，带凶器还是危险的，莫如到摊床去买个孩子玩的气枪背上走路倒还好些，怪招人喜欢的。		C	C
154	「僕もいこう、僕はこれから日本橋の演芸囃風会に行かなくちゃならん*から*、そこまでいっしょに行こう」		179	“我也走。我必须立刻到表演场风会去一趟，陪你走一段路吧！”		C	C
155	三角主義の張本金田君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋慕したと云う噂である。それだ*から*千金の春宵を心も空に満天下の雌猫雄猫が狂い廻るのを煩惱の迷のと軽蔑する気は毛頭ないのであるが、		181		“三绝主义”的创始人金田老板的千金，就是那位大吃甜年糕的富子小姐，也有过思恋寒月的艳闻。◆因此◆，普天下的雌猫雄猫，在那一刻千金的春宵里意惹情牵、如痴若狂，咱家从不把这些视为自寻烦恼而予以轻蔑	A	A-37
155	上は在天の神ジュピターより下は土中に鳴く蚯蚓、おけらに至るまでの道にかけて浮身を覆すのが万物の習いである*から*、吾輩どもが離れしと、物騒な風流気を出すのも無理のない話しである。		181		就此道而言，上自天神宙斯，下至上里啾鸣的蚯蚓、蝼蛄，无不力之心神憔悴，此乃万物之常情。◆那么◆，吾侪猫辈，一旦春心萌动，流露出亵渎之情，也就不算什么份之想了。	A	A-39
155	いかんせん誘われてもそんな心が出ない*から*仕方がない。		181		怎奈，纵然勾引咱家，也并不动情，有什么办法！	C	C
157	これは自分が罪がないと自信している*から*無邪気で結構ではあるが、		183		这种人◆由于◆自信无罪，倒◆也◆天真可取。	A	A-17
157	しかし事実は覚がなくても存在する事がある*から*困る。		183		但是，有些时候，你不知道，事实也依然存在。这◆就◆麻烦了	B	B-1
157	大方例の鼠だろう、鼠なら捕らぬ事に極めていい*から*勝手にあはれるが宜しい。		183		十有八九是那些老鼠。假如是老鼠，咱家已经决心不捉，随便他们闹腾去吧。	C	C
157	なるほど寝ていてする芸だ*から*覚はないに違ない。		183		的确，熟睡中的事嘛，本人肯定不会知道的。	C	C
158	此度は仕方がない*から*にやーにやーと二返ばかり鳴いて起こそうとしたが、		185		别无他策，◆便◆喵喵地叫了两声，想唤起他们。	B	B-2
158	主人の内の鼠は、主人の出る学校の生徒のごとく日中でも夜中でも乱暴狼藉の練修に余念なく、惘然なる主人の夢を驚破するのを天職のごとく心得ている連中だ*から*、かくのごとく遠慮する訳がない。		183		主人家的老鼠，全都像主人任教那所学校的学生，不论白天黑夜，一心操练行凶撒野，仿佛把惊破可怜的主人的幽梦奉为天职。他们绝不会像啾啾人那么客气的。	C	C
159	もう我慢出来ん*から*行李の影から飛出そうと決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰士がついに眼前にあらわれた。		186		忍无可忍，决心从柳条包后窜出，可就在这时，卧室的门咣的一声开了，恭候多时的梁上君子终于出场。	C	C
160	到底人間社会において目撃し得ざる底の伎倆である*から*、これを全能的伎倆と云っても差支えないだろう。		187		这毕竟是尘寰中无缘目睹的绝技，◆因而◆称之为“全能”也无妨吧！	A	A-35
160	しかるにこのパラドックスを道破した者は天地開闢以来吾輩のみである*と考えると、自分ながら満更な事でもない云う虚栄心も出る*から*、是非共ここにその理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ない云う事を、高慢なる人間諸君の脳裏に叩き込みたいと考える。		186		而开天辟地以来道破这一逆说者，恐怕独有咱家这只猫了！想到这里，咱家也有了虚荣心，自己也觉得咱家并不单纯是一只猫，必须就此阐明理由，将“猫也不可小瞧”这一观念，灌输给高傲人类的头脑中去！	C	C
161	本人逆せ上がって、神に吞まれている*から*悟りようがない。		187		然而，当事者却头昏眼花，惯于神威，◆因而◆难悟清醒。	A	A-35
161	彼等人間の眼は平面上に二つ並んでいるので左右を一時に見る事が出来ん*から*事物の半面だけしか視線内に這入らんのは気の毒な次第である。		187		因为人类的两只眼睛并列在一个平面上，不能同时顾盼左右，◆所以◆，只有事物的片面映入眼帘，够可怜的了。	A	A-36
161	彼等人間の眼は平面上に二つ並んでいる*ので*左右を一時に見る事が出来ん*から*事物の半面だけしか視線内に這入らんのは気の毒な次第である。		187		◆因为◆人类的两只眼睛并列在一个平面上，不能同时顾盼左右，所以，只有事物的片面映入眼帘，够可怜的了。	A	A-1
162	本を忘却するのは人間にさえありがちの事である*から*猫には当然の事だと大目に見て貰いたい。		188		不过，“忘本”，连在人类当中都已经是家常便饭，猫也自然难免，那就请大人不见小人人怪吧！	C	C
162	吾輩の眼前に悠然とあらわれた陰士の顔を見るとその顔が——平常神の製作についてその出来栄があるいは無能の結果ではあるまいかと疑っていたのに、それを一時に打ち消すに足るほどの特徴を有していた*から*である。		189		平时咱家就怀疑上帝造人的作品，也许其成功之处，恰是无能的结果。然而，当咱家看到梁上君子悠然出现在眼前时，但见他的面部特征，完全足以推翻咱家的立论	C	C
163	ああ云う才気のある、何でも早分りのする性質だ*から*この位の事は人から聞かんでもきつと分るのであろう。		190		像金田小姐那么既有才华又很机灵的女子，如此区区小事，即使不向别人请教，也肯定会一清二楚的！	C	C
164	しかし滅多に声を立てると危険である*から*じつと怯えている。		191		但是胡乱出声是危险的，◆只得◆忍住不笑。	B	B-8

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
164		この細君は煮物に使う三盆を用篋へ入れるくらい場所の適不適と云う観念に乏しい女である*から*、細君にとれば、山の芋は愚か、沢庵が寝室に在っても平気かも知れん。	191		头脑中缺乏“适材适所”这种观念。在她看来，别说是山药，说不定把咸萝卜放在卧室里也满不在乎。	C	C
164		陰士はちよつと山の芋の箱を上げて見たがその重さが陰士の予期と合して大分目方が懸りそう*ので*すこぶる満足の体である。	191		君子举起箱来一掂量，不出所料，很有分量，◆于是◆，显得十分惬意。	A	A-38
166		主人夫婦が要領を得ない問答をしているものだから*少々焦れた*と見えて	194		而主人夫妇却在没头没脑地互相问答，巡警似乎有些不耐烦。	C	C
166		巡査はただ形式的に聞いたのである*から*、いつ這入ったところが一向痛痒を感じないのである。	193		但是，巡警不过是走走形式，问问而已，至于那贼几时闯入，压根儿就无关痛痒。	C	C
167	「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝たところが盗賊が、どこそこの雨戸を外してどこそこに忍び込んで品物を何点盗んで行った*から* 右 告 訴 及 候 也 見 ぎ ぐ ぞ におよびせうろうなりという書面をお出しなさい。		194	「那么，请你交一份失盗申请书。上写：“明治三十八年某月某日，闭门就寝后，盗贼撬下某某窗窗，闯进某某室内，盗走某某物品。以上属实，特此申诉。”		C	C
167	「これから盗難告訴をかく*から*、盗られたものを一々云え。さあ云え」		194	「立刻写失盗申请书。你把被盗物品一件件地快说！喂，说呀！」		C	C
170	告訴はあなたが御自分でなさるんです*から*、私は書いていただかないでも困りません」		197	「申诉书是你自己要写的。你不写，与我何干！」		C	C
171	「わたしに言っても駄目だから*、あなたが先生にそうおっしゃい」		198	「跟我说也没用，去对老师当面说说吧！」		C	C
171	「どうです、喰べて見なすつたか、折れんように箱を眺らえて堅くつめて来た*から*、長いままでありましたろう」		199	“怎么样？尝过了吗？我订做了个木箱，牢牢地包装，免得山药折断。大概还保持原来那么长吧？”		C	C
172		「泥棒が這入って——そうして——泥棒が這入って——どんな顔をして這入ったの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答えていゝか分らん*ので*「恐い顔をして這入りました」と返事をして多々良君の方を見る。	199		“小偷来……小偷来……来的时候是一张什么样的脸？”对于这奇怪的发问，女主人也不知怎样回答才好，她说：“进门时是一张吓人的脸。”说着，看了看多多良。	C	C
172		あまり煩わしくて話も何も出来ぬ*ので*「さあさ御前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。今に御母あさまが好い御菓子上げる*から*」と細君はようやく子供を追いやって	200		孩子们太闹，说个话什么的都不便。“喂，喂，你们到院子里去玩一会儿，妈妈立刻给你们做好吃的。”女主人好歹把孩子们撵了出去。	C	C
173	「先生はどうしても教えて下さらない*から*、あなたに聞くです」		201	“你的老师说什么都不告诉我，◆所以◆才问你嘍！”		A	A-36
173	「やだわ、虫が食うなんて、そりゃ齧で釣るところは女だから*少しは売げますさ」		200	乱弹琴，哪里是虫子咬的！女人嘛，发髻往下坠的地方都会稍有点秃的。”		C	C
175		いわんや同君はすでに書生ではない、卒業の日には浅きにも係わらず堂々たる一個の法学士で、六井物産会社の役員であるのだから*吾輩の驚愕もまた一通りではない。	203		何况，此公已不再是寄人篱下的穷学生。虽然出校时尚浅，却是一名堂堂的法学士，在六井物产公司供职，◆那么◆，令人惊讶的程度，就更非同小可了。	A	A-39
176	「先生は実業家は嫌だ*から*、そんな事を言つたって駄目よ」		204	“老师讨厌实业家，即使说那番话也等于白说。”		C	C
176		昨日までは綿入を二枚重ねていたのに今日は恰に半袖のシャツだけで、朝から運動もせず枯坐したざりである*から*、不十分な血液はことごとく胃のために働いて手足の方へは少しも巡回して来ない。	204		以前，主人身穿两件棉衣，而今天只穿了件夹褂和半截袖的衬衫，从清早就一动不动，一直闷坐斗室，本已不足的血液全力支持他的胃，至于手脚，可就滴血不进了。	C	C
176		着物をとられた*ので*寒くていかん	204	可衣物失盗，冷得受不住呢。”		C	C
176		主人は猛烈なこの一言を聞いて、うふと気味の悪い胃弱性の笑を渡したが、別段の返事もしない*ので*、多々良君も是非食いたいたいとも云わなかったのは吾輩にとって望外の幸福である。	204		主人听了这句恶狠狠的话，立刻隐隐作呕，流露出胃病患者的病态笑容，但却并未作任何明确答复，多多良◆也就没有表示一定要吃，这在咱家来说，真是万幸。	B	B-3
177		細君はちよつと分りかねたものだから*返事をしない。	205		女主人却不懂，◆因此◆默不作声。	A	A-37
178	「月給が二百五十円で盆暮に配当がつきます*から*、何でも平均四五百円になりますばい。」		207	“月薪二百五十圆。年年年末还分红，平均起来要挣四五百元哪。”		C	C
178		多々良君は充分実業家の利益を吹聴してもう云う事が無くなったものだから*「奥さん、先生のところへ水島寒月と云う人が来ますか」	207		多多良为实业家的利益大肆吹捧了一通，再也没什么好讲，◆便◆说：“师母！有个叫水岛寒月的人到老师这儿来啦？”	B	B-2
179	「博士になったら、だれとかの娘をやるとかやらんとか云うていました*から*、そんな馬鹿があるうか、		208	“有人说什么：只要当上博士，哪家姑娘就嫁他等等。岂有此理！”		C	C
180		主人と多々良君が上野公園でどんな真似をして、芋坂で団子を幾皿食ったかその辺の逸事は探偵の必要もなし、また尾行する勇氣もない*から*ずっと略してその間休養せんければならん。	209		至于主人和多多良在上野公园干什么，在芋坂吃了几盘饭团，这类轶闻，咱家既无须探偵的必要，又无跟踪的勇氣，◆便◆一概略去，要趁机体休养了。	B	B-2
180		先刻から袷一枚であり寒い*ので*少し運動でもしたら暖かになるだろうと云う考から主人はこの先例のない動議を呈出したのである。	209		他一直只穿着一件夹袍，太冷了。他想，稍微活动一下也许会暖和些，于是，便破天荒第一次提出了这么个建议。	C	C
181		ただ外見上は至極沈静端肅の態である*から*、天下の凡眼はこれらの知識巨匠をもって昏睡仮死の庸人と見做して無用の長物とか殺潰したか入らざる誹謗の声を立てるのである。	210		◆只因◆外観上貌似极其沉静与端庄，天下的泥胎凡眼才把这知识巨匠视为昏睡假死的庸人，以至发出不应有的诽谤，说是废物、饭桶等等。	A	A-32
181		これらの凡眼は皆形を見て心を見ざる不具なる視覚を有して生れついた者で、——しかも彼の多々良三平君のごときは形を見て心を見ざる第一流の人物である*から*、この三平君が吾輩を目して乾屎 同等に心得るのもっともだが、	210		这类凡人，都是生就一双只具其貌而不识其心的瞎窟窿，而且，多多良三平者流，正是这类人中的头等货色，◆因此◆，他把我这猫看成干屎渣也就不足为奇了。	A	A-37

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
181		とかく物象にのみ使役せらるる俗人は、五感の刺激以外に何等の活動もない*ので*、他を評価するのでも形骸以外に渉らぬのは厄介である。	209		总之，万象奴役下的俗子凡夫，除了寻求感官刺激便无所作为；*因此*，他们评价他人时，也就形骸之外，概不涉及。	A	A-37
182		かくまでに元氣旺盛な吾輩の事である*から*鼠の一疋や二疋はとうとうとする意志さえあれば、寝ていても訳なく捕れる。	211		◆既然◆是这么精力充沛的猫，捉那么一两只老鼠嘛，只要想捉，闭上眼睛也不费吹灰之力便可以捉住的。	A	A-21
182		吾輩は日本の猫だ*から*無論日本鼠負である。	211		自家是日本猫，自然偏袒日本。	C	C
183		今まで捕らぬのは、捕りたくない*から*の事さ。	212		◆之所以◆至今没有捉到，◆是因为◆没想捉呀！	A	A-44
184		鼠と戦争をするのは覚悟の前だ*から*何足来ても恐くはないが、	213		与鼠作战，本是计划中事，不论来多少只老鼠也并不可怕。	C	C
185		まさかあんな高い処から落ちてくる事もなからう*から*とこの方面だけは警戒を解く事にする。	214		量它老鼠也不可能从那么高的地方跳下，◆那么*，这条线路就暂且撤防。	A	A-39
185		それでもまだ心配が取れぬ*から*、どう云うものかとだんだん考えて見るとようやく分った。	214		尽管如此，还是有点放心不下，这是怎么回事？左思右想才通。	C	C
185		心配せんのは、心配する価値がない*から*ではない。	214		面无忧色，并不等于不值得担心，	C	C
187		始めは勇氣もあり敵愾心もあり悲壯と云う崇高な美感さえあったがついには面倒と馬鹿げているのと眠いのと疲れた*ので*台所の真中へ坐ったなり動かない事になった。	217		一开始，既有勇气，也有杀敌观念，甚至还有所谓悲壮的崇高美感，而终于感到麻烦、懊丧、眼倦和疲乏，◆便◆一直蹲在厨房中心，一动不动。	B	B-2
188		しかし動かんでも八方睨みを極め込んでいれば敵は小人だ*から*大した事は出来ぬのである。	217		虽然不动，却装着眼观八方，以为小人之敌，成不了大患。	C	C
188		これではならぬと左の前足を抜き易る拍子に、爪を見事に懸け損じた*ので*吾輩は右の爪一本で棚からぶら下った	218		咱家倒换左脚工夫，◆由于◆没有抓牢，只右爪搭在架子上，全身悬空起来。	A	A-15
189		月が西に傾いた*ので*、白い光りの一帯は半切ほどに細くなった。	219		月儿裁西，银光如练，但已瘦削，宛如半截银弦。	C	C
190		第一頭の毛など云うものは自然に生えるものだから*、放っておく方がもつとも簡便で当人のためになるだろうと思うのに、	221		首先，头发是自然长起的，◆所以◆，咱家认为任其生长，大约是最简便而又对本人最有利的办法；	A	A-36
190		何しろこの毛衣の上から湯を使った日には乾かすのが容易な事でない*から*汗臭いの我慢してこの年になるまで洗湯の暖簾を潜った事は無い。	220		可是，怎奈这身皮毛一旦用水来洗，想晒干可就不容易，这◆才◆忍受着一身的汗腥味儿，长这么大，还没进过澡塘子的门。	B	B-6
190		折々は団扇でも使っても見ようと云う気も起らぬではないが、とにかく握る事が出来ないだ*から*仕方がない。	220		有时，不是不想扇扇子，可是握不住扇把，有什么办法！	C	C
191		丸い頭へ四角な枠をはめている*から*、植木屋を入れた杉垣根の写生としか受け取れない。	221		◆因为◆圆圆的头上好像扣上个方盘，只能看成是一幅花匠栽植的杉木篱笆的写生画。	A	A-1
191		永らく人間社会の観察を怠つた*から*、今日は久し振りで彼等が酔興に醜態する様子を拝見しようかと考えて見たが、	222		咱家怠于观察人世久矣。本想今天久违之后再去看领略一番人们想入非非、奔波劳碌的样子，	C	C
191		このほか五分刈、三分刈、一分刈さえあると云う話だ*から*、しまいには頭の裏まで刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などと云う新奇な奴が流行するかも知れない。	221		另外，听说还有留五分发，三分发，一分发的。到头来，说不定会流行起更新式的款式，往脑瓜骨里倒剃一分至三分哩。	C	C
192		昼寝は吾輩に劣らぬくらいやるし、ことに暑中休暇後になってからは何一つ人間らしい仕事をせん*ので*、いくら観察をしても一向観察する機会がない。	222		他贪于午睡不比咱家差，尤其暑假以后，有点人样的事他一点都不做，◆所以◆，再怎么观察，也总要扫兴的。	A	A-36
192		細君は隣座敷で針箱の側へ突っ伏して好い心持ちに寝ている最中にワゴンと何だか鼓膜へ答えるほどの響がした*ので*はっと驚ろいて、	223		女主人在隔壁，伏在针线盒旁睡得正香，忽听哇啦啦一阵吵嚷，几乎震破耳鼓。她大吃一惊。	C	C
193		なかなか半熟にならないから、下へおいて新聞を読んでいると客が来たもんだ*から*つい忘れてしまつて、	224		连个半熟也煎不成。我从房顶下来，正在看报，有客人来，◆就◆把房瓦煎鸡蛋的事给忘了。	B	B-1
193		「屋根の瓦があまり見事に焼けていました*から*、ただ置くのも勿体ないと思つてね。	224		“我看房瓦上大火烧得格外地旺，觉得白白浪费掉太可惜，	C	C
193		なかなか半熟にならない*から*、下へおいて新聞を読んでいると客が来たもんだ*から*つい忘れてしまつて、	224		连个半熟也煎不成。我从房顶下来，正在看报，有客人来，就把房瓦煎鸡蛋的事给忘了。	C	C
193		「奥さんなんぞ首の上へまだ載っけておくものがあるんだ*から*、坐つちやいられないはずだ。	224		像嫂夫人，头上还顶着个东西，是要坐不住的。	C	C
194		牛の尻尾を持ってぐいぐい引いて行ったもんだ*から*ハーキュリスが眼を覚まして牛やーい牛やーいと尋ねてあるいても分らないんです。	226		◆因为◆这小子是扯着牛尾巴往后拖的，赫拉克利斯睡醒之后，到处寻找：“我的牛啊，我的牛啊”，就是找不到。	A	A-1
194		しかし最前の倒行して逆進すで少々懲りている*から*、今度はただ「へえー」と云つたのみで問ひ返さなかつた。	225		◆只因◆刚被“倒行逆施”那句话弄得尴尬，她这回才只“噢”的一声，不再反问。	A	A-32
194		細君もそれには及びませんとも言ひ兼ねたもんだ*から*「ええ」と云つた。	225		嫂夫人碍难拒绝，◆便◆“噢”的一声。	B	B-2
195		「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙るんです。今途中で御馳走を誂らえて来まして*から*、そいつを一つここでいただきますよ」	227		“不，茶水泡饭也罢，开水泡饭也罢，全免。刚才路上，我顺便在饭馆叫了些饭菜，◆就◆在这儿享用了吧！”	B	B-1
196		「せっかく見事な帽子をもし壊わしでもしちゃあ大変です*から*、もう好い加減になすつたら宜うござんしょう」	228		“好容易买一顶出奇的帽子，若是弄坏，那还了得！我看你还是见好就收吧！”	C	C
196		ところへ主人が、いつになくあまりやかましい*ので*、寝つき掛った眼をさかに扱かれたような心持で、ふらふらと書斎から出て来る。	227		然而，◆由于◆过分吵闹，主人的睡意似乎一扫而光。不知什么工夫，他踉踉跄跄地走出书房。	A	A-15
197		「ところが壊われない*から*妙でしょう」	228		“要知道，◆就因为◆不会弄坏，它◆才◆出奇哪！”	A	A-50

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
197	「今一々説明します*から*聞いていらっしやい。」		230	“现在，我来一一加以说明，请听我说下去。”		C	C
197		「だから今度はあなたのような丈夫で綺麗なを買ったら善かろうと思えます*と細君はパナマの値段を知らないものだ*から*「これに下さいよ、ねえ、あなた」としきりに主人に勧告している。」	229		“因此才想，再买一顶像您那顶结实的帽子就好啦！”女主人不了解巴拿马草帽的价钱，再三劝丈夫：就买这样的吧！嗯？喂！”	C	C
198	また刃の裏には度盛がしてある*から*物指の代用も出来る。		230	刀背上有刻度表，可以当作格尺用		C	C
199		真面目なような巫山戯たような動作だ*から*細君も応対に窮したと見えて「さあどうぞ」と軽く返事をしたざり拜見している。	231		听起来，又像真事儿，又像开玩笑，弄得女主人无言以对，只低声说：“噢，您请！”然后看着他吃。	C	C
200	喰い掛けたものだ*から*ちよっと失敬しますよ		233	我正在用餐，暂且失陪！”		C	C
200	「金田令嬢がお待ちかねだ*から*早々呈出したまえ」		233	“金田小姐已经等急了，快些交卷吧！”		C	C
200		ところが茶碗の中には元からツユが八分目道入っている*から*迷亭の箸にかかった蕎麦の四半分も浸らない先に茶碗はツユで一杯になってしまった。、	232		然而，碗里原本就装了八分，还不等迷亭手里的面条放进四分之一，碗里的汁已经满了。	C	C
201	「そうさ問題が問題だ*から*、そう鼻の言う通りにもならないね。」		234	“是呀，问题总归是问题，事情不能以‘鼻子’的意志为转移。”		C	C
201	「罪です*から*なるべく早く出して安心させてやりたいのですが、		234	罪过！我也想早些交稿，叫她安心。		C	C
202	なに本を読みに来たんじゃない、今門前を通り掛たらちよっと小用ようがしたくなった*から*拝借に立ち寄ったんだ		236	哪里，我不是来看书的。刚才从门前路过，突然想小解，这◆才◆进来借地方方便一下。”		B	B-6
204	さぞ御腹が御減りでしょうと云います*から*、何でも善いから早く食わせ給えと請求したんです。		239	他们问我：“喂，大概饿了吧？”我◆就◆恳求说：“什么都行，请快些给我点东西吃吧！”		B	B-1
204	一面倒だ*から*ほほ十五六年前としておこう		238	真麻烦，那◆就◆姑且定为十五六年前吧！”		B	B-1
204	惜しい事に先生は永眠された*から*、美のところ話す張合もないんだが、		237	遗憾的是先生已经长眠了。老实说，我已经没有兴致讲它。		C	C
204	「ところが日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がない*から*峠の真中にある一軒屋を敲いて、これこれかようかようしかじかの次第だから、どうか留めてくれと云うと、		238	“这时，天黑了，路不熟，肚子又饿，没办法，去敲了山腰一户人家的门，说明情况如此这般，这般如此，请求借宿一宵。”		C	C
204	「そりゃ僕の艶聞などは、いくら有ってもみんな七十五日以上経過している*から*、君方の記憶には残っていないかも知れないが		237	唉，我的风流史嘛，不管有多少，无奈都已经是旧闻，也许在你们的记忆中已经荡然弗存了……		C	C
204	「ところが日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がない*から*峠の真中にある一軒屋を敲いて、これこれかようかようしかじかの次第だ*から*、どうか留めてくれと云うと、		238	“这时，天黑了，路不熟，肚子又饿，没办法，去敲了山腰一户人家的门，说明情况如此这般，这般如此，请求借宿一宵。”		C	C
205	「その時分の僕は随分悪もの食いの隊長で、蝗、なめくじ、赤蛙などは食い厭きていたくらいなところだ*から*、蛇飯は乙だ。」		239	“当时，我是个什么都敢吃的大王。什么蝗虫啦，蚰蜒啦，蛤什蟆啦，刚好都已经吃腻，吃顿蛇饭，倒也别有风味。”		C	C
205	その穴から湯気がぶうぶう吹く*から*、旨い工夫をしたものだ。		239	从窟窿眼里呼呼地冒出热气来。窍门真棒！		C	C
205	爺さんふと立って、どこかへ出て行ったがしばらくすると、大きな箆を小脇に抱い込んで帰って来た。何気なくこれを囲炉裏の傍へ置いた*から*、その中を覗いて見ると——いたね。		239	老人家忽然起身，不知去到哪里，过了一会他回来，腋下挟着个竹篾。他把竹篾随手搁在炉旁。我往里这么一瞧哇，有货！		C	C
205	長い奴が、寒いもんだ*から*御互にとぐるの捲きくらをやって塊まっていますね		239	那些长长的家伙，大概是太冷，扭成一堆，滚成一团哟！”		C	C
205	さあこれからがいよいよ失恋に取り掛るところだ*から*しっかりと聴きたまえ		239	喂，眼看到失恋的时候了，可要竖耳细听哟！”		C	C
205	「どうしてこれが失恋の最大原因になるんだ*から*なかなかなんかせませんや。」		239	“为什么？这可是促成我失恋的最大原因，万万免不得的。”		C	C
206	「鍋の中が熱い*から*、苦しませに這い出そうとするさ。」		240	“◆因为◆锅里热，万般无奈想钻出去呀！不		A	A-1
206	「そこで充分御饗も頂戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見るし、もう思いおく事はないと考えていると、御体みなさいましと云うので、旅の労れもある事だ*から*、仰に従って、ごろりと横になると、すまん訳だが前後を忘却して寝てしまった」		241	“于是，我吃得饱饱的，不觉冷了，又不客气地欣赏姑娘的芳容，已经没有任何遗憾。这时，忽听：“请安歇吧！”只好客随主便。也许◆由于◆旅途劳累，对不起，我一头倒下，便睡得死死的。”		A	A-15
206	「もう少しで失恋になる*から*しばらく辛抱していらっしやい。」		240	眼看就到失恋那一段了，再忍着点儿。		C	C
207	「くだらない失恋もあったもんだ。ねえ、寒月君、それだ*から*、失恋でも、こんなに陽気で元気がいいんだよ」		242	“竟有这样无聊的失恋。是吧？寒月君！◆正因为◆无聊，他◆才◆虽然失恋，也依然这么兴高采烈、精力饱满嘛！”		A	A-48
207	「あの髪はどこで買ったのか、拾ったのかどう考えても未だに分らない*から*そが神秘さ」		242	那顶发套是从哪儿买来的？还是拣来的？我百思莫解，这一点◆就◆很神秘呀！”		B	B-1
207	「それがさ、僕にも識別しにくかった*から*、しばらく拜見していて、その粟缶がこちらを向く段になって驚ろいたね。」		241	“当时嘛，我也分辨不清。瞧了一阵子，待到秃头扭过脸来面向我时，不禁大吃一惊。		C	C
207	「僕も不思議の極内心少々怖くなった*から*、なお余所ながら容子を窺っていると、		241	“当时，我太意外，内心有点害怕。但我还是从旁观察。”		C	C
207	迷亭の駄弁もこれで一段落を告げた*から*、もうやめるかと思いのほか、		242	迷亭的胡诌八扯，到此告一段落。你以为他会住口吗？		C	C

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
208	結婚なんかは、いざと云う間際になって、飛んだところに傷口が隠れているのを見出す事がある者だ*から*。寒月君などもそんなに憧憬したりしよきょうしたり独りでむずかしがらないで、篤と気を落ちつけて珠を磨るがいいよ]		243	结婚这档子事，到了关键时刻，常常会发现在意料不到的地方隐藏着伤口。◆因此◆，我奉劝寒月君不要那么朝思暮想，神魂颠倒地折磨自己，还是赶快收心，磨你的玻璃球吧。”		A	A-37
208	もつともその時分には、あの宿屋に御夏さんと云う有名な別嬪がいて老梅君の座敷へ出たのがちよよとどの御夏さんなのだ*から*無理はないがね]		243	是啊。那时候，旅馆里有个出名的美女叫阿夏。到老梅的房间里来侍候的，恰好正是她。这◆就◆难怪了。”		B	B-1
208	あの時あの葉街を知らずに貰ったが最後生涯の日障りになるんだ*から*、よく考えないと険谷だよ]		243	假如当时不知道她是个秃子就娶到家来，终究要成为一生碍眼的婆娘。不慎重考虑，那可有点凶的！		C	C
208	向うでそうさせないんだ*から*弱り切ります]		243	可是对方不答应，真是糟透了。”		C	C
209	うーんうーんと唸ったが少しも利用がない*から*また御夏さんと呼んで今度は静岡に医者はあるまいかと聞いたら、		244	痛得哼呀地直叫喊，一点也不见好，◆便◆又叫来阿夏，问她静岡有没有医生？		B	B-2
210	そうして二十年もいっしょになっているうちに寺参りよりほかに外へ出た事がないと云うんだ*から*情けないじゃないか。		245	并且，老两口共同生活了二十年，据说除了参拜神社，不曾一同跨出大门一步，岂不太惨了吗？		C	C
211	「そうですとも、出鱈目じゃない、ちゃんと証拠がある*から*仕方ありませんや。」		246	“是呀！我不是胡说。证据确凿，有什么办法。		C	C
211	「どうしてこれが二十世紀の今日と明治初年頃の女子の品性の比較について大なる参考になる材料だ*から*、そんなに容易くやめられるものか——		247	为什么？这对于二十世纪的今天和明治初年女人人格的对比研究，可是大有价值的参考资料，怎么能轻易就不讲呢……		C	C
211	ええ前の奴は始終見ている*から*間違はありませんがね]		247	“地道！前边那个我始终看在眼里，不会有问题的。		C	C
212	何しろ眼がないんです*から*、ことによるとひびが入ってるかも知れません。		247	挑在后边那个，◆因为◆我没长后眼，往坏处想，也许有点毛病。		A	A-1
212	「この頃の女は学校の行き帰りや、合奏会や、慈善会や、園遊会や、ちよいと買って頂戴な、あらおいや？ などと自分で自分を売りにあるいています*から*、そんな八百屋のお余りを雇って、女の子はよしか、なんて下品な依托販売をやる必要はないですよ。		248	“现代女性，在往返学校的途中，在音乐会、慈善会或游园会上喊：‘请买下我吧！’‘啊？不喜欢？’……她们自己拍卖自己，再也没有必要雇那些难缠的商贩干那种下贱的寄售营生，喊什么‘谁买女孩喽！’		C	C
212	實際を云うとこれが文明の趨勢です*から*、私などは大に喜ばしい現象だと、		248	然而老实说，这是文明发展的趋势，是我们万分高兴的好现象，		C	C
212	買う方だって頭を蔽って品物は確かかなんて聞くような野暮は一人もないんです*から*その辺は安心なものでさあ。		248	像从前那样，买主敲敲脑壳，问问货色地道吗？再也没有人说这种蠢话，尽管放心。		C	C
213	それがみんな Agnodice の世話なんだ*から*大変儲かった。		250	全都是托阿古娜底斯的福降生的。◆因此◆她发了一笔大财。		A	A-37
213	筒袖つっつそでを穿いて鉄棒へぶら下がる*から*感心だ。		249	穿件短袖和服，吊在铁杠上，我算服啦。		C	C
213	「どうも美な感じのするものは大抵希臘から源を発している*から*仕方がない。		249	“凡是给人以美感的，大抵都起源于希腊，有什么办法！		C	C
214	ところが亜典の女連が一同連署して嘆願に及んだ*から*、時の御奉行もそう木で鼻を括ったような挨拶も出来ず、		250	不过，雅典的妇女们联名请愿，官长们又不便敷衍了事，才把这名女产婆无罪释放，		C	C
215	近頃は旧劇とか新劇とか大部やかましい*から*、僕も一つ新機軸を出して俳劇と云うのを作った見たのさ]		252	近来旧剧呀，新剧呀，好不热闹！我也想出个新花样，写了一出俳剧。”		C	C
215		幸にして苦沙弥先生門下の猫兒となって朝夕虎皮の前に侍べる*ので*先生は無論の事迷亭、寒月乃至東風など云う広い東京にさあまじり例のない一騎当千の豪傑連の举止動作を寝ながら拝見するのは吾輩にとって千載一遇の光栄である。	251		幸而我成为苦沙弥先生门下的猫，朝夕服侍左右，◆因而◆不要说苦沙弥，就连偌大东京绝无仅有的迷亭、寒月乃至东风，都躺着就能够欣赏这些以一当十的英雄豪杰们的举止言谈，这在猫儿我来说，实乃三生有幸！	A	A-35
216	「根が俳句趣味からくるのだから*、あまり長たらしくって、毒悪なのはよくないと思つて一幕物にしておいた]		252	“◆因为◆源于俳风，如果冗长无聊就只好，◆所以◆，写成了独幕剧。”		A	A-7
216	「しかしあれは稽古のためだ*から*、ただ見ているのとは少し違ふよ]		253	“然而，那是为了教学呀！那可不同于专供人们观赏哟！”		C	C
217	着付けは陸軍の御用達見たようだけれども俳人だ*から*なるべく悠々として腹の中では句案に余念のない体であるかなくっちゃいけない。		253	看他的衣着，很像个陆军的军需商人。然而，◆因为◆他是个俳坛诗人，必须尽可能表现出从容不迫、一心推敲诗句的神态。		A	A-1
218	さあ自分が惚れた眼で鳥が枝の上で動きもしないで下を見つめているのを見たものだ*から*、はあ、あいつも俺と同じく参ってるなど痴言をしたのです。		255	是啊，◆只因◆他以钟情的眼睛观看停在枝头正在俯视的乌鸦，这◆才◆使他产生了错觉：“哈哈，乌鸦竟和我一样倾心了。”		A	A-33
219	「先生御分りにならんのはごもっともで、十年前の詩界と今日の詩界とは見違えるほど発達しております*から*。		257	“先生，您不懂这首诗是不奇怪的，◆因为◆今天的诗坛比起十年前，已经发展得面目一新了。		A	A-1
219		主人はちょっと神秘的な顔をしてしばらく一頁を無言のまま眺めている*ので*、迷亭は横から「何だい新体詩かね」と云いながら覗き込んで	256		主人流露出神秘的表情，把第一页默默地看了多时。迷亭从旁说：“什么？是新体诗吗？”说着，他把诗稿扫了一眼，	C	C
220	全くインスピレーションで書く*ので*詩人はその他には何等の責任もないのです。		257	◆因为◆是全凭灵感而写，此外，诗人不负任何责任。		A	A-1
220	誰が読んでも朦朧として取り留めがつかない*ので*、当人に逢つて篤と主意のあるところを糺して見たのですが、		257	谁看都稀里糊涂，不得要领，◆便◆去见作者，盘问《一夜》的主题思想是什么。		B	B-2

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
220	この頃の詩は寝転んで読んだり、停車場で読んではどうい分りようがない*ので*、作った本人ですら質問を受ける*と返答に窮する事がよくあります。		257	现在的诗，毕竟不是躺在床上或是蹲在车站就可以读得懂的。就连作者，如果受到质问，也常常穷于答辨。		C	C
221	魂である*から*常にふらふらしている		259	◆因为◆是魂，◆才◆常常恍惚惚惚的。		A	A-2
221	「東風君の御作も拝見した*から*、今度は僕が短文を読んで諸君の御批評を願おう」		258	“诸位已经看过东风君的大作。现在我来读一段短文，请诸位指正。”他说得煞有介事。		C	C
222	この集中にも恋の詩が多いのは全くああ云う異性の朋友からインスピレーションを受ける*から*だろうと思う。		260	这本诗集◆之所以◆爱情诗居多，我想，可能就◆是由于◆从异性朋友那里得到灵感。		A	A-45
222	それで僕はあの令嬢に対しては切実に感謝の意を表しなければならん*から*この機を利用して、わが集を捧げる事にしたのさ		260	因此，我必须对那位小姐诚恳恳地表示谢意，◆便◆借此机会，献上我的诗集。		B	B-2
222		さすがの名文もあまり短か過ぎるのと、主意がどこにあるのか分りかねる*ので*、三人はまだあとがある事と思って待っている。	259		但◆因◆这篇奇文妙笔太短，主题何在也不清楚，三人◆便◆以为还有下文，等待主人读下去。	A	A-12
222		いくら待っていても、うんとも、すんとも、云わない*ので*、最後に寒月が「それぎりですか」と聞くと主人は軽く「うん」と答えた。	259		可是干等，主人也不说个青红皂白，最后寒月问道：“就这些？”“嗯。”主人低声说，说得过于轻松。	C	C
223		もつとも吾輩は去年生れたばかりで、当年とって一歳だ*から*人間がこんな病気に罹り出した当時の有様は記憶に存しておらん。	261		的确，咱家去年才降生，今年才一周岁。◆因此◆，记忆中并不存在当年人类染上这种疾病时是什么样子的。	A	A-37
223		吾輩も彼等の変化なき雑談を終り聞かねばならぬ義務もない*から*、失敬して庭へ蟻螂を探しに出た。	260		咱家可没有义务必须逐天每日倾听他们那些老生常谈，◆便◆暗自失陪，到院子里找找螳螂去了。	B	B-2
224		——呼吸はいかかん、魚の事だ*から*潮を引き取ったと云わなければならん——	262		不，呼吸二字，用词不当。鱼嘛，应该说停止“吞吐”。	C	C
226		——これはすこぶる興味のある運動の—だが滅多にやるとひどい目に逢う*から*、高々月に三度くらいしか試みない。	265		这些倒是饶有趣味的运动；但是，常干就要倒霉。◆因此◆，顶多一个月玩那么两三回。	A	A-37
226		次には金がない*から*買う訳に行かない。	264		其次◆因为◆没钱，◆也◆就不可能去买。	A	A-5
226		さて吾輩の運動はいかなる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れん*から*—応説明しようと思う	264		却说，也许有人纳闷儿：咱家的运动属于哪一类？◆那◆就◆交待一下吧！	B	B-1
227		ことに人間の相手がおらんと成功しない*から*駄目。	265		尤其没有一个人搭伴就不可能成功，◆所以◆，不行。	A	A-36
227		振り上げた首は軟かい*から*まぐにやり横へ曲る。この時の蟻螂君の表情がすこぶる興味を添える。	265		那昂起的镰刀头柔软，◆所以◆一弹就软瘫瘫地向旁弯了下去。这时，螳螂仁假的表情非常逗人。	A	A-36
227		先方がいつまでもこの態度でいては運動にならん*から*、あまり長くなるとまたちよいと一本参る。	266		假如对方一直坚持这种态度，那就构不成运动。◆所以◆又延长了一段时间，咱家又用爪扯了它一下。	A	A-36
227		しかし敵がおとなしく背面に前進すると、こっちは気の毒だ*から*庭の立木を二三度飛鳥のごとく廻ってくる。	266		但是，对方竟文文静静地倒退。我觉得它怪可怜的，◆便◆在院里的树上像鸟飞似地跑了两三圈。	B	B-2
227		もう吾輩の力量を知った*から*手向いをする勇氣はない。ただ右往左往へ逃げ怒りのみである。	266		它已经知道咱家的厉害，◆便◆没有勇气再较量，只是东一头、西一头的，不知逃向哪里才好。	B	B-2
227		蟻螂でもなかなか健気なもので、相手の力量を知らんうちは抵抗するつもりでいる*から*面白。	265		别看是螳螂，却非常勇敢，也不掂量一下对方的力气就想反扑，真有意思。	C	C
228		こうなると少々気の毒な感はあるが運動のためだ*から*仕方がない。	267		这一来，咱家虽然有点觉得它怪可怜的，但为了运动，◆也◆就顾不上这许。	B	B-3
228		今度は地面の上へ寝たぎり動かない*から*、こっちの手で突っついて、その勢で飛び上がるところをまた抑えつける。	267		这下子它躺在地上不能动了，咱家◆才◆用另一只爪推它，趁它往上一窜的工夫再把它按住。	B	B-6
228		君は惰性で急廻転が出来ない*から*やはりやむを得ず前進してくる。	267		由于惰性原理，螳螂不能急转弯，不得已◆只好◆依然向前。	B	B-9
228		しかし吾輩も右往左往へ追っかける*から*、君はしまいに苦しがって羽根を振って一大活躍を試みる事がある。	266		然而，咱家也左右冲撞地跟踪追击。仁兄终于受不住，扇动着翅膀，试图大战一场。	C	C
229		吾輩は四本の足を有している*から*大地に行く事においてはあえて他の動物には劣るとは思わない。	268		我有四条腿，敢说在大地上奔跑比起其它动物毫不逊色。	C	C
229		元来が引力に逆らっての無理な事業だ*から*出来なくても別段の恥辱とは思わんけれども、	268		本来爬树是违反地心引力的蛮干行为，就算是不会爬树，也不觉得耻辱。	C	C
229		人間の自ら誇る点もまたかような点にあるのだから*、今即答が出来ないならよく考えておいたらよかろう。	268		人类自豪之处，也正是这一点。假如不能立刻回答，那就仔细想想好了。	C	C
229		幸に爪と云う利器がある*ので*、どうかこうか登りはするものの、はたで見ると楽ではござらん。	268		幸而咱家有利器猫爪，好好歹歹总算能爬得上去；不过，这可不像旁观者那么轻松。	C	C
230		吾輩は仕方がない*から*ただ声を知るべに行く。	269		没办法，◆只好◆把蝉叫声当作目标。	B	B-9
230		それは余事だ*から*、そのくらいにしてまた本題に帰る。	269		这是闲话，还是书归正传。	C	C
230		集合は陳腐だ*から*やはり集注にする。	269		“集合”二字又过于陈腐，还是叫“集注”吧！	C	C
230		しかもその葉は皆団扇くらいな大きさである*から*、彼等が重い重なる枝がまるで見えなくらい茂っている。	269		而且都像团扇那么么大，如果长得里三层外三层的，就会茂密得几乎看不见树枝。	C	C
230		下から一間ばかりのところまで梧桐は注文通り二又になっている*から*、ここで一休息して葉裏から蝉の所在地を探偵する。	269		从树下往上爬五六尺远。于是梧桐树很可心，枝分两杈。在这儿聊以小栖，从树叶下侦察蝉在什么地方。	C	C
230		逃げるのは仕方がない*から*、どうかい便ばかりは垂れんように致したい。	269		逃掉就逃掉，但愿蝉兄千万不要撒尿。	C	C

原文		訳文		対訳	接続語No			
ページ	会話文	地	文			ページ	会話文	地
230		どこをどう見廻わしても、耳をどう振っても蟬気がない*ので、出直すのも面倒だからしばらく休息しよう、又の上に陣取って第二の機会を待ち合せていたら、		270		咱家曾经爬到此处，不论怎么东张西望，任你怎么晃动耳朵，也不见个蝉影。再爬一次吧，又嫌麻烦，因而想歇息片刻，便在树杈上安营扎寨，等待第	C	C
231		人間のあさはかな見では、どうせ降りるのだから*下向に駆け下りる方が楽だと思うだろう。		271		按人们肤浅的见识，一定认为*既然*是往下爬，还是头朝下舒服吧？	A	A-21
231		どこをどう見廻わしても、耳をどう振っても蟬気がないので、出直すのも面倒だから*しばらく休息しよう、又の上に陣取って第二の機会を待ち合せていたら、		270		咱家曾经爬到此处，不论怎么东张西望，任你怎么晃动耳朵，也不见个蝉影。再爬一次吧，又嫌麻烦，*因而*想歇息片刻，便在树杈上安营扎寨，等待第二次机遇的来临。	A	A-35
232		猫の爪はどっちへ向いて生えていると思う。みんな後ろへ折れている。それだから*唇口のように物をかけて引き寄せる事は出来るが、逆に押し出す力はない。		271		你猜猫爪是冲哪边长的？都是口朝后。*因此*，像鹰嘴钩一样，钩住什么东西便于往身前拽，往后推就使不上力气。	A	A-37
232		吾輩は松の木の上から落ちるのはいやだから*、落ちるのを緩めて降りなければならぬ。		271		咱家不喜欢从松树上往下落，*因此*，定要减缓落下的速度以便降下来。	A	A-37
232		すると吾輩は元来地上の者である*から*、自然の傾向から云えば吾輩が長く松樹の巔に留まるを許さんに相違ない、		271		*由于*咱家是地上的动物，按理，肯定不可能在松树之巅久留。	A	A-15
232		君等は義経が 鶴 越を落としたことだけを心得て、義経でさえ下を向いて下りるのだから*猫などは無論下た向きでなくさんだと思うだろう。		271		这些人恐怕只记得源义经翻下鹤越古栈②的故事，以为*既然*源义经都头朝下下山，*那么*，猫嘛，自然充其量不过是头朝下爬树罢了。	A	A-25
232		吾輩の爪は前申す通り皆後ろ向きである*から*、もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は悉く、落ちる勢に逆って利用出来る訳である。		272		咱家的爪如上所述，都是口朝外的。假如头部在上，爪在下，那么就能够利用脚爪的力量顶住下落的力量；	C	C
233		先方は羽根のある身分である*から*、こんな所へはとまりつけている。		273		而对方*因为*有翅膀，在这种地方是站得惯的，*因而*愿意逗留多久都可以。	A	A-8
233		吾輩は仕方がない*から*、そろそろ歩き出した。		273		没办法，我*只得*慢慢走去。	B	B-8
233		ことに所々に根を焼いた丸太が立っている*から*、ちょっと休息に便宜がある。		272		尤其到处立着烧断根的松木杆，这便于咱家随处歇气儿。	C	C
233		これは推参な奴だ。人の運動の妨をする、ことにどの鳥だか*辯もない分在で、人の癖へとまるという法があるもんだと思った*から*、通るんだおい除きたまえと声をかけた。		272		这是些冒失鬼，妨碍别人运动！尤其这些乌鸦家居何处？还来历不明，身份不清，怎能随便落在别人家的墙上？想着想着喊道：“咱家要过去！喂，闪开！”	C	C
233		今日は出来がよかった*ので*今朝から昼までに三返やってみたが、やるたびにうまくなる。		272		今天成绩很不错，从早到晚跑了三圈，越跑越熟练，越熟练就越有趣	C	C
234		面倒だ*から*、いっそさよう仕ろうか、		273		一定难缠，索性*就*这么办吧！	B	B-1
234		名前はまだない*から*係わりようがなかろうと云うなら体面に係わる		274		如果说咱家还没名没姓，谈不上与名声有关，那么就与颜面有关吧！	C	C
235		機を見るに敏なる吾輩はとうてい*駄目と見て取った*から*、奇麗さっぱりと椽側へ引き上げた。		275		咱家可会看风头。约觉于己不利，干净利落，嗖地一下子溜进檐廊去了。	C	C
235		人間は愚かなものである*から*、猫なで声で——猫なで声は人間の吾輩に対して出す声だ。		275		人嘛，全是些蠢货。娇声娇气地叫几声就行。按理，娇声媚气应是人们为咱家而发。	C	C
235		諺にも鳥合の衆と云う*から*三羽だって存外弱いかも知れない。		274		俗语也说“鸟合之众”嘛，它们虽然三只，*说不定*意外地无能。	C	C
235		しかるに近來吾輩の毛中にのみと号する一種の寄生虫が繁殖した*ので*滅多に寄り添うと、必ず頸筋を持って向うへ抛り出される。		275		然而近來，咱家的皮毛里繁殖着一种号称跳蚤的寄生虫，偶一靠近人，肯定要掐住脖子远远扔出去。	C	C
235		とにかく人間は愚かなものである*から*撫でられ声で膝の傍へ寄って行くと、大抵の場合において彼もしくは彼女を愛するものと誤解して、		275		反正人嘛，都是些蠢货。咱家被诱发出娇媚声，往人们的腿上一靠。人们大抵误以为是爱上了他或她。	C	C
236		——人間の取り扱が俄然豹変がした*ので*、いくら痒くても人力を利用する事は出来ん。		276		*既然*人们对咱家风云突变，身上再怎么痒，也不能指望靠人力解决。	A	A-21
237		どうせ人間の作ったものだから*碌なものではないには極まっているが		277		*既*是是人类所造，肯定不含糊。	A	A-29
237		吾輩はただでさえこのくらいな器量だ*から*、これより色男になる必要はないようなもの、		277		咱家自来就这么漂亮，又不想当个花花公子，本可以去；	C	C
237		主人がすまして這入るくらいのことろだ*から*、よもや吾輩を斬る事もなからうけれども万が一お気の毒様を食うような事があつては外聞がわるい。		277		连主人都大模大样地跨入，料想也没有理由将咱家拒之于门外。但是，万一吃点什么苦头，传闻可就不大好听。	C	C
238		その向側で何かしきりに人間の声をする。いわゆる洗湯はこの声の発する辺に相違ないと断定した*から*、松薪と石炭の間に出来る谷あいを通り抜けて左へ廻って、		278		对面却有人语频频。可以断定所谓的澡塘子，一定就在发出语音的那一带，*便*穿过木炭和煤堆中间形成的深谷，再往左拐。	B	B-2
238		吾輩は二十世紀の猫だ*から*このくらいの教育はある。		278		咱家是二十世纪的猫，这么点教育还是受过过的。	C	C
238		板の高さは地面を去る約一メートルだ*から*飛び上がるには御跳えの上等である。		278		地板约高于地面三尺，若想跳上去，它可是个上等跳台，	C	C
238		——長い事だ*から*これはトイフェルスドレック君に譲って、繻くだけはやめてやるが、——		279		这要扯得太远，还是不谈这些，让给退菲尔斯特莱克①翻去吧——	C	C
239		図案学校の事である*から*、裸体画、裸体像の模写、模型を買い込んで、		279		*既*是绘图学校，*那么*，买些裸体画、裸体像的素描与模型，	A	A-31
239		日本でさえ裸で道中がなるものかと云うくらいだ*から*独逸や英吉利で裸になつておれば死んでしまう。		280		就连在日本都常说：“不穿衣服怎能出远门”。如果是在德国或英国光着身子，*口有必死	C	C
239		希臘人や、羅馬人は平常から裸体を見做れていたのだから*、これをもって風教上の利害の關係があるなどとは毫も思い及ばなかったのだろう		280		在希腊与罗马，对于裸体，人们已经司空见惯，大约丝毫也没想到裸体与风纪有什么利害关系。	C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
240		西洋人がやらない*から*、自分もやらないだろう。	281		大概是◆因为◆西洋人不这么干,你◆才◆不肯的吧	A	A-2
240		死んでしまっばつまらない*から*着物をきる。	280		死了白搭一条命,◆还是◆穿衣服为好。	B	B-10
240		ただ西洋人がきる*から*、着ると云うまでの事だろう。	281		无非西洋人穿,他们◆也◆便穿罢了。	B	B-3
240		美しい? 美しくても構わん*から*、美しい獣と見做せばいいのである	280		视为不如猫的兽,也是无可厚非的。美?美就美吧!不妨视为“美丽的野兽”好了。	C	C
240		猫の事だ*から*西洋婦人の礼服を拝見した事はない。	280		不过是一只猫呗,哪里见识过西方妇女的礼服?	C	C
240		それがなぜこんな下等な軽佻師流に転化してきたかは面倒だ*から*述べてない。	281		为什么变得像个下流的杂技演员似的呢?说来烦琐,略而不述。	C	C
241		学問といえどもその通りだがこれは服装に関係がない事だ*から*以下略とする。	282		学問也是如此,◆只因◆与服装无关,下文略去。	A	A-32
241		気が利かんでも仕方がないと云うなら勘弁する*から*、あまり日本人をえらい者と思っばはいけない。	281		如果认为当傻瓜也没法子,那就忍着点吧!那◆就◆别再以日本人怎么了不起	B	B-1
241		西洋人は強い*から*無理でも馬鹿氣でいても真似なければやり切れないだろう。	281		大概认为西洋人优秀,哪怕生硬、愚蠢,也觉得不模仿就不舒服。	C	C
242		化物でも全体が申し合せて化物になれば、いわゆる化物は消えてなくなる訳だ*から*構わんが、	282		假如全体人类型约定,一齐变成妖怪,所谓妖怪也就不存在了。◆因此◆,是妖怪也于姑	A	A-37
242		すべて考え出す時には骨の折れるものである*から*猿殿の発明に十年を費やしたって車夫の智慧には出来過ぎると云わねばなるまい。	283		一切真理在探索过程中都是很费力气的。发明专利权虽然用了十年,但按车夫的智力来看,不能不说已经是难能可贵了	C	C
243		みんなが化物だ*から*恥ずかしい事はないと安心してもやっぱ駄目である。	284		◆因为◆大家都是妖怪,不必引以为耻,于是就心安理得了。然而,还是不行	A	A-1
243		化物のやる事には規律がない*から*秩序立った証明をするのに骨が折れる。	284		妖怪们的行径没有规律,◆因而◆,为了井然有序地写出证实材料,不免要费些力气	A	A-35
245	「そうよ、民さんなんざあ腰が低いじゃねえ、頭が高けえんだ。それだ*から*どうも信用されねえんだね」		287	“是呀!阿民很不谦虚,趾高气扬的,◆所以◆,都不相信他。”		A	A-36
247	外国は単体だ*から*ね、それであんなものが出来たんだ。		289	外国人胆子小,所以才造出那种玩艺儿。		C	C
248	それでその義経のむすこが大明を攻めたんだが大明じゃ困る*から*、三代將軍へ使をよこして三千人の兵隊を借してくれと云うと、三代様がそいつを留めておいて帰さねえ。		289	源义经的儿子攻打明朝时担心打不过明朝,派出使臣去见三代将军要求借兵三千。三代将军却扣留了那个家伙,不让他回去。		C	C
248	今日は少々御寒うございます*から*、どうぞ御緩くり——		290	今天天气有点冷,请各位慢慢洗…		C	C
248		吾輩は突然この異な爺さんに逢ってちよつと驚いた*から*こつちの記述はそのままにして、しばらく爺さんを専門に観察する事にした。	290		咱家◆由于◆突然碰上这个奇怪的老头儿,感到有些惊奇,◆因此◆,这类叙述暂停,一时专门观察那个秃头翁。	A	A-20
248		仕方がないものだ*から*たちまち機鋒を転じて、小供の親に向つた。	290		没办法叫孩子不哭,老头儿◆便◆话锋一转,对孩子的老子说:	B	B-2
249	「はいはい御寒う。あなた方は、御若い*から*、あまりお感じにならんかの」		291	“喂,喂,好冷!你还年轻,不觉得冷吧?”		C	C
249		物は見ようでどうでもなるものだ*から*、この怒号をただ逆上の結果とばかり判断する必要はない。	291	事情嘛,眼光不同,怎说怎有理。◆所以◆倒也不必把这声怒吼判断为全怪上火的结果		A	A-36
249		しかし主人の怒号は善生の席そのものが不平なのではない、先刻からこの二人は少年に似合わず、いやに高慢ちきな、利いた風の事ばかり言っていた*ので*、始終それを聞かされた主人は、全くこの点に立腹したものと見える。	292		其实,主人之所以发火,并非由于对学生所占的位置感到不平,似乎◆因为◆刚才两个小伙子不像个年轻人,净说些大话,不懂装懂;主人一直听在耳里,对此十分恼火。	A	A-1
249		これは尋常の答で、ただその地を去らぬ事を示しただけが主人の思い通りにならん*ので*、その態度と云い言語と云い、山賊として罵り返すべきほどの事でもないのは、いかに逆上の気味の主人でも分っているはずだ。	291		这句回答很平常,无非表达了不肯移动的决心,这有拂主人的心意。然而,不论他的态度或语气,都表明大可不必像对山贼那样破口大骂,这一点,主人不管怎么上火,也应该是一清二楚的。	C	C
250		吾輩もこの小僧を少々心憎く思っていた*から*、この時心中にはちよつと快哉を呼んだが、	292		咱家也觉得这名学生有点烦人。不禁心里暗暗地喊:“痛快!”	C	C
250		この湯槽に浮いているもの、この流しにごろごろしているものは文明の人間に必要な服装を脱ぎ棄てる化物の団体である*から*、無論常規常道をもって律する訳にはいかん。	292		不论漂在这个浴池里的人,也不论躺在冲洗间里的人,都脱光了文明人必备的服装,是一群妖怪,当然不能以常规俗礼约之。	C	C
253		吾輩は少々物凄くなった*から*早々窓から飛び下りて家に帰る。	294		咱家有点恐怖感,急忙从窗户跳下,回家去了。	C	C
253		やはり何ともない*から*、じつとしていた。	296		还是不痛,咱家端然而坐。	C	C
253		これが了解出来れば、どうかこうか方法もあろうがただ撲って見ろだ*から*、撲つ細君も困るし、撲たれる吾輩も困る。	296		假如知道,总会想出办法的。可是主人不问青红皂白,光是命令妻子打,这样一来,不仅动手打的女主人为难,挨打的咱家也上不了当	C	C
253		主人は二度まで思い通りにならん*ので*、少々焦氣味で「おい、ちよつと鳴くようにぶって見ろ」と云った。	296		主人一看,再也打不得叫他称心,◆便◆有些急不可耐地说:“狠点,打哭它!”	B	B-2
254		殺せば死ぬに極まっている。それだ*から*打てば鳴くに極っていると速断をやつたんだろう。	297		杀一刀,肯定一命呜呼;◆因此◆,他才匆忙断定:打一巴掌,肯定会哭的!	A	A-37
254		主人はかくのごとく愚物だ*から*厭になる。	296		主人就是这么愚蠢,实在讨厌。	C	C
255		こう云う男だ*から*こんな奇問を細君に対して呈出するのも、主人に取っては朝食前の小事件かも知れないが、	298		◆既然◆是这么一种人,对妻子提出这么个问题,在他来说,也许相当于早饭前的一段小小插曲罢了。	A	A-21
255		「そう」と細君は利口だ*から*、こんな馬鹿な問題には関係しない。	298		“是呀!”妻子是个聪明人,不和这种麻烦的问题打交道。	C	C
255		細君はあまり突然な問な*ので*、何にも云わない。	297		问题提得太唐突,妻子一言不发。	C	C

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
256	「重要な問題だ*から*そう急には分らんさ」		298	“重大问题嘛，不会那么快就弄清的。”		C	C
257	「桂月は現今一流の批評家だ。それが飲めと云うのだ*から*いいに極っているさ」		300	“桂月 是当代一流的批评家。他说‘喝吧’那◆就◆准没错”！		B	B-1
257		二杯でも随分赤くなるころを倍飲んだのだ*から*顔が焼火箸のようにほてって、さも苦しそうだ。	299		只喝两杯他都脸红，现在多喝了一倍，脸热得像烧红了的火筷子似的，够遭罪的了。	C	C
258		但し櫓の枝は吹聴することく密生しておらんので、その間から群鶴館という、名前だけ立派な安下宿の安屋根が遠慮なく見える*から*、しかも先生を想像するのにはよほど骨の折れるのは無論である。	301		那扇栞并不像画家吹嘘的那么茂密。那所“群鹤馆”，徒具雅号的廉价旅馆的廉价屋顶，从扇栞空隙中就可以一览无遗。◆因此◆，想象苦沙弥先生的风姿，自然是很费力气的。	A	A-37
258		名前に税ほかからん*から*御互にえらそうな奴を勝手次第に付ける事として、	301		好在名堂并不纳税，大家随便起些非同凡响的名字好了。	C	C
258		但し櫓の枝は吹聴することく密生しておらん*ので*、その間から群鶴館という、名前だけ立派な安下宿の安屋根が遠慮なく見える*から*、しかも先生を想像するのにはよほど骨の折れるのは無論である。	301		那扇栞并不像画家吹嘘的那么茂密。那所“群鹤馆”，徒具雅号的廉价旅馆的廉价屋顶，从扇栞空隙中就可以一览无遗。因此，想象苦沙弥先生的风姿，自然是很费力气的。	C	C
259		もう周囲一尺くらいにのびている*から*下駄屋さえ連れてくればいい桶になるんだが、	302		梧桐已经长得一尺粗，只要把木履商领来，就可以卖个好价钱。	C	C
260		名前が落雲館だ*から*風流な君子ばかりかと思うと、	303		如果以为◆既然◆名曰“落云馆”，一定是些文雅的男子。	A	A-21
260		吾輩は別に伝兵衛に恨もない*から*彼の悪口をこのくらいにして、	302		我与传兵卫无冤无仇，◆就◆不多说他的坏话。	B	B-1
261		ところが教育のある君子の事だ*から*、こんな事でおとなしく聞かれない。	304		然而，那些受过教育的人，这么几句吩咐，他们是不会乖乖听话的。	C	C
261		前申すごとく、ここへ引き越しの当時は、例の空地に垣がない*ので*、落雲館の君子は車屋の黒のごとく、のそのそと桐島に這入り込んできて、話をする、弁当を食う、笹の上に寝転ぶ——いろいろの事をやったものだ。	303		如上所述，刚搬来时那片旷地上没有围墙。落云馆的诸君子像车夫家的大黑猫似的，悠然闯进桐树林，谈话呀，吃饭呀，在嫩竹上打滚儿呀……干什么的都有。	C	C
262		吾輩のような猫ですら、時々は当家の令嬢にからかって遊ぶくらいだ*から*、落雲館の君子が、気の利かない苦沙弥先生にからかうのは至極もつともなところで、	306		连咱家这猫都常常捉弄家中的小千金玩呢。◆所以◆落云馆的君子捉弄昏庸不堪的苦沙弥先生，这可是一万个应该。	A	A-36
262		しかも君子の談話だ*から*一風違って、おめえだの知らねえのと云う。	305		而且君子之言嘛，别具一格，诸如“你小子”、“不摸门儿”等等。	C	C
262		表門をがらりとあける*から*御客かと思うと桐島の方で笑う声がする。	305		大门哐啷一声开了，主人以为是客临门，却听到桐园里发出笑声。	C	C
262		いくら吠えても狂っても相手にせん*ので*、しまいは犬も愛想をつかしてやめる。	306		小狗崽怎么叫唤发疯，大骆驼也不理睬，终于，狗崽厌倦，不再奔跑了。	C	C
263		但し多少先方を怒らせるか、じらせるか、弱らせるかしくなくて刺激にならん*から*、昔しからからかうと云う娛樂に耽るものは人の氣を知らない馬鹿大名のような退屈の多い者、もしくは自分のなぐさみ以外は考うに暇なきほど頭の発達が幼稚で、しかも活氣の使い道に弱する少年かに限っている。	307		但是，如果不惹得对方有些恼火，焦急或尴尬，就不成其为刺激。◆因此◆，自古以来热衷于捉弄人的只有那些像个昏官似的不懂人心、无聊透顶的家伙，或是头脑简单，除了自己开心一切都无暇顾及、而且没有劲处使的顽少。	A	A-37
264		あまり長くなる*から*略する事に致す。	308		但是说来话长，就此打住。	C	C
265		しかしよく似ている*から*仕方がない。	308		然而，◆既然◆二者如此相似，◆又◆有什么办法！	A	A-24
265		四つ目垣の穴を潜り得る事は、いかなる小僧といえどもとうてい出来る氣遣はない*から*乱入の虞は決してない*と速定してしまったのである。	309		不论多么小的毛孩子也没有可能从格子眼里钻进来。◆于是◆，速速决断：“绝无闯入之虞。”	A	A-38
266		もし追い懸けられたら逃げるのに、少々ひまがある*から*、予め逃げる時間を勘定に入れて、	310		假如遭到追击，需要一点时间逃跑，◆因此◆，预先计算好了逃跑所需的时间。	A	A-37
268		この戦争を記述する上において必要である*から*やむを得ない。	311		◆是因为◆叙述这场战争有必要，◆才◆尽管有违知耻，也不得不已而为之。	A	A-2
269		もつとも逆上は氣遣の異なる、氣遣にならないと家業が立ち行かんとあつては世間体が悪い*から*、彼等の仲間では逆上を呼ぶに逆上の名をもつてしない。	313		的确，上火就是发疯的别名。不发疯，就支撑不住家业，名声会不大好听。◆因此◆，诗人们不以“上火”称之。	A	A-37
269		果鴨へ入院せず済むのは単に臨時氣遣である*から*だ。	313		所谓上火，就是一时发疯，可以不进疯鸭院的人，就◆因为◆只是临时性的发疯。	A	A-1
270		聞くところによればユーゴーは快走船の上へ寝転んで文章の趣向を考えた*から*、船へ乗って背空を見つめていれば逆上受合である。	314		传说雨果曾躺在一艘快艇上构思作品；◆因此◆，只要坐在船上凝视苍穹，保证会火往上攻。	A	A-37
270		しかし金がない*ので*ついに実行する事が出来なくて死んでしまったのは氣の毒である。	314		然而，此人◆因为◆没有钱，终于事未竟而身先死，怪可怜的。”	A	A-1
271		いくらダムダムだって落雲館の運動場から発射するのだ*から*、書齋に立て籠っている主人に中氣遣はない。	316		管什么达姆不达姆的，◆因为◆是从落云馆的运动场发射，自然，不须担心会射中躲在书房里的我家主人。	A	A-1
271		なぜ頭が禿げると云えば頭の營養不足で毛が生長するほど活氣がない*から*に相違ない。	316		为什么秃头了呢？一定是◆由于◆头部营养不良，缺乏生长头发的足够活力。	A	A-15
271		逆上の説明はこのくらいで充分だろうと思う*から*、これよりいよいよ事件に取りかかる。	315		关于上火的阐述，说这些已经足够了！下文即将叙述事件的经纬。	C	C
271		さてイスキラスも作家である*から*自然の勢負けなくてはならん。	316		伊索克拉底斯也是一名作家，自然的趋势，也要妥协的。	C	C
272		海老の鬼殻焼はあるが亀の子の甲羅煮は今でさえないくらいだ*から*、当時は無論なかったに極っている。	317		带皮烤大虾倒是有的，而带壳炖小鸟龟，时至今日还不曾有过，这在当年，肯定更是没有的事了。	C	C

原文		訳文		対訳	接続語No		
ページ	会話文	地	文			ページ	会話文
273		生憎作家の頭の方が亀の甲より歌らかであったものだ*から*、禿はめちやめちやに砕けて有名なイスキラスはここに無惨の最後を遂げた。	317		偏偏作家的脑壳比不上乌龟壳硬, ◆便◆被砸了个稀巴烂, 著名的伊索克拉斯便悲惨地一命呜呼了。	B	B-2
273		迷亭が来た*から*、迷亭に雁が食いたい、雁鍋へ行って眺らえて来いと云うと、	318		迷亭先生也来了。咱家说:“我想吃雁肉, 你去飞禽餐馆叫一道菜来!”	C	C
273		蕪の香の物と、塩煎餅といっしょに召し上がりますと雁の味が致しますと例のごとく茶羅ン餅を云う*から*、大きな口をあいて、うーと唸って囁してやったら、	318		迷亭像往常一样胡扯一通说:“把酱菜和咸煎饼掺合起来吃, 就有雁肉味。”咱家张开大口, 哼的一声, 吓唬他一下子。	C	C
273		いきなり後架から飛び出して来て、吾輩の横腹をいやと云うほど蹴た*から*、おやと思ううち、	318		想不到他竟从厕所里窜了出来, 照咱家的小肚子很蹴一脚。咱家刚噤的叫了一声, 他已经踉拉著轻便木屐从栅栏门绕过去, 直奔二楼跑去。	C	C
273		吾輩は急にからだが大きくなった*から*、椽側一杯に寝そべって、	318		咱家◆因◆突然体魄变大, 一躺下, 占满了整个榻榻米。	A	A-10
274		吾輩は虎から急に猫と収縮したのだから*から*何となく極りが悪くもあり、おかしくもあったが、	318		咱家一下子由老虎缩小成猫, ◆总◆有些沮丧, 又有点好笑。	B	B-15
275		私も人間である*から*時に大きな声をして歌などうたって見たい事がある。	320		我也是个人, 有时非常想放开喉咙唱个歌什么的,	C	C
276		こう云う訳だ*から*諸君もなるべく公德を守って、いやしくも人の妨害になると思ふ事は決してやってはならぬのである。……」	321		这时候, 我总是要克己的。依次类推, 诸君也应尽量遵守公德。假如自己觉得那是有碍于人的事, 就决不要做……」	C	C
277		濡れ手拭を頂いて、炬燵にあたらなくとも、樹下石上を宿としなくとも大丈夫だろうと鑑定した*から*、にやにやと笑ったのである。	321		料想不再头蒙湿毛巾顶在暖炉上、不再睡在树下石上, 也不会有事的。◆因此◆才嘻嘻地笑了。	A	A-37
278		米国は突飛な事ばかり考え出す国柄である*から*、砲隊と間違えてもしかるべき、近所迷惑の遊戯を日本人に教うべくだけそれだけ親切であったかも知れない。	323		美国是个专能想些花花点子的国度, 说不定正因为肯把误认为炮弹也无妨, 而且扰得四邻不安的游戏教给日本, 才表现出足够的感情哩!	C	C
279		ダムダム弾は近來諸所で製造するが随分高価なものである*から*、いかに戦争でもそう充分な供給を仰ぐ訳に行かん。	324		近来各地都在制造达姆弹, 价格十分昂贵。虽然是战争, 也很难指望大量供应;	C	C
282		目的が遊戯にあるのではない、戦争に存するのだから*から*、わざとダムダム弾を主人の邸内に降らせる。	325		◆因为◆球手之意不在玩, 而在于战。他们故意将达姆弹射进主人的院落。	A	A-1
282		奥歯で嚙潰した細羅玉が突となって鼻の穴から抜ける*から*、小鼻が、いちじるしく怒って見える。	328		他气势汹汹, 仿佛用大牙咬碎了摔炮, 烈火从鼻孔窜了出来, ◆因此◆, 鼻翅狂烈地煽动。	A	A-37
284		——広い学校の事です*から*どうも世話ばかりやけて仕方がないです。	330		学校太大, ◆总◆是叫人太操心, 没办法。	B	B-15
284		で運動は教育上必要なものであります*から*、どうもこれを禁ずる訳には参りかねるので。	331		不过, 运动是教育上必需的课程, ◆总◆不好禁止的。	B	B-15
284		下女は「へえ」と答えて、あまり庭前の光景が妙なのと、使の趣が判然しないのと、さっきからの事件の発展が馬鹿馬鹿しい*から*、立ちもせず、坐りもせずににやにや笑っている。	329		女仆虽然答应了一声“是”, 但是, ◆由于◆前庭光景奇怪, 出使的目的不清, 事件的经过自始至终都十分无聊, 她◆便◆站也不是, 坐也不是, 只是嘻嘻地笑着。	A	A-16
285		ではこの生徒はあなたに御引き渡し申します*から*お連れ帰りを願います。	331		那么, 这名学生交给你, 托你带他回去吧!	C	C
285		瑣談雑話と違ってうっかりと読んでいたものが忽然豹変して容易ならざる法語となるんだ*から*、決して寝ころんだり、足を出して五行ごとに一度に読むのだからと云う無礼を演じてはいけません。	332		认为是琐谈闲话而漫然浏览的读者感到陡然一变, 成了不易读懂的经典之作。这◆就◆决不容许躺着看或伸着腿一目十行等丑态表演,	B	B-1
285		吾輩はすでに小事件を叙したり、今また大事件を述べた*から*、これより大事件の後に起る余瀾を描き出だして、全篇の結びを付けるつもりである。	332		咱家既写完了小风波, 现在又写完了大事件, 下面想描绘一下大事件发生后的余波, 作为全篇的结尾。	C	C
286		柳宗元は韓退之の文を読むごとに善哉の水で手を清めたと云うくらいだ*から*、吾輩の文に対してもせめて自腹で雑誌を買って来て、友人の御余りを借りて間に合わすと云う不始末だけはない事に致したい。	332		据说柳宗元每当读韩愈的文章, 甚至先用善哉水泡手净手。◆那么◆, 但愿读者对待咱家的文章, 至少能自己掏腰包买本杂志, 切莫干出那种没规矩的事——凑凑付付, 借朋友的书看。	A	A-39
286		大事件のあった翌日、吾輩はちよつと散歩がしたくなった*から*表へ出た。	332		发生大事件的第二天, 咱家想散散步, ◆便◆来到门外。	B	B-2
287		——とか何とか、いろいろ小生意気な事を云う*から*、そんなら実業家の腕前を見せてやろう、と思つてね。	334		说了种种狂话, 我想, 那就让他尝尝实业家的厉害!	C	C
287		「どうも損得と云う観念の乏しい奴です*から*無暗に瘦我慢を張るんでしよう。	334		“总之, 他是个不识好歹的家伙, 不过是在逞能罢了!	C	C
287		昔からああ云う癖のある男で、つまり自分の損になる事に気が付かないんです*から*度々難しいです」	334		他从早就有这个毛病, 分明自己吃了亏, 却一点儿都不觉察, 真是不可理解。”	C	C
287		近來は金田の邸内も珍らしくなくなった*から*、滅多にあちらの方角へは足が向かなかつたが、	333		近来金田府上平淡无奇, ◆因此◆咱家很少走过。	A	A-39
287		金田君は探偵さへ付けて主人の動静を窺うくらい程度の良心を有している男だ*から*、吾輩が偶然君の談話を拝聴したって怒るる氣遣はあるまい。	333		金田老板可是个“有良心的人”, 甚至派密探去侦察主人的动向。◆那么◆, 咱家偶然窃听他的谈话, 料想他还不至于发火吧?	A	A-39
287		鈴木にも久々だ*から*余所ながら拝顔の榮を得ておこよう。	333		铃木先生也阔别已久, 不妨暗暗跟随, 一混喜都吧。	C	C
291		「来ないようにするつたって、来る*から*仕方ないさ」	338		“不叫他们进来? 可他们要来呀, 有什么办法!”	C	C
291		「ちよつとボールが這入りました*から*、取らして下さい」	337		“球落进院子啦, 请允许我去取。”	C	C
291		「ちよつとボールが這入りました*から*取らして下さい」	338		“球落进院子啦, 请允许我去取。”	C	C

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
292	今ちょっとボールが飛びました*から*、裏口へ廻って、取ってもいいですか		339	刚才球飞进来了,我转到便门去拾球,可以吗?		C	C
293		鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思った*から*、それじゃ失敬と来たまへと帰って行く。	339		鈴木君觉得自己已经完成了出访的使命,便◆说:“那么,告辞了。有空来串门。”然后走了。	B	B-2
293		こう覚った*から*平生かかりつけの甘木先生を迎えて診察を受けて見ようと言う重見を起したのである。	340		有念及此,便◆想请平素常去就诊的甘木医生来给瞧瞧。	B	B-2
294		甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚の長者だ*から*、別段激した様子もなく、「利かん事もないです」と穏かに答えた。	340		甘木医生也有点吃惊。可他是一位温厚的长者,并没有怎么激动,缓缓地说了:“不会没有效力的。”	C	C
295		吾輩は今までこんな事を見た事がない*から*心ひそかに喜んでその結果を座敷の隅から拝見する。	342		咱家还从来没有见过这样场面,不免心里偷偷地乐,蹲在墙角瞧着结果如何。	C	C
295		なぜ哲学者と云うと、何も迷亭のように自分で振り散らす*から*ではない、ただ主人と対話する時の様子を拝見しているといかにも哲学者らしく思われる*から*である。	343		若问为什么?咱家可不像迷亭那样胡吹乱唠,只是看他他和主人谈话时的风度,令人总觉得他像个哲学家。	C	C
296		しかし奥行きがない*から*落ちつきがなくって駄目だ。	344	但是,太浅薄,不稳重,是块废料。		C	C
296		ただありがたい事に人を羨む気も起らん*から*、それだけいいね	344	值得庆幸的是一我无心羡慕别人,惟有这一点还好。		C	C
296		しかし食うている*から*大丈夫。	344	不过,没有饿肚子,死不了,		C	C
296		なぜ哲学者と云うと、何も迷亭のように自分で振り散らす*から*ではない、ただ主人と対話する時の様子を拝見しているといかにも哲学者らしく思われる*から*である。	343		若问为什么?咱家可不像迷亭那样胡吹乱唠,只是看他他和主人谈话时的风度,令人总觉得他像个哲学家。	C	C
297		人間はいろいろだ*から*、そう自分のように人にもなれと勧めたって、なれるものではない。	345	人嘛,各有千秋,即使哀求别人都变成你那样的人,也是不成的。		C	C
298		向に憎があるだろう。あれが目障りになる*から*取り払う。	346	对面有一棵扁柏树吧?它太妨碍视线,◆就◆砍掉它。		B	B-1
298		寡人政治がいかに*から*、代議政体にする。	347	寡头政治不好,◆就◆改为代议制		B	B-1
299		代議政体がいかに*から*、また何かにしたくなる。	347	代议制也不好,◆就◆想再换个什么制度。		B	B-1
302		その頃は小供の事で今のように色気もなにもなかったもの*から*、痒い痒いと云いながら無暗に顔中引き掻いたのだそう。	351		当时年小,不像今天这样图什么漂亮不漂亮。他一边叨咕着:“痒呀,痒呀”,一边往脸上乱搔。	C	C
302		いくら功德になっても訓戒になっても、きたない者はやっぱりきたないもの*から*、物心がついて以来と云うもの主人は大にあばたについて心配し出して、あらゆる手段を尽してこの醜態を揉潰そうとした。	351		不管如何做功德,又垂训于人,但肮脏毕竟还是肮脏。长大成人之后,他对这张麻脸非常发愁,想尽各种方法来消除这种丑态。	C	C
303		あんな偏屈な男はとうてい猫の忠告などを聴く気遣はない*から*、まあ勝手にさせたらよかろうと五六日は近寄りもせずに暮した。	352		然而,那么乖僻的人毕竟不肯听从做猫的劝告。那◆就◆悉听尊便吧!因此,五六天来,咱家离他远远地打发着时光。	B	B-1
304		本人に聞いて見ない事だ*から*頼とわからない。	353		咱家不曾向主人请教,◆也◆就一无所知。	B	B-3
305		あえて他人に害を及ぼすほどの事でない*から*、誰も何とも云わない。	354		但却◆因为◆是于人无害的小事,别人◆也◆就不说什么。	A	A-5
305		この鏡とよくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はない*から*である。	354		◆所以◆强调指出“那一面”,◆是因为◆主人家里除此之外再也没有第二面镜子。	A	A-43
305		なろう事なら顔まで毛を生やして、こっこのあばたも内済にしたいくらいなところ*から*、ただで生える毛を銭を出して刈り込ませて、私は頭蓋骨の上まで天然痘にやられましたよと吹聴する必要はあるまい。	354		但愿毛发长到脸上,将那儿的麻坑也遮掩起来。自然生长的毛发,何必花钱剪短,向人们声张:“瞧呀,我已经水痘升天啦!”	C	C
307		御三が聞いたらさぞ怒るだろう*から*、御三はこのくらいにしてまた主人の方に帰るが、	356		这些话如果被她听去,定要发火的。◆那么◆,就此打住,回到主人的话题。	A	A-39
307		その骨格通りにふくれ上がるの*から*、まるで水気になやんでいる六角時計のようなものだ。	356		伴同那楞角一添蹠,◆就◆像一座浮肿的六角钟了。	B	B-1
307		和尚からからと笑いながらそうか、それじゃやめよ、いくら書物を読んでも道はわからぬのもそんなものじゃと罵ったと云う*から*、主人もそんな事を聞き 嗜って風呂場から鏡でも持って来て、したり顔に振り廻しているのかも知れない。	355		和尚哈哈大笑,嚷道:“是吗?那就算了吧!这就像你读破书万卷也不会得道,大概是一个道理吧!”说不定主人根据这么点道听途说,便将镜子从浴池中拿了出來,摆出洋洋自得的样子。	C	C
310		いくら任せてやりたくても、貰いたくても、出来ない相談である。それだ*から*古来の豪傑はみんな自力で豪傑になった。	358		再怎么想研究别人或盼着别人研究自己,都是无稽之谈。◆因此◆,自古英雄无不靠自己。	A	A-37
310		彼の眼玉がかように晦渋濁濁の悲境に彷徨しているのは、とりも直さず彼の頭脳が不透明の実質から構成されていて、その作用が暗昏朦朧の極に達している*から*、	360		他的眼珠◆之所以◆彷徨在如此昏冥混沌的苦海,完全◆是由于◆他那不透明的头脑所决定;并且其影响已经达到了暗淡溟濛之极致,自然要呈现于形体之上,要给茫然不知的母亲带来不必要的担心。	A	A-45
310		して見ると彼の眼は彼の心の象徴で、彼の心は天保銭のごとく穴が空いている*から*、彼の眼もまた天保銭と同じく、大きな割合に通用しないに違ない。	360		可见,主人的眼睛是他心灵的象征。他的心像天宝年间的铜钱一样有个空洞,◆那么◆,他的眼睛也一定像天宝铜钱一样,虽然大,却不中用。	A	A-45
314		熱心は成功の度に応じて鼓舞せられるものである*から*、吾が弊の前途有望なりと見てとって主人は朝な夕な、手がすいておれば必ず髯に向って鞭撻を加える。	360		愈有成效,就愈受鼓舞。主人认清自己的胡须前途光明,便朝朝暮暮,只要得闲,一定要对它们进行鞭打。	C	C
315		主人がこの手紙に敬服したのも意義が明瞭である*から*ではない。	366		主人敬佩这一封信,同样也不是◆由于◆看懂了信中内容。	A	A-15
315		だから主人がこの文章を尊敬する唯一の理由は、道家で道德経を尊敬し、儒家で易経を尊敬し、禪家で臨済録を尊敬すると一般で全く分らん*から*である。	366		因此,主人尊敬这封信的惟一理由,如同道家之尊敬《道德经》、儒家之尊敬《易经》、禅门之尊敬《临济录》,◆只因◆大多一窍不通。	A	A-32

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
315		どこの雑誌へ出しても投書になる価値は充分あるのだ*から*、頭腦の不透明をもって鳴る主人は必ず寸断寸断に引き裂いてしまうだろうと思のほか、打ち返し打ち返し読み直している。	365		不论向任何刊物投稿, 都有充分的资格遭到废弃, ◆因此◆, 以头脑不清而驰名的主人, 定要将它撕得粉碎的。不料, 他竟翻来复去地读个没完。	A	A-37
316		但し全然分らんでは気がすまん*から*勝手な註釈をつけてわかった顔だけはする	366		然而, 一窍不通又说不过去, ◆于是◆, 便胡乱注释, 装成懂的样子。	A	A-15
317		ことに見ず知らずの年長者が頑と構えているのだ*から*上座どころではない。挨拶さえ疎には出来ない。	368		特别是见到一位素昧平生的长老气呼呼地坐在那里, 他不仅不敢坐在上座, 连平安都难得说出口了。	C	C
318		主人は交際の狭い、無口な人間である上に、こんな古風な爺さんとはほとんど出会った事がないのだ*から*、最初から多少場うての気味で辟易していたところへ、滔々と浴びせかけられたのだから、朝鮮に参も胎ん棒の状袋もすっかり忘れてしまったただ苦しまぎれに妙な返事をする。	369		主人既然是个交际不广、言语迟钝的人, 而且不曾见过这样旧式的老人, 一开始◆就◆有点怯阵。正畏缩不前, 又听老人家滔滔不绝地讲了一大套, 什么朝鲜人参, 什么棒棒幌子似的信封, 全都忘得干干净净, 只得带着哭腔, 说些莫名其妙的答话。	B	B-1
318		主人は交際の狭い、無口な人間である上に、こんな古風な爺さんとはほとんど出会った事がないのだから、最初から多少場うての気味で辟易していたところへ、滔々と浴びせかけられたの*から*、朝鮮に参も胎ん棒の状袋もすっかり忘れてしまったただ苦しまぎれに妙な返事をする。	369		主人既然是个交际不广、言语迟钝的人, 而且不曾见过这样旧式的老人, 一开始就有点怯阵。正畏缩不前, 又听老人家滔滔不绝地讲了一大套, 什么朝鲜人参, 什么棒棒幌子似的信封, 全都忘得干干净净, 只得带着哭腔, 说些莫名其妙的答话。	C	C
318		「私も……私も……ちよつと何がうはずでありましたところ……何分よろしく」と言い終って頭を少々畳から上げて見ると老人は 未だに平伏している*ので*、はっと恐縮してまた頭をびたりと着けた。	370		我……我……本应登门拜访……请多海涵……说罢, 微微从床席上抬起头来, 只见长者还在扣头, 吓了一跳, 慌忙又头拱床席了。	C	C
320	苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の総会がある*ので*わざわざ静岡から出て来てね、		370	苦沙弥兄！伯父嘛, ◆因为◆这次红十字会召开全体大会, 他特地从静岡赶来的呀。		A	A-1
321	この甲割が鉄だもの*から*、磁力の器械が狂って大騒ぎさ		373	◆因为◆这把劈盘刀是铁的, 害得试验室里的磁力装置全部失灵, 惹了个大乱子哪。		A	A-1
321	苦沙弥君、今日帰りにちょうどいい機会だ*から*大学を通り抜けるついでに理科へ寄って、		373	苦沙弥兄！今天开会回来, 路过大学, 真是个好绝妙的好机会, ◆就◆顺便去了理学部。		B	B-1
321	性のいい鉄だ*から*決してそんな處れはない		373	这是建武时代的优质铁, 绝不会有如此风险的！”		C	C
321	現に寒月がそう云った*から*仕方がないです		373	寒月兄刚刚说过, 有什么办法！”		C	C
321	「兜を割る*ので*、——敵の目がくらむ所を撃ちとつたものでがす。		372	“用来砍敌人的盔甲……当年趁敌人两眼昏花的工夫得到了这件宝		C	C
322	昔はそれと違つて侍は皆命懸けの商賈だ*から*、いざとう時に狼狽せぬように心の修業を致したもので、		373	从前就不同。武士们干的都是玩命营生。他们平素就在养心, 一旦有事, 绝不慌张。		C	C
323	客があつても取次に出ないくらい心を置き去りにしているんだ*から*大丈夫ですよ		375	连客人来, 都不去迎接, 把心搁在什么地方了。◆所以◆, 他没事儿。”		A	A-36
323	伯父さんは自分が楽なからだもんだ*から*、人も遊んでると思つていらっしやるんでしよう		375	伯父自己一身轻闲, ◆所以◆认为别人也都在玩吧？”		A	A-36
323	「そう、粗忽だ*から*修業をせんとかないと云うのよ、		375	看, 你太粗心, ◆就◆凭这点儿, 我说你非修差不可。		B	B-1
324	今日はこれからすい原へ行く約束がある*から*、わしはこれで御免を蒙ろう		375	今天约定去见杉(读沙)原, 我◆就◆不能奉陪了。”		B	B-1
325	「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は剣呑だ*から*念を推して見る。		378	“你听过独仙的讲演吗？”主人心慌意乱, 呵问了一句。		C	C
325		今主人が鹿爪らしく述べ立てている議論は全くこの八木独仙君の受売なのである*から*、知らんと思つた迷亭がこの先生の名を問不容髮の際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの仮鼻を挫いた訳になる。	378		主人刚才一本正经宣传的那一套, 正是从八木独仙那里现实实现的。迷亭以为主人不知道那位哲学家, 在千钧一发之际指出这位先生的名字, 不消说, 这暗暗地使主人临时乔装的假相受挫了。	C	C
326	いつまで立っても同じ事を繰り返してやめない*から*、僕が君もう寝ようじゃないかと云うと、		378	◆因为◆他总是重复重复, 说个没完没了, 我◆就◆说: “你也该休息了吧？”		A	A-4
326	「まあそんな臍負がある*から*独仙もあれで立ち行くだね。		378	噢, ◆正因为◆有人捧场, 独仙◆才◆混得下去啊！」		A	A-48
326	「真理はそう変るものじゃない*から*、変らないところがたのもしいかも知れない」		378	“真理不是那么乱变的, 也许◆正因为◆不变, ◆才◆值得信哩！”		A	A-48
326	それから仕方がない*から*台所へ行って紙片へ飯粒を貼つてごまかしてやったあね		379	后来, 我没办法, ◆就◆到厨房去, 在纸片上粘些饭粒来唬弄他。”		B	B-1
326	仕方がない*から*君は眠くならうけれど、僕の方は大変眠いのだから、どうか寝てくれたまえ		378	还好, 我几乎央求他睡下。我说: “怎么办！你大概不睡, 可我彻底了。面子事儿, 睡吧！”		C	C
326	仕方がないから君は眠くならうけれど、僕の方は大変眠いのだ*から*、どうか寝てくれたまえ		378	还好, 我几乎央求他睡下。我说: “怎么办！你大概不睡, 可我彻底了。面子事儿, 睡吧！”		C	C
326	「これは舶来の膏薬で、近來独逸の名医が発明した*ので*、印度人などの毒蛇に噛まれた時に用いると即効があるんだ*から*、これさえ貼つておけば大丈夫だと云つてね」		379	“这是洋膏药, 最近德国的一位名医发明的。印度人一被毒蛇咬伤, 用上这贴膏药就立见功效。”我对他说: “贴上这帖膏药, 保你平安。”		C	C
326	「これは舶来の膏薬で、近來独逸の名医が発明した*ので*、印度人などの毒蛇に噛まれた時に用いると即効があるんだから、これさえ貼つておけば大丈夫だと云つてね」		379	“这是洋膏药, 最近德国的一位名医发明的。印度人一被毒蛇咬伤, 用上这贴膏药就立见功效。”我对他说: “贴上这帖膏药, 保你平安。”		C	C
327	「……すると独仙君はああ云う好人物だ*から*、全くだと思つて安心してぐうぐう寝てしまったのさ。		379	后来, ◆因为◆独仙先生是个大好人, 认为我说得有理, 便安心地酣然大睡了。		A	A-1
327	「実はその時大に感心してしまつた*から*、僕も大に奮發して修業をやらうと思つてるところなんだ」		379	“说真的, 当时我非常感动, ◆也◆立志发奋要修养一番呢。”		B	B-3
327	一体君は人の言う事を何でもかでも正直に受ける*から*いけくない。		380	你总是太相信别人的话, 这不行。		C	C

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
328	ややともすると人を誘い出す*から*悪い。		381	可他动不动就勾引别人。◆所以◆很坏。		A	A-36
328	それに先生時々せき込むと間違えて電光影裏を逆さまに春風影裏に電光をきくと云う*から*面白い。		380	而且,这位先生一着急,就把全句错念成‘春风影里斩电光’,真逗!		C	C
328	ところが和尚泰然として平気だと云う*から*、よく聞き合わせて見るとから豊なんだね。		381	听说那位和尚却安然无恙,若无其事。仔细一打听,原来他是个十足的蠢子。		C	C
328	あれが十年前からの御箱なんだ*から*おかしいよ。		380	那是他十年前的拿手戏,真好笑。		C	C
329	死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎になった原因は僧堂で表飯や万年漬を食ったせいだ*から*、つまるところは間接に独仙が殺したようなものさ。		381	致命原因是腹膜炎,但是造成腹膜炎的原因,是◆由于◆在佛堂里吃大表饭和咸菜。归根结底,等于独仙间接杀害了他。”		A	A-15
329	もっとも汽車の方で留ってくれた*から*一命だけはとりとめたが、		381	不错,火车刹住了倒保住了他的一条小命。		C	C
330	あの食意地と禪坊主のわる意地が併発したのだから*助からない。		382	◆因为◆是贪吃加上出家人坏心肠的合并症,这◆就◆没救了。		A	A-4
330	それで何でも世人が迷ってる*から*ぜひ救ってやりたいと云うので		383	他说世人多半陷于迷津,一定要普渡众生。		C	C
331	毎回必ず食物の事がかいてある*から*奇妙だ。		384	每信必写用餐之事,真是出奇!		C	C
332		主人の尻の重いに反して迷亭はまたすこぶる気軽な男である*から*、御三の取次に出るのも待たず、通れと云いながら隔ての中の間を二足ばかりに飛び越えて玄間に躍り出した。	385		主人屁股很沉;相反迷亭先生却是个沉不住气的人,不等女仆出去迎客,已经边问“是谁”,边两步窜出堂屋,跑到门口。	C	C
332		最後に狂人の作にこれほど感服する以上は自分も多少神経に異状がありはせぬかとの疑念もある*ので*、立腹と、慚愧と、心配の合併した状態で何だか落ち付かない顔付をして控えている	384		最后,既然对狂人作品那么赞许,自己是否也有点神经异常?◆因而◆又有些怀疑。愤怒、羞惭与疑虑,三者迸发,总有些如坐针毡。	A	A-35
333		もっとも手錠をはめているのだ*から*、出そうと云っても出る気遣はない。	386		毋须说,◆因为◆他戴了手铐,叫他拿出手来也办不到。	A	A-1
333		人のうちへ這入った以上は書生同様取次を務める*から*はなはだ便利である。	385		但他来者安之,主动担负起书童的接待任务,倒◆也◆带来了方便。	B	B-3
333		泥棒の方が虎藏君より男振りがいい*ので*、こっちが刑事だと早合点をしたのだろう。	386		他大概是觉得偷儿比虎藏先生长得更加仪表堂堂,◆便◆贸然断定他是刑警。	B	B-2
334	それでね、下げ渡したら請書が入る*から*、印形を忘れずに持っておいて下さい。		387	还有,退还时要交一份收条,去的时候别忘了带图章……		C	C
334		主人のおやじはその昔場末の名主であった*から*、上の者にびよこびよこ頭を下げて暮した習慣が、因果となつてかよくに子に酬つたのかも知れない。	386		◆因为◆主人的老子昔日曾是荒郊村夫,过惯了对上峰弯腰施礼的生活,说不定这种秉性又传给了儿子呢。	A	A-1
334		手が出せない*から*、門をしめる事が出来ない*から*開け放しのまま行ってしまった。	387		偷儿手被铐着,不能关门,门儿◆只得◆依然敞着。	B	B-8
334		手が出せない*から*、門をしめる事が出来ない*から*開け放しのまま行ってしまった。	387		偷儿手被铐着,不能关门,门儿只得依然敞着。	C	C
335	「刑事だ*から*あんまりをするんじゃないか」		388	“◆正因为◆是刑警,◆才◆是那种派头嘛!”		A	A-48
335	君は巡査だけに鄭重なんだ*から*困る」		387	你只对刑警恭恭敬敬,这◆就◆不怎么样了。”		B	B-1
335	「刑事だ*から*そのくらしい事はあるかも知れんさ」		389	“刑警嘛,也许会有这种姿态的。”		C	C
336	「行くとも、九時までに来いと云う*から*、八時から出て行く」		389	“去呀!叫我九点以前到,我八点◆就◆出发。”		B	B-1
338	非凡は気狂の異名である*から*、まずこれも同類にしておいて構わない。		393	非凡乃是狂人的别名,◆因此◆,可以和疯子划为一类。		A	A-37
338	「いいとも僕の学校は月給だ*から*、差し引かれる気遣はない、大丈夫だ」		390	“行啊!我们这个学校是发月薪,不会扣我工资的,没事儿。”		C	C
339	気狂を標準にして自分をそっちへ引きつけて解釈する*から*こんな結論が出るのである。		392	◆因为◆自己总是以疯人为标准,让自己向疯子看齐,◆所以◆才得出那样的结论		A	A-7
341	その中で多少理窟がわかって、分別のある奴はかえって邪魔になる*から*、瘋癲院というものを作って、ここへ押し込めて出られないようにするのはないかしらん。		393	说不定其中有些人略辨是非、通情达理,反而成为障碍,◆才◆创建了疯人院,把那些人关了进去,不叫他们再见天日。		B	B-6
341		現在連れ添う細君ですら、あまり珍重しておらんようだ*から*、その他は推して知るべしと云つても大した間違はなからう。	396		现在,连陪伴在身边的妻子都似乎对他不大敬重,至于其他人,若说“可想而知”,也没有多大出入吧!	C	C
342		何が無意義であるかと云うと、この細君は単に掃除のために掃除をしている*から*である。	397		若问为什么说毫无意义,咱家就告诉他:◆因为◆女主人不过是为了扫除而扫除罢了	A	A-1
342		本人において存外な考え違をして、全く年廻りのせいで細君に好かれぬのだなどと理窟をつけていると、迷の種である*から*、自覚の一助にもなるかと親切心からちよつと申し添えるまでである。	396		然而主人总是把事情想得离谱,硬编理由说,妻子之所以不喜欢他,完全因为他年事已高。这是他糊涂的根源。咱家为了促其觉醒,不过从关心的角度出发略抒己见罢了。	C	C
342		一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところでない*から*、知らん顔をしていれば差し支えない様なもの、	397		究竟清扫的目的是为了运动,还是为了游戏?咱家不负清扫之责,无须过问,装作不知便是。	C	C
342		告朔のき羊と云う故事もある事だ*から*、これでもやらんよりはましかも知れない。	397		自古就有“告朔羊”①的故事嘛,说不定比根本不扫要好些的。	C	C
343		生れついてのお多角だ*から*人情に疎いのはとうから承知の上だが、	398		她生来就摆臭架子,早◆就◆了解她不尽人情。	B	B-1
343		こんな時に遠慮するのはつまらない話だ、よしんば自分の望通りにならなかったって元々で損は行かないのだ*から*、思い切つて朝飯の催促をしてやろう。	398		这种节骨眼上还客气什么,即使不能如愿以偿,也根本吃不了什么亏,◆便◆下定决心,催她快吃早饭。	B	B-2

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
343		吾輩は主人と違って、元来が早起の方だから、この時すでに空腹になって参った。	397		咱家和主人不同，从来都习惯于早起。此时，肚子已经饿得受不住。	C	C
343		もう飯も汗も出来ているのだから、食わせてもよさそうなものだと思った。	398		饭菜都已做好，大概可以进餐了吧！	C	C
344		仕方がないから、悄然と茶の間の方へ引きかえそうとして	400		没办法，咱家便◆蹑手蹑脚地想回到客室。	B	B-2
344		夜中なぞでも、いくらこっちが用があるから開けてくれると云っても決して開けてくれた事がない。	399		夜里不管咱家怎么要去解手，她也不给开门。	C	C
344		そこが、ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに恋のふみと云うくらいだから、たいてい事ならやる気になる。	399		然而，“饿极拜佛脚，贫极起盗心，爱极写情书”，这种时候，什么事都干得出的。	C	C
345	「坊やちゃん、元禄が濡れる*から*御よしなさい、ね」		401	“丫蛋！花布衫湿了，算了吧！嗯？”		C	C
345		顔を洗うと云ったところで、上の二人が幼稚園の生徒で、三番目は姉の尻についてさえ行かれないくらい小さいのだから、正式に顔が洗えて、器用に御化粧が出来るはずがない。	400		说是洗脸，可是两个大的才上幼儿园，三号的更小，只能跟在姐姐身后转，◆因此◆，不可能正规地洗脸和灵巧地化妆。	A	A-37
345		地震がゆるたびにおもちろいわと云う子だから、このくらいの事はあっても驚ろくに足らん。	400		地震时每当大地颤动，她便呼喊：“太有意思(思)啦！”像这样的孩子，纵使用抹布擦脸、沾点小水、又何足为奇。	C	C
345		さすがに長女は長女だけに、姉をもって自ら任じている*から*、うがい茶碗をからからかんと抛出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾をとりにかかる。	400		大小姐不愧是长女，担负起姐姐的职责，哐啷一声摔了自己的漱口盂，说：“丫蛋！那是抹布呀！”她急忙来夺抹布。	C	C
345		坊やちゃんもなかなか自信家だから*容易に姉の云う事なんか聞かそうにしない。	400		丫蛋也是死犟死犟，不会那么轻易听从姐姐的话。	C	C
345		雑巾はこの時姉の手と、坊やちゃんの手で左右に引っ張られる*から*、水を含んだ真中からぼたぼた水が垂れて、容赦なく坊やの足にかかる、足だけなら我慢するが膝のあたりがしたか濡れる。	400		抹布被姊妹二人，你拉我扯，从水分最多的中部嘀嗒嘀嗒地流出水来，毫不留情地淋在小妹的脚上。如果只淋在脚上，倒也罢了，把双膝也淋得湿漉漉的。	C	C
345		元禄で思い出した*から*ついでに喋りてしまうが、	401		从花布衫联想起一件事来，顺便唠嗑几句。	C	C
346		或る時などは「わたしゃ薬店の子じゃないわ」と云う*から*、よく聞き糺して見ると、裏店と薬店を混同していたりする。	401		有一次还说：“我可不是草绳铺里生的。”仔细一打听，原来是把“草绳铺”和“小胡同”读串了。	C	C
346		元禄が冷たくては大変だから*、御三が台所から飛び出して来て、雑巾を取上げて着物を拭いてやる。	401		花布衫凉，那还了得！女仆从厨房里跑了出来，拿起抹布给她擦。	C	C
346		第一に突っ込んだ指をもって鼻の頭をキューと撫でた*から*、堅に一本白い筋が通って、鼻のあたりがさかさか分明になってきた。	401		她先用伸进瓶里的一根手指在鼻尖上抹了一下，立刻出现一条竖道道，于是，鼻子的轮廓有些清晰了。	C	C
346		次に塗りつけた指を転じて頬の上を摩擦した*から*、そこへもってきて、これまた白いかたまりが出来上った。	402		接着又用抹过鼻子的手指往脸上抹了一下。无独有偶，那里又白白花花的一块。	C	C
347		覚めている*から*、細君の襲撃にそなるため、あらかじめ夜具の中に首もろとも立て籠ったのである。	402		◆正因为◆醒了，为了防御妻子的袭击，◆才◆把脑袋整个钻进被窝里的。	A	A-48
347		のみならず第二の「まだなんですか、あなた」が距離においても音量においても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなかまで聞えた*から*、こいつは駄目だと覚悟をして、小さな声で うんと返事をした。	402		尤其是第二次问他“还不起来吗？喂！”这时，不论从距离还是音量来说，都比前次近半之势传进被窝，他这◆才◆明白，已经山穷水尽，小声应道：“嗯！”	B	B-6
347		しかし第一回の声は敷居の上で、少くとも一間の間隔があった*から*、まず安心と腹のうちで思っていると、	402		第一次，妻子是在门口呼喊。他心想：至少相距六尺远，没什么了不起。	C	C
348		妻君はいつでもこの手を食って、起きるかと思つて安心していると、また寝込まれつづけている*から*、油断は出来ない。「さあお起きなさい」とせめ立てる。	403		妻子常常上他的这份当：以为他会起床，便放下心来，谁知他又酣然大睡。◆因此◆，妻子觉着不可轻信，便又催他：“喂，起床吧！”	A	A-37
349		昨日は鏡の手前もある事だから*、おとなしく独乙皇帝陛下の真似をして整列したのであるが、	405		昨天◆由于◆照过镜子，胡须都服服贴贴排列得整整齐齐。	A	A-15
349		ただいま関係がない*から*、だんだん成し崩しに紹介致す事にする。	404		暂且与本文无关，那◆就◆随时穿插，断续介绍吧！	B	B-1
351		探偵と云うものには高等な教育を受けたものがない*から*、事実を挙げるためには何でもする。	407		侦探这一行，◆因为◆没有人受过高等教育，为了拿到真凭实据，什么事都干得出。	A	A-1
351		下の方の戸棚は、布団の裾とすれすれの距離にある*から*、起き直った主人が眼をあきさえすれば、天然自然ここに視線がむくように出来ている。	405		下边那个橱窗几乎和棉被的下角只有咫尺之隔，起来端坐的主人只要睁开眼，便自然会将会视线投向那里。	C	C
352		伊藤博文でさえ逆か立ちをするくらいだから*、大分県が宙返りするのは当然である。	407		连伊藤博文都拿大顶，大分县翻筋斗◆也◆是理所当然。	B	B-3
353		この代物は櫛か桜か桐か元来不明瞭な上に、ほとんど布巾をかけた事がないのだから*陰気引き立たざる事夥しい。	408		而主人的这个货色，究竟是山毛榉、櫻木？还是桐木の？压根就不清楚，而且几乎从来没有擦过，◆因此◆，阴沉沉的，很不明朗。	A	A-37
353		坊ばは当年とって三歳である*から*、細君が氣を利かして、食事のときには、三歳然たる小形の箸と茶碗をあてがうのだが、坊ばは決して承知しない。	410		丫丫当年三岁。妈妈动了脑筋，分给她一套适用的小筷子、小碗。然而，丫丫决不答应，她一定要抢来姐姐的碗，硬要用那个拿不动的碗吃饭。	C	C
354		使いこなせない者をむやみに使おうとするのだから*勢暴威を逞しくせざるを得ない。	410		◆因为◆硬要使用自己没法使用的食具，用起来势必大逞威风。	A	A-1
354		その因つて来るところはかくのごとく深い*から*、決して教育や薰陶で癒せる者ではないと、早くあきらめてしまうのがいい。	410		◆既然◆因袭已久，绝非靠教育和薰陶便可以矫正，还是趁早断念的好。	A	A-21

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
354		急に襲撃を受けた*ので*三十度ばかり傾いた。	410		◆由于◆遭到突然袭击出现了三十度倾斜。	A	A-15
355		もともと小さ過ぎるのだから*、一杯にもった積りでも、あんどあげると三口ほどで食ってしまう。	411		那只碗本来就太小，即使盛得满满，一动筷，也三口就吃光。	C	C
356		坊ばは固より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだから*、早速箸を抛り出して、手攫みにしてむしむしや食ってしまった。	412		丫丫本来就特别爱吃地瓜。◆既然◆特别爱吃的地瓜飞到眼前，自然要放下筷子，用手捡地瓜块，吧嗒吧嗒地吞下。	A	A-21
358	「いいえ、ただあんまり御無沙汰をした*から*、ちょっと上がったの。」		415	“没有。只是好久没见，◆才◆走一趟。”		B	B-6
358	「今日は大祭日です*から*、朝のうちちょっと上がろうと思って、八時半頃から家を出て急いで来たの。」		415	“今天过节，我◆就◆想早晨来一趟，所以八点半就急忙走出家门了。”		B	B-1
358	「なかに品物が戻るのよ。取られたものが出た*から*取りに来いって、昨日巡査がわざわざ来たもんですから。」		415	“哪里！是返失物呀。昨天警察特意来告诉我，失盗的东西找到了，叫去认领。”		C	C
358		吾輩も日本の猫だ*から*多少の愛国心はある。	413		咱家总算是个日本猫，多少有点爱国心。	C	C
360	こっちは心配だ*から*二度目にまたおこすと、		416	我担心，◆才◆又叫了一遍。		B	B-6
361	必要なもの*から*会社も存在しているのだろう。		417	◆只因◆有必要，保险公司◆才◆存在。		A	A-33
362	昨日迷亭さんが来て悪口をいったもの*から*、思ったほど利かないかも知れない。		418	昨天迷亭先生来，说了些他的坏话，◆因此◆，也许不会像想象那样奏效了。”		A	A-37
363	あの先生が、あんな長い顔なんでしょう。そうして天神様のような髯を生やしているもんだ*から*、みんな感心して聞いていてよ。」		419	那位先生是一张大长脸吧？还长着一副天父一般的胡须。◆所以◆大家都敬佩地洗耳恭听。”		A	A-36
363		しかし途中で口を出されたもの*から*、続きを忘れてしまって、あとが出て来ない。	420		但是，◆因为◆敦子是半路插嘴，◆使◆丫丫忘了下文，讲不下去了。	A	A-6
364	「ええ、それでその男が疲れてしまって、うちへ帰って寝てしまった*から*、町内のものはまた相談をしたんですね。」		421	“是呀。那个男子筋疲力尽，回家睡觉去了。◆所以◆，街上的人们又商量起来。”		A	A-36
364	そこがあいにく馬や車を通る大変賑やかな場所だもんだ*から*邪魔になって仕様がないうね、		421	偏偏那地方是车水马龙的热闹场所，石像像是个障碍。		C	C
364	地藏だって食意地が張ってる*から*牡丹餅で釣れるだろうと思ったら、		421	他以为地藏菩萨也一定馋嘴，用豆馅粘糕就会使他上钩。		C	C
365	「利口な人は二度共くじった*から*、その次には贖札を沢山しらえて、		422	“聪明人两次失败，又造了一些伪钞，		C	C
366	私ならきつと片づけて見せませ*から*ご安心なさい		422	“看来我挪走吧。请放心。”		C	C
367	車夫やゴロツキは幾日でも日当になる事だ*から*喜んで騒いでいましたとさ」		424	可是脚夫和无赖不管多少天，反正挣日薪，◆就◆就◆就◆高兴得吵了下去。”		B	B-1
367	法螺吹きもしようがない*から*、とても私の手際では、あの地藏はどうする事も出来ませんと降参をしたそうです」		424	吹牛大王毫无办法。据说他认输，说：“凭我这点本事，对地藏菩萨是莫可奈何的哟！”		C	C
367	「それからね、いくら毎日毎日騒いでも験が見えない*ので*、大分みんなが厭になって来たんですが」		424	“后来呀，不论怎么天天吵闹，也并不灵验，人们都有些厌倦了。”		C	C
368	明治の代は男子といえども、文明の弊を受けて多少女性的になっている*から*、よくいらざる手数と労力を費やして、		426	在这明治年代，即使男子，受到文明的不良影响，多少也变得像个女人，◆因此◆，常常浪费些不必要的过程和精力		A	A-37
368	人間は魂胆があればあるほど、その魂胆が崇って不幸の源をなす*ので*、多くの婦人が平均男子より不幸なのは、全くこの魂胆があり過ぎるからである。		427	人啊，心眼越多，心眼就越是怂恿着你。胆大妄为，形成不幸的源泉。多数妇女平均来说都比男人不幸，就怪心眼太多了。		C	C
368		「雪江さん飄然と、馬鹿竹のお友達？」ととん子が肝心なところで奇問を放った*ので*、細君と雪江さんはどっと笑い出した。	425		“雪江姐！‘飘然’，是傻阿竹的朋友？”敦子正在紧要关头发问，惹得妈妈和雪江爆发了一阵笑声。	C	C
368	私が斯様な御話をわざわざ致したのは少々考がある*ので*、こう申すと失礼かも知れませんが、		426	我特意说了上述故事，是无原因的。不过，说出口来，也许很失礼。		C	C
369	多くの婦人が平均男子より不幸なのは、全くこの魂胆があり過ぎる*から*である。		427	多数妇女平均来说都比男人不幸，◆就◆怪心眼太多了。		B	B-1
370	ただ婦人会だ*から*傍聴に来たの。」		427	◆只因◆是妇女开会，◆才◆去旁听的。		A	A-33
371	「そんな人がある*から*、いけないんですよ。」		428	◆正因为◆有这样的人，事情◆才◆糟糕……		A	A-48
371	あの方は寒月さんのとこへ御嫁に行くつもりなんだ*から*、そんな事が世間へ知れちゃ困るでしようにね。」		429	她想要嫁给寒月先生的，那封信若被人们拆开，岂不糟糕？”		C	C
372	「どうですか、あの方は学校へ行って球ばかり磨いていらっしやる*から*、大方知らないでしょう。」		429	“谁知道呢。那位先生整天到学校去磨玻璃球，大约不清楚吧！”		C	C
373	水道橋を渡るのがいやだ*から*、どうしようかと思ってるの。」		430	我讨厌过水道桥，正发愁哪！”		C	C
373	「油壺なものか。そんな趣味のない事を云う*から*困る」		431	“哪里是什么油壶？说那种没趣的话，真糟！”		C	C
374	待ってるのが退屈だ*から*、あすこいらを散歩しているうちに堀り出して来たんだ。」		432	是◆因为◆等得太无聊，◆就◆在那一带闲逛，这中间在地里挖出来的呀。		A	A-4
376	「御前が繰り返す*から*仕方ないさ。」		435	是◆因为◆你一句话翻来覆去的，我有什么办法。		A	A-1
376	「お前などは百も二百も生きる気だ*から*、そんな呑のん気な事を云うのだが」		434	“你是想活一百年、二百年，◆因此◆才◆那么四平八稳的？”		A	A-37
376	「いらないと云う*から*、選せと云うのさ。ちっとも苛くはない」		434	“你说不要，我◆才◆叫你还的呀！一点也不刻薄。”		B	B-6
376	「いらないと云う*から*選せと云うのに苛い事があるものか」		434	“…你说不要我◆才◆叫你还给我，这有什么刻薄的？”		B	B-6

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
376	「そんなら還すがいい。ちょうどん子が欲しがってる*から*、あれをこっちへ廻してやろう。今日持って来たか」		434	那就还给我好啦。刚好教子要。◆就◆给她吧！今天带来了吧？”		B	B-1
377	「驚ろいたな。没分曉で強情なんだ*から*仕方がない。」		435	“怪啦！又混又笨，真没办法！”		C	C
377	「よくってよ、どうせ無教育なんです*から*、何とでもおっしやい。」		435	“算啦！反正我少教育！随便你说吧！”		C	C
378		平生は大方の人が大方の人である*から*、見ても聞いても張合のないくらい平凡である。	436		素日平常的人都很一般。◆因此◆，听其言、观其行，无不庸庸碌碌。平平凡凡。	A	A-37
378		幸にして主人のように吾輩の毛をややともすると逆さに撫でたがる旋毛曲りの特家がおった*から*、かかる狂言も拜見が出来たのであろう。	436		幸而咱家有一个动不动就逆抚猫发的别扭的怪主人，◆才◆得以欣赏这出好戏！	B	B-6
379		青坊主に刈ってさえ、ああ大きく見えるのだから*、主人のように長く伸ばしたら定めし人目を惹く事だろう。	437		即使剃个秃子，脑袋还不见小，若是像主人那样蓄起长发，◆就◆会更引人注目。	B	B-1
379		ところを生れ得て恭謙の君子、盛徳の長者であるかのごとく構えるのだから*、当人の苦しいにかかわらず傍から見ると大分おかしいのである。	437		他坐在那里，仿佛是个适得其所的谦恭君子或盛徳長老；谁管他自己是否吃苦头，反正从旁看来，样子非常滑稽。	C	C
380		塵積って山をなすと云う*から*、聚々たる一生徒も多勢が集合すると侮るべからざる団体となって、排斥運動やストライキをしでかすかも知れない。	438		常言说：“积土成山。”区区学生，如果大量纠集起来，也会成为不可欺侮的团体，说不定会搞起抗议运动或罢工的。	C	C
380		実を云うと、正式に坐った事は祖父さんの法事の時のほかは生れてから滅多にない*から*、先っきからすでにしびれが切れかかって少々足の先は困難を訴えているのである。	438		说实话，除了为他爷爷举办祭祀活动外，他有生以来还很少在座垫上端端正正坐过。◆因此◆，他早已坐得两腿发麻，脚尖有点受不住了。	A	A-37
381		主人一人に対してすら痛み入っている上へ、妙齢の女性が学校で覚え立ての小笠原流で、乙に気取った手つきをして茶碗を突きつけたのだから*、坊主は 大に苦悶 の体に見える。	439		但是现在，连面对主人都惴惴不安，何况这位妙龄少女又采取了在学校学会的小笠原派敬茶方法，以硬装文雅的手式递上茶来，这◆使◆秃小子显得十分局促不安。	B	B-5
381		ことに先刻の無念にはらはらと流した一滴の紅涙のあとだから*、このにやにやがさらに目立って見えた。	439		尤其她刚刚气愤得洒下一滴热泪，这嗤嗤一笑使她显得更加妩媚。	C	C
381		実はこの大頭は入学の当時から、主人の眼についているんだ*から*、決して忘れるどころではない。	440		说真的，这个大脑袋学生，从入学那天起，主人就见过的，决不会忘记。	C	C
382		。元来不人望な主人の事だから*、学校の生徒などは正月だろうが暮だろうがほとんど寄りつた事がない。	440		主人原是个不受欢迎的人，◆所以◆，学生们不论年初岁末，几乎从不登门。	A	A-36
382		仕方がない*から*主人からどうとう表向に聞き出した。	441		没办法，主人◆只好◆公开问：	B	B-9
383	「何がって、はなはだ困るもんです*から*、来たんです」		442	“什么事？非常挠头，◆所以◆才来。”		A	A-36
383		先方は依然として俯向になつてる*から*、何事とも鑑定が出来ない。	442		但他依然低着头，什么也看不出。	C	C
385	「あすこの娘がハイカラで生意気だ*から*艶書を送ったんです。」		444	“他家女儿又时髦，又骄傲，◆就◆给她送了情书。”		B	B-1
386	「ただみんながあいつは生意気で威張ってるて云う*から*、からかってやったんです」		444	“◆只因◆大家都说她骄傲，摆架子，◆才◆要调戏她的。”		A	A-33
386	「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、それにお母さんが継母です*から*、もし退校にでもなろうもんなら、僕も困っちゃうです。」		445	“老师！我老爹是个非常唠叨的人。何况老娘是个继母，我如果被开除，那可糟糕。”		C	C
387		吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せをして、その鉢合せが波動を乙なところに伝える*から*ではない。	446		咱家此时此刻◆之所以◆对武右卫门、主人、女主人和雪江感兴趣，并不单纯◆是由于◆外部事件互相冲突，及其冲突的波环又向着微妙之处延伸。	A	A-45
387		その時は吾輩もこんないたづらを書くのは気の毒だ*から*すぐさまやめてしまうつもりである。	446		那时，咱家也就不忍心再写这些混话了，一定立刻停笔。	C	C
388		拙だ*から*珍重されたい。	447		◆既◆拙，◆便◆不被看重；	A	A-30
388		吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せをして、その鉢合せが波動を乙なところに伝える*から*ではない。実はその鉢合せの反響が人間の心に個々別々の音色を起す*から*である。	446		咱家此时此刻之所以对武右卫门、主人、女主人和雪江感兴趣，并不单纯是由于外部事件互相冲突，及其冲突的波环又向着微妙之处延伸，老实说，是◆由于◆其冲突的反映在人们的心里擦发了各种不同的音色。	A	A-15
389		珍重されない*から*、内部の冷淡を存外隠すところもなく発表している。	447		不被看重，◆便◆将内心中的冷漠出乎意料、毫不掩饰地倾泻出来。	B	B-2
389		人が失礼をした時に怒るのを気が小さいと先方では名づけるさうだ*から*、そう云われるのがいやならおとなしくするがよろしい。	449		以为正在别人失礼时恼火，人家会说他小器。若是不愿落个这等名声，还是稳重些好。	C	C
391		別に分別の出所もない*から*監督と名のつく先生のところへ出向いたら、どうか助けてくれるだろうと思って、いやな人へ大きな頭を下げにまかり越したのである。	449		苦痛之余，又想不出什么好主意，这时想到：如果去班主任老师家，也许能有点办法。于是，将自己的大脑袋硬是运到他所讨厌的这个家里来。	C	C
392		例のごとく鼠色の、尻につぎの中つたずまんを穿いているが、これは時代のため、もしくは尻の重いために破れたのではない、本人の弁解によると近頃自転車の積古を始めて局部に比較的多くの摩擦を与える*から*である。	451		他依然穿着那条后腿上落了补丁的耗子皮色的裤子。那条裤子并不是由于年深月久或寒月先生的屁股太沉才磨破了的。据本人辩解，是◆因为◆近来他开始学骑自行车，对裤子的局部摩擦过多所致。	A	A-1
395	あの鳴き声は昼でも理科大学へ聞えるくらいなんです*から*、深夜闇寂として、四望人なく、鬼気肌に逼って、魑魅鼻を衝く際に……」		452	那叫声，即使白天也能传到理科大学。到了夜阑人静、四顾无人、鬼气袭身、魑魅扑鼻的时候……”		C	C
396	「貰うかも知れない*から*構わないんです。」		457	“◆正因为◆我说不定会娶她，◆所以◆才没羞着脸嘛。”		A	A-46

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
396	「それがさ、冗談にしたらんだ。あの娘がハイカラで生意気だ*から*、からかってやろうって、三人が共同して……」		456	“这嘛，是开了个玩笑。他们三个人，认为金田小姐又摩登，又骄傲，◆就◆想要笑她一番。”		B	B-1
396	「全く頭が大き過ぎます*から*そんな余計な質問をするんでしよう。」		455	“全怪脑袋太大、◆才◆提出那类多余的问题。”		B	B-6
397	「それならそれでいいとして、当人があとになって、急に良心に責められて、恐ろしくなったもの*から*、大に恐縮して僕のうちへ相談に来たんだ」		457	“如果真的是这样，也就没什么了。可是，写情书的人事后良心发现，害怕啦。谨慎谨慎，跑到我家来讨个主意。”		C	C
398	「何、これが時代思潮です、先生はあまり昔風だ*から*、何でもむずかしく解釈なさるんです」		458	“不，这是时代思潮。先生太守旧、◆所以◆，把任何事情都说得严重。”		A	A-36
398	実は二三日中にちよつと帰国しなければならぬ事が出来た*から*、当分どこへも御伴は出来ません*から*、今日は是非いっしょに散歩をしようと思って来たんです」		459	“两三天内我要回一趟老家，◆因此◆不论去哪儿都不能奉陪。今天是抱着一定要一同去散步的目的才来的。”		A	A-37
398	実は二三日中にちよつと帰国しなければならぬ事が出来た*から*、当分どこへも御伴は出来ません*から*、今日は是非いっしょに散歩をしようと思って来たんです」		459	“两三天内我要回一趟老家，◆因此◆不论去哪儿都不能奉陪。今天是抱着一定要一同去散步的目的才来的。”		C	C
399	「さあ行きましょう。今日は私が晚餐を煮ります*から*、—それから運動をして上野へ行く*とちよつと好い刻限です*と*しきりに促がすもの*から*、主人もその気になって、いっしょに出掛けて行った。」		459	“好啦，走哇！今天我请你吃晚饭。然后活动活动，到达上野的时辰刚好是最佳时刻。”◆由于◆寒月频频催促，主人也动了心，便一同出发了。		A	A-15
400		吾輩は世間が狭い*から*碁盤と云うものは近來になって始めて拝見したのだが、	461		咱家阅历太浅，棋盘这玩意儿是最近才见到的。	C	C
401	「禅坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、本因坊の流儀じゃ、あるんだ*から*仕方ないさ」		462		“也许出家人下棋没有这份规矩。但是，按‘本因坊’流派的下法，可就这份规矩，有什么法子呢。”	C	C
401		盤の広さには限りがあつて、横堅の目盛りは一手ごとに埋って行くのだ*から*、いかに呑気でも、いかに禅機があつても、苦しくなるのは当り前である。	462		但是，棋盘的大小是有限的。每填一个棋子儿，横竖格就要减少一个，◆因此◆，再怎么自在逍遥，再怎么神机妙算，也要陷于困窘，那是自然的。	A	A-37
403	「実は四日ばかり前に国から帰つて来たのですが、いろいろ用事があつて、方々馳けあるいていたもの*から*、つい上がられなかったのです」		464	“老实说：四天前我从故乡回来。◆因为◆有很多事要办，四处奔波，◆以至◆没能来府上拜访。”		A	A-9
404	「入れる所がなかった*から*、ヴァイオリンといっしょに袋のなかへ入れて、船へ乗つたら、その晩にやられました。」		466	◆因为◆没地方放，◆就◆和小提琴一块儿装进行李袋里，上船那天晚上就被耗子咬了。		A	A-4
404	「なに鼠だ*から*、どこに晩でもそそつかしいのでしょう。」		466	“唉，耗子嘛，不管住在哪儿，也是冒失的。”		C	C
405	剣呑だ*から*夜は寝床の中へ入れて寝ました」		466	“我看危险，夜里◆就◆接着它睡了。”		B	B-1
405	「ヴァイオリンは大き過ぎる*から*抱いて寝る訳には行かないんです*が……」		466	小提琴太大，接着睡是办不到的……”		C	C
406	——寒月君、君のヴァイオリンはあんまり安い*から*鼠が馬鹿にして喰らんだよ、		468	寒月君，你的小提琴太廉价，◆所以◆耗子都欺负，把它咬啦。		A	A-36
406	人間の古物でも金田某のごときものは今だに流行しているくらいだ*から*、ヴァイオリンに至つては古いほどがいいのさ。		468	即使人里的古董，不是还有金田者流，至今也还走运吗？至于小提琴，那是越旧越好……		C	C
406	「勝たなくても、負かなくても、相手が釜中の章魚同然手も足も出せないの*から*、僕も無聊でやむを得ずヴァイオリンの御仲間を仕るのさ」		467	“别管我要输还是要赢，反正对方已经成了釜中之鱼，手脚全都动不得了。我感到无聊，不得已才加入小提琴这一伙的。”		C	C
407	仕方がない*から*、ここへ一目入れて目にしておこう」		468	没办法，在这儿放个儿子，填上个空吧！」		C	C
408	「同じ芸術だ*から*詩歌の趣味のあるものはやはり音楽の方でも上達が早いだろうと、ひそかに恃むところがあるんだが、どうだろう」		469	“同样是艺术嘛。爱好诗歌的人，学起音乐来，一定会进步得快吧？所以，我自觉心中有数。怎么样？”		C	C
409	不思議に思つて、聞いて見たら、灰吹きなどは裏の敷へ行つて切つて来れば誰にでも出来る*から*、売る必要はないと澄まして答えたそうだ。		471	他很奇怪，一打听，人家心平气和地说：烟盘啊，只要到后边的竹林里去砍竹子一节，谁都能够做。◆因此◆，没有必要买它。		A	A-37
409	ことに私のおつた学校は田舎の田舎で麻裏草履さえないと云うくらいな質朴な所でした*から*、学校の生徒でヴァイオリンなどを弾くものは勿論一人もありません……		470	尤其我们那个学校，简直是乡下的乡下，筒朴得连穿麻里草鞋的人都没有，至于学校，当然没有一个人拉小提琴……”		C	C
410	男だ*から*あれで済むが女があればさぞかし困るだろう」		472	若是男子倒◆也◆无所谓，可是女人弄成那副样子，可够一瞧的吧？”		B	B-3
410	一代の才人ウェルテル君がヴァイオリンを習い出した逸話を聞かなくっちゃ、先祖へ濟まない*から*失敬する」		472	如果不听一代才子维特先生自学小提琴的轶事，那就对不起列祖列宗！失陪了。”		C	C
410	「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがまた非常に頑固なので、少しでも柔弱なものがおつては、他県の生徒に外聞がわるいと云つて、むやみに制裁を厳重にしました*から*、ずいぶん厄介でした」		472	“地方风俗本就如此，故乡的人们又非常顽固。只要有一个人软弱一点儿，他们就说：这在其他县份的学生面前名声不好，便胡乱地从严重处，可麻烦啦。”		C	C
410	「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがまた非常に頑固な*ので*、少しでも柔弱なものがおつては、他県の生徒に外聞がわるいと云つて、むやみに制裁を厳重にしました*から*、ずいぶん厄介でした」		472	“地方风俗本就如此，故乡的人们又非常顽固。只要有一个人软弱一点儿，他们就说：这在其他县份的学生面前名声不好，便胡乱地从严重处，可麻烦啦。”		C	C
411	夫婦の愛はその一つを代表するもの*から*、人間は是非結婚をして、この幸福を完うしなければ天意に背く訳だと思ふんだ。		474	◆因为◆夫妻之爱代表某一个方面，◆所以◆我想，人必须结婚，实现那种幸福，否则便是违背了天意……		A	A-7

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
411	「だって一國中ことごとく黒いのだから*仕方ありません」		472	“可，家乡人全都那么黑，有什么办法！”		C	C
412	「ともかくも我々未婚の青年は芸術の靈氣にふれて向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分からないです*から*、まず手始めにヴァイオリンでも習おうと思って寒月君にさっきから経験譚をきいているのです」		474	“总之，我们未婚青年必须接近艺术的灵性，开拓向上的道路，否则，就不能了解人生的意义。◆为此◆，我以为，首先必须从小提琴学起，所以刚才才请寒月君讲讲经验谈的。”		A	A-42
412		東風君は禅宗のぜの字も知らない男だから*頼と感心したようすもなく	475		可惜东风连个禅字怎么写都不知道，◆所以◆看来，他丝毫都无动于衷。	A	A-36
413	「へえ、そうかも知れませんが、やはり芸術は人間の渴仰の極致を表わしたものだと思います*から*、どうしてもこれを捨てる訳には参りません」		475	“噢？也许你说得对。但是我想，还是艺术才标志着人们渴慕的最高境界，◆因此◆，我无论如何也不肯放弃它。”		A	A-37
413	で今話す通りの次第だ*から*僕もヴァイオリンの稽古をはじめるまでには大分苦心をしたよ		475	像刚才说过的那样，我到开始学小提琴的时候，已经费了千辛万苦。		C	C
413	金も前から用意して溜めた*から*差支えないのですが、		475	钱也早就留心攒够了，不成问题。		C	C
413	「狭い土地だ*から*、買っておればすぐ見つかります。」		475	“地面太小，如果买来，立刻就会被发现。”		C	C
414	女学校の生徒は課業として毎日ヴァイオリンを稽古しなければならぬのです*から*、あるはずだ。		476	作为课程，女学生必须天天练琴，◆因此◆，自然有小提琴。		A	A-37
415	国のものは揃って泊りに温泉に行きました*から*、一人もいません。		478	乡亲们全都到温泉去了，准备外宿，村里一个人也没有。		C	C
415	だから店でもあまり重きをおいていない*ので*、二三棧いっしょに店頭へ吊るしておくのです。		476	因此，商店也并不重视，将二三把琴绑在一起，吊在门市里。		C	C
416	仕方がない*から*頭からもぐり込んで、眼を眠って待って見ましたが、		478	没办法，◆只好◆把头缩进被窝，闭上眼睛等待。		B	B-9
417	「先生はどうも性急だ*から*、話がしにくくて困ります」		480	“先生太性急，故事◆就◆讲不下去，真发愁！”		B	B-1
417	「仕方がない*から*、床を出て障子をあけて 椽 側へ出て、渋柿の甘干しを一つ取って食いました」		478	“没办法，我跳下床，拉开纸屏，到了檐廊，拿了柿饼吃了。”		C	C
418	「そろう日が暮れなくちゃ聞く方も困る*から*やめよう」		481	太阳总不落，听众也难受，那◆就◆结束吧！”		B	B-1
418	「そうだろう、芸術家は本来多情多恨だ*から*、泣いた事には同情するが、		481	“可能是的，艺术家本来就多愁善感。你落泪，我同情。		C	C
418	どうしても日が暮れてくれないものだ*から*困るのさ」		481	太阳怎么也不肯落，愁死个人。”		C	C
418		東風君は人がいい*から*、どこまでも真面目で滑稽な挨拶をしている。	481		东风是个好人，应酬中总是严肃而又滑稽。	C	C
418	「ところがそう行かない*ので*、私が最後の甘干しを食って、もうよかろうと首を出して見ると、相変らず暑い秋の日は六尺の障子へ一面にあたって……」		480	“并非如此，◆所以◆我吃了最后一个柿饼，以为差不多了，探出头来一看，依然是秋日烈焰洒满了六尺高的纸屏……”		A	A-36
418	「いよいよ夜に入った*ので*、まず安心とほっと一息ついて鞍懸村の下宿を出ました。」		481	“渐渐夜深了，我总算放下下心来，舒了口气，走出鞍悬村宿舍。”		C	C
418		「それは好都合だ」と独仙君が澄まして述べられた*ので*一同は思わずどっと噴き出した。	481		独仙板着脸孔说：“这就对了。”逗得大家不由地哈哈大笑。	C	C
420	私は性来 騒々しい所が嫌です*から*、わざと便利な市内を避けて、人迹稀な寒村の百姓家にはしらく蝸牛の庵を結んでいたのです……」		481	◆因为◆咱家生来不喜欢喧嚣之地，◆才◆特意远离交通便利的市内，在人迹罕见的荒村结成蝸牛式的草庐……”		A	A-2
420	「楽器のある店は金善即ち金子善兵衛方です*から*、まだなかなかです」		483	“卖乐器的商店，主人是金善，也就是金子善兵卫先生，◆所以◆，距买到手还远着呢。”		A	A-36
420	「またかんかんか、君のかんかんは一度や二度で済まないんだ*から*難渋するよ」		483	“又是火辣辣的。看来你的火辣辣，一两次是说不完的。这可麻烦啦！”		C	C
421	「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のかんかんです*から*、別段御心配には及びません。……」		483	“哪里，这回的火辣辣，仅仅火辣辣那么一回，请别太担心。”		C	C
421	まだ買えないんです*から*仕方ありません」		484	“一直还没买嘛，有什么办法！”		C	C
422	「ただの人なら千が二千でも構いませんがね、学校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持って徘徊しているんだ*から*容易に手を出せませんよ。」		484	“如果是一般人，二千人、三千人也无所谓。可是有学生挽着袖子，拄着好大的文明杖在徘徊哪，这◆就◆轻易下不得手。”		B	B-1
422	「東風君、僕はその時こう思ったね。とうていこりゃ宵の口は駄目だ、と云って真夜中に来れば金善は寝てしまう*から*なお駄目だ。」		485	东风君，当时我是这么想的：夜幕乍垂时分，毕竟是不行的，请又说回来，如果是深夜，金善老板就入了梦乡，那更不行。		C	C
423	仕方がない*から*相当の時間がくるまで市中を散歩する事にした。		486	没办法我◆便◆在街里闲逛了很长时间。		B	B-2
424	犬に比較したのは先生の冗談だから*から*気に掛けずに話を進進したまえ」		486	至于将你比作狗，那是迷亭先生的一句玩笑，希望你切莫介意，快快讲下去吧！”		C	C
425	夜寒の頃です*から*、さすが目貫の両替町もほとんど人通りが絶えて、向からくる下駄の音さえ淋しい心持ちです。		488	◆由于◆正是寒夜时分，就连繁华的两替街都几乎不见人影，连迎面响来的木屐声都显得凄凉。		A	A-15
425	みんな丈夫に念を入れて持ち上げてごさいますと云います*から*、蝸牛口のなかから五円札と銀貨を二十銭出して用意の大風呂敷を出してヴァイオリンを包みました。		489	“喂，全是一个价。”他还说做得没问题。我◆便◆从钱包里掏出五圆的一张票子，用准备好的一个大包袱皮将小提琴包了起来。		B	B-2
426	顔は頭巾でかくしてある*から*分る気遣はないのですけれども何だか気がせいと一刻も早く往来へ出たくて堪りません。		489	“我的脸◆因为◆用大衣帽子裹着，他是不可能看清的，但是，总觉得心慌意乱，恨不得立刻窜到大街，”		A	A-1
426	「根気はどこにか、ここでやめちや仏作って魂入れずと一般です*から*、もう少し話します」		490	坚持不坚持的，暂且不提。假如就此收场，那等于修了佛像却忘了给它注入灵魂，我◆就◆再道口吧！”		B	B-1

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
428	僕の所へは大分人が遊びにくる*から*誠多な所へぶらさげたり、立て懸けたりするとすぐ露見してしまう。		490	我的宿舍常有人来玩, 如果在一般地方挂起来或是撮着, 立刻就露馅儿。		C	C
429	論より証拠音が出るんだ*から*、小督の局も全くこれでしつしたんだからね。		493	当年*只因*发出了声音, 小督局*才*败露了。		A	A-33
429	ちょうど木槿垣を重隔てて南隣りは沈瀬組の頭領が下宿しているんだ*から*剣呑だよね。		493	刚好只隔一道木槿篱笆, 南邻便住着渣滓党的头目, 多险哪!”		C	C
430	とこを人の味淋だと思つて、一生懸命に飲んだものだから*から*、さあ大変、顔中真赤にはれ上つてね。		494	但是, 他觉得是别人的酒, 就痛饮一口气,*所以*呀, 荷, 满脸通红。		A	A-36
430	「おや本を読んでいる*から*大丈夫かと思つたら、やはり聞いてるね。		494	噢, 我以为你在看书。胡诌两句也没事, 不曾想, 你还是听到了。		C	C
430	まあ相宿だ*から*呉服屋だろうが、古着屋だろうが構う事はないが。		494	反正同宿, 管他是布疋商还是估衣商的。		C	C
431	「衣装道具なら見せびらかすのだが、煙草だ*から*呑みびらかすのさ」		495	形容炫耀服装家具叫做‘晃眼’, 那么, 炫耀吸烟,*只好*叫做‘晃嘴’了。”		B	B-9
431	「奴さん手拭をぶらさげて湯に出掛けた*から*、呑むならここでと思つて一心不乱立つてつづけて呑んで、ああ愉快だと思つてもなく、障子がからりとあいたから、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」		496	“我看那老头儿拎着条毛巾洗澡去了, 心想:要吸, 就趁现在! 我便不顾一切地大口猛吸起来。啊, 真过瘾。不大一会儿, 纸屏哗的一声开了。我一惊, 回头一看, 来者正是烟草的主人。”		C	C
431	そこで煙草を切らしたのだから*から*御難だね。		495	在这里断了烟, 那可是一场大难。		C	C
432	ちょうどいい時です*から*聞いて下さい。		497	正是故事高潮, 你*就*听下去吧!		B	B-1
432	「奴さん手拭をぶらさげて湯に出掛けたから、呑むならここでと思つて一心不乱立つてつづけて呑んで、ああ愉快だと思つてもなく、障子がからりとあいた*から*、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」		496	“我看那老头儿拎着条毛巾洗澡去了, 心想:要吸, 就趁现在! 我便不顾一切地大口猛吸起来。啊, 真过瘾。不大一会儿, 纸屏哗的一声开了。我一惊, 回头一看, 来者正是烟草的主人。”		C	C
433	寒月君のは、きいさいびいびい近所合壁へ聞えるのだから*から*大に困つてるところだ」		498	而寒月兄恐怕要拉得吱吱哇哇, 声震三邻五舍, 那*才*大大受不住呢。”		B	B-6
433	「君は無絃の素琴を弾する連中だから*から*困らない方なんだが、		498	你是拉‘无弦之素琴’的人, 没什么受不了的。		C	C
434	あくる日は天長節だ*から*、朝からうちにて、つづらの蓋をとって見たり、かぶせて見たり一日そわそわして暮らしてしまいました		498	第二天是天长节, 从早到晚我都在家, 把藤箱开了关, 关了开, 一整天都在心慌意乱中度过。		C	C
434		寒月君はねほけてあんな珍語を弄するのだから*から*鑑定した*から*、わざと相手にならないで話頭を進めた	498		寒月断定这是独仙睡眼朦朧中信口胡诌的奇谈,*便*故意不理他, 接着话头说:	B	B-2
436	山のなかだ*から*、人の住んでる所は樟脳を採る小屋が一軒あるばかり、池の近辺は昼でもあり心持のいい場所じゃない。		501	*因为*是山上, 有人烟的地方只有采樟脑的一间小屋。池塘近处即使白天也不是个赏心悦目的好地方。		A	A-1
436	平生なら臆病な僕のことだから*から*、恐しくつてたまらないところだけれども、		500	若在平时, 我本来胆子很小, 一定会被吓昏的。		C	C
436	幸い工兵が演習のため道を切り開いてくれた*から*、登るのに骨は折れない。		501	幸而工兵为了演习开辟了一条路, 攀登并不吃力。		C	C
436	ただヴァイオリンが弾きたいばかりで胸が一杯になつてんだ*から*妙なものさ。		500	满心想着的只有一件事——要拉小提琴, 多有意思。		C	C
436	こんな寒い晩に登つたのは始めてなんだ*から*、岩の上へ坐つて少し落ち着くと、あたりの淋しさが次第次第に腹の底へ沁み渡る。		501	这么晚登山, 还是第一次, 我坐在石板上, 稍微平静些, 四周的静寂便渐次袭上心头。		C	C
438	こう云う場合に人の心を乱すものはただ怖いと云う感じばかりだ*から*、この感じさえ引き抜くと、余るところは皎々冽々たる空霊の気だけになる。		501	此时此刻, 乱了方寸的只有恐怖感。如能除却这种恐怖感, 余下的全是皎皎清冽的空灵之气了。		C	C
438	迷亭君は誰かサンドラ・ペロニの講釈でも聞かかと思つたのか、何にも質問が出ない*から*で「サンドラ・ペロニが月下に擊琴を弾いて、以太利亜風の歌を森の中でうたつてるところは、君の庚申山へヴァイオリンをかかえて上るところと同曲にして異巧なるものだね。		503	迷亭料想会有人让他解释一下桑德拉·贝罗尼是怎么回事, 但是很意外, 别人什么也没有问,*便*不得不自做讲解了。“桑德拉·贝罗尼在月下弹起竖琴, 在森林中唱起意大利情调的歌曲。这和你抱着小提琴登上庚申山, 真可谓‘同曲异工’啊!		B	B-2
438	惜しい事に向うは月中の嫦娥を驚かし、君は古沼の怪狸におどろかさされた*から*、際どいところで滑稽と崇高の大差を来たした。さぞ遺憾だろう」		503	遗憾的是, 人家震惊了月里嫦娥, 老兄却怕透了池中怪狸。正是:人生紧要处, 出现了崇高与滑稽的巨大逆差。一定是很遗憾的喽。”		C	C
439	「全体山の上でヴァイオリンを弾こうなんて、ハイカラをやる*から*、おどかさるんだ」		504	本来你想到山上去拉小提琴, 这太洋气啦,*因此*才吓唬你哪!”		A	A-37
441	珠ももうあきました*から*、実はよそやかと思つてるんです」		504	磨玻璃球的事我已经有点厌倦。老实说, 我正在想是否算了。		C	C
441	要するに鉢合せをしないですむところをわざわざ鉢合せするんだ*から*余計な事さ。		506	一句话, 本来用不着撞墙, 却偏要瞎撞, 真是多此一举。		C	C
442	私の方でくれども、貰いたいども、先方へ申し込んだ事はあります*から*、黙ってれば済山です。		507	我从未向对方求婚, 或是表示要娶她,*所以*、默不作声就蛮好…		A	A-36
443	あんな烏金で身代をつつた向横丁の長籠なんかは業つく張りの、慾張り屋だ*から*、*いくつになつても失せる気遣はないぜ。		508	像对面胡同的那个‘长范’, 靠着放阎王债起家, 贪得无厌, 物欲横流, 活一千年也不会毙命的。		C	C
444	「探偵でない*から*、正直でいいと云うのだよ。		509	“*正因为*你不是密探, 我*才*说你坦率得招人喜欢。		A	A-48
444	そうしてこの自覚心なるものは文明が進むにしたがつて一日一日と鋭敏になつて行く*から*、*しまいには拳手一投足も自然天然とは出来ないようになる。		509	这种自觉意识伴随着文明进步, 一天天变得更加敏锐, 最终连一举手、一投足都要失去天真与自然了。		C	C

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
444	寝てもおれ、覚めてもおれ、このおれが至るところにつけまつわっている*から*、人間の行為言動が人工的にコセつくばかり、自分で窮屈になるばかり、世の中が苦しくなるばかり、ちょうど見合をする若い男女の心持ちで朝から晩までくささなければならぬ。		510	睡时不忘我，醒时不忘我，我字无处不缠身，弄得举步言行，无不矫揉造作，作茧自缚，使人间充满了辛酸，不得不以男女对相对看时的那种忐忑心情捱过晨昏。		C	C
444	探偵は人の目を掠めて自分だけうまい事をしようと云う商売だ*から*、勢自覚心が強くならなくては出来ん。		510	密探干的是掩人耳目、只顾个人行乐的营生，势必加强个人意识。		C	C
444	泥棒も捕まるか、見つかるか云う心配が念頭を離れる事がない*から*、勢自覚心が強くならざるを得ない。		510	而盗贼，他们念念不忘是否会被捕或被发现，势必个人意识强。		C	C
445	今の人はどうしたら己れの利になるか、損になるかと寝ても醒めても考えつづけだ*から*、勢探偵泥棒と同じく自覚心が強くならざるを得ない。		510	◆因为◆现代人不论是醒来还是梦中，都在不断地盘算着怎样对自己有利或不利，自然不得不像密探和盗贼一样加强个人意识。		A	A-1
445	今の人は己れを忘れるなと教える*から*まるで違う。		510	尔今，是教育人们不要忘我，完全翻了过来。		C	C
446	近頃じゃなかなか巧妙になつて*から*、勢自覚心が増してくるんだね。		512	近来变得非常巧妙，这更是由于个人意识增强的缘故。		C	C
446	「喧嘩も昔しの喧嘩は暴力で圧迫するのだから*から*かえって罪はなかったが、		512	就说打架吧！从前打架是以暴力进行压迫，反而不犯罪；		C	C
447	今の喧嘩は正にペーコンの格言通りに出来上つて*から*不思議だ。		512	今日争斗，正是遵循培根格言的产物，这可有点奇怪。		C	C
447	「娘は——娘は見た事がない*から*何とも云えないが		513	“小姐嘛，我没有见过，无从说起……”		C	C
449	死ぬのが厭だ*から*苦にするのではない、どうして死ぬのが一番かろうと心配するのである。		515	并非怕死◆才◆以死为苦，而是忧虑怎样死才最好。		B	B-6
449	「まあさ。議論だ*から*、だまって聞かぬがいい。		515	“喂，讨论嘛，别吭声，听着。		C	C
449	「まあさ。議論だ*から*、だまって聞いていろ。		515	喂喂，讨论嘛，别吭声，你听着。懂吗？		C	C
450	ただたいていのものは智慧が足りない*から*自然のままに放擲しておくうちに、世間がいつか殺してくれろ。		515	只是一般人◆因◆智力不足，◆便◆在听天由命的过程中惨遭社会的杀戮。		A	A-12
450	しかして己れの好むところはこれを人に施して可なる訳だ*から*、自殺を一步展開して他殺にしてもよろしい。		516	这等于说：己为所欲，施之于人。◆因此◆，为了扩大自杀效益，还可以进行他杀。		A	A-37
451	その時分の国民は生きてるのが苦痛だ*から*、巡査が慈悲のために打ち殺してくれろのさ。		517	到了那时，◆因为◆国民活得痛苦，警察以慈悲为怀，才予以格杀的。		A	A-1
451	「なぜって今の人間は生命が大事だ*から*警察で保護するんだが、		517	“为什么？如令人珍惜生命，◆所以◆◆靠警察来保护。”		A	A-36
451	もつとも昔と違つて今日は開明の時期である*から*槍、薙刀もしくは飛道具の類を用いるような卑怯な振舞をしてはなりません。		516	诚然，与往昔不同，尔今乃是开明时期，◆因此◆，不能再干那种舞刀弄枪或弓箭投矢等卑鄙手段。		A	A-37
451	ことに表の窮措大珍野苦沙弥のごときものは生きてござるのが大分苦痛のように見受けらるる*から*、一刻も早く殺して進ぜるのが諸君の義務である。		516	尤其眼前那个穷酸臭的珍野苦沙弥先生，只见他活得十分痛苦，要争取早一天杀了他，这便是诸君的义务。		C	C
451	もつとも少し気の利いたものは大概自殺してしまう*から*、巡査に打殺されるような奴はよくよく意気地なしか、自殺の能力のない白痴もしくは不具者に限るのさ。		517	当然，心眼快当些的人大多都已经自杀；要警察动手杀死的家伙们只有优柔寡断的人、缺乏自杀能力的白痴，或是残废。		C	C
452	真理に徹底しないものは、とかく眼前の現象世界に束縛せられて泡沫の夢幻を永久の事実と認定したがるものだ*から*、少し飛び離れた事を云うと、すぐ冗談にしてしまう」		517	不彻底掌握真理的人，总是被眼前的表面现象所束缚，爱把泡沫般的梦幻认定是永恒的真实；而稍微说得超脱些，便立刻被认为是笑谈。」		C	C
452	すると女などは浅臺なものだ*から*、そら鐘が鳴つたと云うので、めいめい河岸へあつまつて半褌半、半股引の服装でざぶざぶりと水の中へ飛び込んだ。		519	女人们都很浅薄：‘哟，钟响了’。纷纷聚集在岸边，只穿着小背心、短裤衩，劈哩噗哩跳进水里。		C	C
453	上等品だ*から*みんな高値にきまつてる。		519	◆既然◆是上品，自然要卖高价。		A	A-21
453	「それでさ、人間はただ眼前の習慣に迷わされて、根本の原理を忘れるものだ*から*、残念だがまあ見合せよう」		519	这嘛，说明人只被眼前习俗所迷惑，忘却了根本原理。不当心些可不行哟！」		C	C
453	六百元では手元に持ち合せがない*から*、残念だがまあ見合せよう」		519	只是手头没带那么多钱，很遗憾，只好作罢。」		C	C
455	「そら、そう云う人が現にここにいる*から*たしかなものだ。		521	瞧，这种人就在场，◆可见◆是千真万确的呀！」		A	A-41
455	「たとへばですね。今苦沙弥君が迷亭君が、君が無断で結婚したのが穏当でない*から*、金田とか云う人に謝罪しろと忠告したら君どうです。		521	比如现在苦沙弥兄或是迷亭兄忠告你说：‘你擅自和别人结婚，这有欠稳妥，快到金田家去请罪！’不知尊意如何？		C	C
456	弱くなるのは誰もありがたくない*から*、人から一毫も犯されまいと、強い点をあくまで固守すると同時に、せめて半毛でも人を侵してやろうと、弱いところは無理にも拗げたくなる。		523	强大起来都高兴；软弱下来人人扫兴。◆于是◆，一边固守强处：‘不许他人动我一根毫毛！’一边却又硬要扩大弱点：‘哪怕动他人半根毫毛也好。’		A	A-15
456	だから今の世は昔しと違つて、御上の御威光だ*から*出来ないのでと云う新現象のあらわれる時代です。		522	因此今非昔比，竟然出现了这样的新气象：◆正因为◆是权势显赫的官府，◆才◆落得尊可奈何。		A	A-48
456	個人が平等に強くなった*から*、個人が平等に弱くなった訳になる。		523	“◆因为◆◆个性普遍地增强，◆所以◆◆社会上等于个性普遍地减弱。”		A	A-7
456	まあわからずやの張本、馬金からすがねの長範先生くらいのもんだ*から*、黙って御手際を拝見していればいいが		522	不，是最大的糊涂虫！是放阔王债的长范先生！对这帮家伙，只要静观其变也就是了……”		C	C

原文		訳文					
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
457	「ヨーロッパは文明が進んでいるから日本より早くこの制度が行われてい		524	欧洲◆由于◆文明发达, 比起日本更早地实行了这一制度。		A	A-15
457	「しかし親子兄弟の離れたる今日、もう離れるものはない訳だから、最後の案として夫婦が分れる事になる。		524	然而, 在父子、兄弟都已分居的今天, 再也没有什么人需要分手, ◆于是◆, 最后的方案是夫妻分居。		A	A-15
457	「文明の民はたとい親子の間でもお互に我儘を張るだけ張らなければ損になるから勢い両者の安全を保持するためには別居しなければならない		524	但是, 对于文明人来说, 即使亲子之间, 如不任其自我扩张, 都觉得吃亏。◆因此◆, 为了保证双方的安生, 势必分居。		A	A-37
457	「親類はとくに離れ、親子今日に離れて、やっとな我儘しているようなものの個性の発展と、発展につれてこれに対する尊敬の念は無制限にのびて行くから、まだ離れなくては楽が出来ない。		524	“亲戚早已分手, 老少今日别居, 一直被压抑的个性得到发展, 以至随着个性发展而受到的尊敬将无限地扩展下去。◆因此◆, 再不分居, 就不会舒心了。”		A	A-37
457	「今の人の考ではいっしょになるから夫婦だと思ってる。それが大きくな見違えさ。		524	按现代人的观点, 男女同居◆便◆是夫妻, 但这是极大的判断失误,		B	B-2
457	「主張すべき個性もなく、あつても主張しないから、あれで済むのだが		524	即使有个性, 也并不强调, 如此◆也◆就一顺百顺了。		B	B-3
457	「苦しいから色々な方法で個人と個人との間に余裕を求める。		523	活得窘迫了, 人们都尽可能地自我膨胀。		C	C
458	「明治の御代に生れて幸さ。僕などは未来記を作るだけあって、頭脳が時勢より一二歩ずつ前へ出ているから、ちゃんと今から独身でいるんだよ。		525	生在明治时代是幸运的哟! 像我呀, 就因为写《未来记》, 头脑比当前形势先迈了一两步, ◆所以◆, 现在就干脆过起独身生活了。		A	A-36
458	「水と油が双方から働かせるのだから、家のなかは大地震のように上がった下があったりする。		525	◆因为◆这水和油是双相变动的, 家庭里◆就◆会像大地震一般颠得七上八下。		A	A-4
458	「その妻が女学校で行灯袴を穿いて牢平たる個性を鍛え上げて、東髪姿で乗り込んでくるんだから、とても夫の思う通りになる訳がない。		524	为人妻者, 都是在学校里穿着没有褶的和服裙裤, 练就了坚强的个性, 梳着西式发型嫁进门来的, ◆毕竟◆不能对丈夫百依百顺。		B	B-11
459	「芸術が繁昌するのは芸術家と享受者の間に個性の一致があるからである。		527	所谓繁荣艺术, 是◆因为◆艺术家和欣赏者之间个性上有些共同点吧?		A	A-1
459	「いやしくも人間の意義を完らしめんとするには、いかなる備を払うとも構わないから、この個性を保持すると同時に発達せしめなければならぬ。		526	为了实现人生真正的意义, 必须不惜任何代价保持并发展自己的个性。		C	C
459	「今哲学者が云った通りちゃんと滅してしまふから、仕方がないと、あきらめるさ。		527	然而, 现在按哲学家所说, 都要彻底消亡的, 又有什么办法? 只好绝望啦。		C	C
460	「人々個々のおの特別の個性をもつてるから、人の作った詩文などは一向面白くないのさ。		527	不, 并非因为你写的才没人看, 是◆因为◆人人都有自己独特的个性, 对别人的诗文压根儿不感兴趣。		A	A-1
460	「幸いに明治の今日に生れたから、天下が華って愛読するのだから、」		527	幸而你生在明治时期, ◆才◆“普天之下都爱读你的诗吧? 不过……”		B	B-6
460	「あんな作品はあんな個性のある人でなければ読んで面白くないんだから、仕方がない。		527	那种作品, 如果不是那种富有个性的人读, 是不会感兴趣的, 有什么办法。		C	C
461	「個性の発展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく滅多に寝返りも打てないから、大将少しやけになってあんな乱暴をかき散らしたのだね。		528	喘息在个性得到发展的十九世纪, 连对邻居都轻易不敢放心大胆地睡个好觉。◆因此◆, 那位老兄才豁了出去, 胡说八道起来。		A	A-37
461	「昔は孔子がたった一人だったから、孔子も幅を利かしたのだが、」		529	从前只有一个孔子, ◆因此◆孔子也很有权威;		A	A-37
461	「不平だから、超人などを書物の上だけで振り廻すのさ。		529	有牢骚◆才◆一味地在书本上卖弄超人哲学。”		B	B-6
461	「愉快な事実があつて、この愉快な事実を紙に写しかえたのだから、苦味はないはずだ。		528	这是因为有快活的事。把这些快活的事写在纸上, 也◆就◆没有苦涩味。		B	B-1
461	「それもそのはず、昔は一人えらい人があれば天下翕然としてその旗下にあつまるのだから、愉快なものさ。		528	这也难怪。从前是‘圣人出, 天下翕然汇于旗下。’真痛快!		C	C
462	「参考のためだから、おれが面白い物を読んで聞かせる。		529	为了供你们参考, 我念几句有趣的文字给你们听。		C	C
464	「いろいろ女の悪口があるが、その内には是非君の妻さいも道入る訳だから聞くがいい。		530	“咒骂了各种女人, 其中也一定包括你的妻子。◆所以◆, 你就听下去吧!”		A	A-36
464	「まだ四五ページあるから、ついでに聞いたらどうだ。」		532	“还有四五页, 接着听下去, 如何?”		C	C
464	「先生胃病は近來いいですか。こうやって、うちにばかりいなさるから、いかんたい。」		533	“先生近来胃病好些吗? 这样总是闷在家里, 行吗?”		C	C
464	「十六世紀のナッソ君の説です、御安心なさい。」		532	是十六世纪纳西的学说, 你放心好了。”		C	C
465	「どうしてもあんな所にいると、傍が傍だから、おのずから、そうなってしまうです。」		534	“还得上在那个地方, ‘近朱者赤’, 自然而然地就被熏陶成这样。”		C	C
466	「あなたが博士にならんものだから、私が貰う事にしました。」		534	到底没有当上博士吗? ◆因为◆您没有当上博士, ◆所以◆, 我就要了。”		A	A-7
468	「しかし先方は是非貰うてくれ貰うてくれと云うから、どうとう貰う事に極めました、先生。」		535	不是, 对方一再求我娶了她吧, 娶了她吧, 终于这◆才◆下决心娶她。		B	B-6
472	「先達でカーテル・ムルと云う見知らずの同族が突然大氣を揚げたので、ちよつと吃驚した。		540		然而前此, 有个叫卡提莫爾①的素不相识的同胞, 突然高谈阔论起来, 咱家有点吃惊。	C	C
473	「眼をあいしていると飲みにくいから、しっかりと眠って、またびちゃびちゃ始めた。」		542		睁着眼睛喝不舒服, ◆便◆死死地闭上眼睛, 又把吧吧嗒嗒舔起来。	B	B-2
473	「苦しいから爪でもって矢鱈掻いたが、」		543		太难受, 用爪乱挠一气;	C	C
474	「仕方ないから後足で飛び上つておいて、前足で掻いたら、がりりと音がしてわずかに手応があつた。」		543		没办法, 又用后爪往上窜, 用前爪挠。这时, 微微听到咕啞一声, 好痒露出头来。	C	C
	「いえ、こないだうちから国へ帰省していたもんですから、暫時中止の姿です。」		504	“不, 前此我◆因◆归乡省亲, 暂时中止。”		A	A-10

原文			訳文				
ページ	会話文	地の文	ページ	会話文	地の文	対訳	接続語No
		無理を通そうとする*から*苦しいのだ。	544		勉強硬干, ◆因此◆才痛苦。	A	A-37
		もぐれば苦しい*から*、すぐがりがりをやる。	543		扎猛子太难受, ◆便◆又咯吱吱地挠。	B	B-2
		であるとすれば、これから私の品性を侮辱するような事を自分でしてお目にかけます*から*、何とか云っちゃいやよと断わるのと一般である。	448		照此说来, 岂不等于事先声明:“我现在要做侮辱我自己品格的事给大家看, ◆却◆又不许别人说三道四。”	C	C
		落ちるのを遅くすると降りる*ので*、降りるのを早くすると落ちる事になる。	271		将落的速度减缓些就是降, 将降的速度加快些就是落。	C	C